



マンガ大賞2021決定!  
選考員コメント掲載!

マンガ大賞  
Cartoon grand prize  
2021 マンガ読みが選ぶ2020年の一推!!

## 「葬送のフリーレン」山田鐘人、アベツカサ

### 選考員コメント・1次選考

■ 勇者たちが魔王を倒して、世界が平和になったあとの、その勇者パーティのその後の物語。設定が新しいと感じたのが最初。物語はパーティの中で長寿であるエルフのフリーレン。年月が経つうちに、人間である勇者は年老い死んでしまう。フリーレンにとって仲間だった勇者の死。そこから、あの旅はなんだったのか、勇者のことをもっと知りたいと思う気持ちが強くなり、過去の旅をもう一度辿っていく。フリーレンが世界を旅する中で、何を感じ、何を得ていくのか丁寧に描かれていて、とても魅力高い作品です。命の儚さもあり、切なさもあり、それでいて優しさや温かさもある漫画。おすすめです。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

■ 通常の最終回から始まるファンタジー。頑ななエルフの心の変化が丁寧に描かれている。この漫画、ファンタジーだし描き込みも綺麗なのに週刊サンデー連載なんだ……とビックリもしました。

主婦 / 佐藤しのぶ

■ 寿命の違いによって生まれる、時間に対する意識の大きな差。これが物語の鍵にすることで、ともすればありがちになる王道ファンタジー世界での冒険劇から受け取る感情が、こんなにも優しく、尊く、そしてわくわくするものになるのかと驚かされる。穏やかなエピソードと、時折訪れる激しい戦いのそのどちらもが良質。タイトル回収の展開で、益々虜になった。読んでいて、現実でも物語の中でもあつという間に時が流れていく心地よさは、きっと多くの人が大好きになるはず。

会社員 / 伊東敬祐

■ 1巻目から絶対に投票しようと思っていました。ひとつの旅を終えたエルフ、フリーレンの葬送の旅。断片的に語られる思い出だけでより一層生き生きと魅力的に描かれていく過去の英雄たち。今を生きるフリーレンと旅の仲間たちもまた魅力的で、彼らの冒険譚もさることながら彼ら一人一人の人生を読んでいくことが楽しくてたまらない、そんな作品です。

会社員 / 津田圭

■ 勇者達が魔王を倒し冒険を終えたのちの話。そのパーティーにいた長寿のエルフが皆の死を見届け、そしてかつての仲間の痕跡をたどりつつ、彼らの残した弟子と共にまた旅に出る。人が順々にいなくなる寂しさと彼らとまた語り合いたいと願い旅を続けるフリーレン。全体的なトーンは明るいですが、皆がいないことの悲しさ。不思議な読後感を与える作品だ。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

■ とても馴染みのある世界観の「その後」から始まる物語。魔法使いのエルフ・フリーレンが、喪失していく過程でこれからどんな感情を知っていくのか最後まで見届けたい！

ロングランプランニング / 小森和博

■ エルフって本当にたくさんのマンガやゲーム、小説に出てきますが、エルフの時間軸で語られる作品は私は初めてで、すごく新鮮に感じました。魔族の描き方でも感じましたが、「種族が違えば感じ方は違う」という世界のあり方は、今後の展開も独特なものにしていくのではないかと期待してしまいます。

会社員 / 林礼春

■ “祭りの後”はいつも寂しい。寂しいけれど、世界が終わってしまうわけではなく、昨日の次には今日が来て、今日の次には……と連綿と続いてく。それが喜ぶべきことなのか、悲しむべきことなのか、ぐるぐる問いかけてくる一冊。ただ、悲しいだけでも、空しいだけでもなくて、巻を重ねるごとにおかしみが増していくことに救われるシリーズでもある。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- しみじみいい。はかないからこそ、よりよく営もうとしたい「人間」のよさが描かれたファンタジー。いつまでもこの作品が「評価される世界」であってほしいなと心から思います。

榊りプロプラス 商品部 / 池本美和

- 長生きのエルフを主人公にして、物語の後日談を描いていくという設定が斬新だと思いました。自分も長生き出来たらこういう価値観になるのかなあ、と考えながら読むのは面白いです。

バーテンダー / 村井真也

- ゆっくりと時間が流れていく、心が温まる良質なファンタジー。長い命をもつエルフのフリーレンが、仲間の死をきっかけに人を知ろうとしていく姿がたまらなく泣ける。全人類に読んで欲しい。

建材メーカー勤務 / 竹本慧

- 勇者パーティが魔王を倒した後日譚から物語がスタートしているという斬新な設定だけでなく、主人公を魔法使いのエルフに焦点をあてている漫画。長寿であり、少し人間と感性の違う超合理的なエルフが、寿命を終えた勇者や仲間たちのことを回想しながら進む物語は、淡々としているのですが、どこか人間にとって大事なことを感じさせてくれます。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- 長命のエルフと人間の交流を通して、雄大な時間の流れの中での人間の小ささと、それ故の輝きをゆっくりと掘り起こして見させてくれる。

医師 / 岸本倫太郎

- 人魚の肉を食べた女性が不老不死の身となって、それからは何度結婚しても夫は年を取って先に死んでしまう。女性は出家して尼となり、全国を旅して回り800歳になって姿を見せなくなる。日本に古くから伝わり、高橋留美子が『人魚シリーズ』にも取り上げられた八百比丘尼の伝説は、永遠の時を生き続ける苦悩や、そうした苦悩を知らず不老長寿を願ってやまない人間の愚かさを問うている。かたや不老長寿の身となり、こなた長くても100年に満たない人の身の2人の間に現れる離別の苦悩。山田鐘人が原作を書き、アベツカサが作画をしている『葬送のフリーレン』（小学館、454円）という漫画にも、そうした悲劇が描かれているのかと思って手に取ったら、少し肩すかしを食らった気分になるかもしれない。勇者と戦士と僧侶と魔法使いのパーティーが、10年の冒険を経て魔王を倒し、王都へと凱旋する。一行は讃えられ、王によって広場に彫像も建てられる。ファンタジーでよくある、勇者たちが世界の破滅に立ち向かう物語なら、これで終わりとなる場面から幕を開ける『葬送のフリーレン』という物語は、そうした設定自体が、ひとつの新しい視点をもたらす。繰り広げられる“その後”の物語では、ドワーフの戦士アイゼンも人間の勇者ヒンメルも、やはり人間の僧侶ハイターもそれぞれの人生を歩み始める。そんな中でエルフの魔法使いのフリーレンだけは、50年に1度降り注ぐ半世紀流星を見ながら、「50年後。もっと綺麗に見える場所知ってるから、案内するよ」とさざりと言う。人間だったら半生すら超えてしまう50年という年月を、明後日のように言ってしまうフリーレンは、見かけは誰よりも幼い少女姿だが、実は勇者のヒンメルも僧侶のハイターも知らない昔から生きていた。「50年も100年も彼女にとっては些細なものかもしれない」というヒンメルの言葉どおり、世界を旅して魔法の収集を続けたフリーレンが、王都へと戻って再会したヒンメルは、頭がはげ上がった老人になっていた。「老いぼれてる」とヒンメルに向かってそう言い放ったフリーレンの言葉には、エルフと違って早く年を取り、死んでしまう人間への慈しみや、仲間だったヒンメルに置いていかれる寂しさのようなものはなかった。そんなフリーレンのドライな言動に憤ることなく、受け入れてハイターやアイゼンらと1週間をかけて半世紀流星群を見に行くヒンメルにとって、フリーレンはどのような存在だったのだろう。生に限りのある人間でありながら、フリーレンのような不老長寿に固執するような醜さをヒンメルもハイターも見せない。定められた時を生きる人間たちが、それぞれの人生に対する感謝する意識が感じられる。八百比丘尼の物語のような嫉みの意識はそこにはない。人として生きる大切さを教わる。逆にフリーレンの方に、置いて行かれてしまった寂しさが浮かぶ。「…人間の寿命は短いわかってたのに……なんでもっと知ろうと思わなかったんだろう…」。1000年を生きた魔法使が、ようやく心を動かされたような場面だ。そこから20年経って、ハイターが引き取り育てていた、魔法使いを目指すフェルンという少女をフリーレンが弟子にしたのも、ヒンメルや

ハイターが人間として寿命に限りがあるからこそ抱く、自分が生きている間に誰かを育てたいという気持ち、誰かが生きている間に恩返しをしたいという気持ちの大切さに、気づいたからなのかもしれない。どこか浮き世離れたところがあるフリーレンと、ハイターから引き継いだフェルン、そしてアイゼンが育てていたシュタルクで繰り広げる旅路は、子供のようにとぼけたところがあるフリーレンの言動や、はるかに年下ながらも母親のようなフェルンのまっすぐさが面白く、コメディのように読んでいける。ずっとそんな調子でいくかと思われた矢先、現れた魔族との戦いになって、フリーレンの過去が浮かび上がる。「葬送のフリーレン」。タイトルにも関わる言葉が放たれて繰り広げられるハードな描写が、1000年という時間の重みとなって物語に固い地盤のようなものを形作る。単なるその後では終わらなさそうな、さらにこれからの物語を感じさせつつ、またしても続くのんびりとしてとぼけた展開を経て、どこへと向かっていくのか。先が楽しみで仕方がない。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 冒険ものとして後日譚がメインストーリーというファンタジーものとしては新しい切り口だと思いました。作画が素晴らしいことと、ファンタジーものなのに登場人物が悪い人がいないのでストレス無く読みふけることができました。

会社員 / 三浦佑樹

- いわゆる「日本 RPG」的セカイで魔王を倒した後から始まる物語。確かにどのゲームでもエルフやドワーフは長生きだし、その後が気になっていたよなあ……ゲーム終盤のクリアしようかどうか迷う切なさを乗り越えた直後の、ちょっと虚無感もある気持ちで読み始められます。なのでなんというか親目線というか、1話の勇者目線でそれぞれの生きざまを応援しながら読むことができます！おすすめ。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 人間とエルフなど種族による寿命の違いによる感じ方の違いや感情の綾をこれほど丁寧に描く作品はトールキン以来というのは言い過ぎにせよ、ともすればファンタジー界隈で雑に扱われる時間を真っ正面から描く傑作

住職・ライター / 蟬丸P

- 魔王を倒し、勇者一行の旅が終わり、それぞれの道を歩んだ『後日談』的な話。物静かな日常、平和って大事。。。

コミック担当 / 実松由夏

- 昨今増えたファンタジー系ジャンルですが、その中でも一味違う作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 追想の物語なのに、ちゃんと現在の時間軸で前向きに話が進んでいるのがすごい。ただ懐かしんでいるだけの話ではない。少年誌連載ではあるが、少年が面白いと感じるか疑問に思った。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 魔王討伐後の世界観というのは非常に新鮮。かつそこにエルフの「長寿」という特徴を活かした他の人間との時間軸の差分がストーリーにひねりを与えている

会社員 / 齋藤隼

- 主人公は長命種のエルフ。人間とエルフの時間感覚の違いから、生きてゆくことの儚さを感じさせ、思い出を大切にしたいと思わせてくれる作品です。舞台は剣と魔法の世界で、主人公のエルフは勇者たちと共に魔王を倒し、世界に平和をもたらしたところから話は始まります。時が過ぎてゆくにつれ、勇者たちは人々の記憶から少しずつ忘れ去られていく、その過程が静かに描かれます。主人公のエルフは冒険して行く中で今に繋がる軌跡を辿ってゆき、誰かと関わることで過去の絆を呼び覚ましてゆく、心温まるお話です。

デザイナー / 佐藤優

- なんて面白いマンガなんだ……。Amazon というか Kindle が、すごくしつこく「あなたにオススメ」と言ってくるので「ホンマかいな」と思いながら読んだのがキッカケだったのですが、ホンマでした。めちゃくちゃ好きです。皆まで言わない感とか含め、本当にたまらないです。切なく暖かく、やっぱり切ないですね。なんて面白いマンガなんだ。。。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 魔王を倒した勇者一行のその後を描いたファンタジーですが、なんと奥行きのある作品でしょうか！教えてくれた友人に感謝。寿命の長いエルフである主人公のフリーレンが、亡くしていったかつての仲間の思いを知り、人のことを知ろうと旅立つロードムービー。ですがただ切ないだけではなくユーモアもバトルも散りばめられていて、わりと淡々としてはいるけども決して起伏のない漫画ではありません。キャラクターもみんな魅力的だし作品世界やストーリーの軸もしっかりしていて、一見の印象よりもずっと骨太な漫画です。別れは失うことだけじゃないんだな、そのあとに得られる豊かさも感じられ、センチメンタルに偏ることなくしっかり漫画として読みごたえのある良質なエンタメです。幅広い年代の人に受け入れらる一作だと思います。

公務員 / 宇田川結衣子

## 選考員コメント・2次選考

- 魔王を打ち倒して凱旋する「冒険の終わり」から物語が始まり、極めて長命のエルフの女性魔法使い、フリーレンが主人公。長命だけに、時代が変わり、周囲が変わり、かつての仲間たちを見送る。フリーレンの物語は、常に「メメント・モリ」（死を思え）とばかりに、生とは、死とは…、と問われ続けます。限りある短い命だからこそ生を謳歌する人間を、どこかうらやましくも思っているように感じます。少年誌にこのようなマンガがあること、嬉しいです。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 勇者と戦士と僧侶と魔法使いのパーティーが、10年の冒険を経て魔王を倒し、王都へと凱旋する。一行は讃えられ、王によって広場に彫像も建てられる。ファンタジーでよくある、勇者たちが世界の破滅に立ち向かう物語なら、これで終わりとなる場面から、山田鐘人原作、アベツカサ作画の『葬送のフリーレン』というマンガは幕を開ける。“その後”の物語という新しい視点から描かれていくストーリーは、けれども勇者も僧侶も寿命を終えて鬼籍に入り、戦士も長命なドワーフながら老いは避けられず遠からず逝く運命にあって、讃えられたパーティそのものの“その後”の、偉大な勇者と讃えられたとか、偉大な僧侶と敬われたといった日々はあまり描かれない。“その後”のさらに“その後”に、ひとり魔法使いのフリーレンだけが1000年も長い時間を生きてきて、そしてまた始まる長い時間を過ごしていくという生の中で、短かった10年に体感した濃くて熱い交流の中から、得た思いなり変わった心情なりを描いていくようなストーリー。そのから、長くても1000年の人間であっても何かを残せるのだろうかといった思いを抱かされる。途中、「葬送のフリーレン」というタイトルにも関わる言葉が放たれて繰り広げられるハードな描写に、マンガの性質が変わるのかとも思わされたが、事が終わったあとにフリーレンは、パーティのフェルンやシュタルクを連れて旅を続ける中、それまでのようにどこかズレてドジな雰囲気や漂わせ続けて、楽しませてくれる。1000年を生きても生ききった感じがしないフリーレンを支えるフェルンやシュタルクを通して、フリーレンが生きることの大切さを知っていく展開に、自分もまた少ない人生を改めて生ききろうと思うのだ。そんな『葬送のフリーレン』というマンガのある種の神髄を味わいつつ、また起こるかもしれない起伏を楽しみにして、続く展開を追い続けたい。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 人間とは異なる、悠久の時を生きるエルフのフリーレンが主人公。勇者が魔王を倒して数十年、世界が平和になった後も勇者たちの人生は続いていくわけで、それをとても丁寧に描くこの切り口は面白いと思いました。共に旅をした仲間が死んだ後、人間とは何かを知るために旅をするフリーレンは、非常に高い能力を持ちながら、ナチュラルに謙虚で素敵です。長い時間を生きる彼女の目を通して、どんなに大事な出来事も時間が経てば風化していくこと、人の生涯などあつという間であることを改めて思い知らされた気がします。テーマは切ないはずなのに、フッと笑える場面が随所にあり、決して暗くならないところも好きです。

主婦 / 堀江千秋

- 誰かにマンガを薦めるときは、その人が普段どんなマンガを読んでいるかをリサーチしてからその人の好みに合いそうな作品を挙げるようにしているのですが、この作品はあまりに面白くて、周りのマンガ読みに誰かれかまわず薦めています。大切な存在というのは、往々にして失ってからその大切さに気が付くものですが、こんなにまっすぐにそれを描かれては、もう降参するしかないです。フリーレンが流す涙のなんと美しいこと。たくさんの言葉ですべてを説明してしまうマンガが昨今とても多いと感じるのですが、この作品はまったくセリフのないページがとても心地よく、静かに流れる時間に身を任せられるところがとても好ましいです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 優しいおとぎ話を読んでいるような気分になります。長い寿命を持つエルフのフリーレンがともに世界を救った仲間の死をきっかけに人を知ろうとしていく姿が少し寂しく、でもじんわりと心を温かくしてくれる。回想で何度も現れる勇者ヒンメルがフリーレンに向けていた眼差しがとにかく優しく切なくて泣けます。全人類に読んでいただきたい作品。

建材メーカー勤務 / 竹本慧

- とにかく絵が繊細で素敵でした。大体の話の中で絵だけのコマが連続している場面がありますが、その一つ一つが丁寧に描かれていて、何が起きているのかつい見入ってしまいます。そこまで激しい戦闘が続いたりせず、静かに時間が経過していく印象なのですが、読んだ後ノスタルジックな気持ちにさせてくれて、ふとして時に思い出させてくれる漫画だと思います。

自営業 / 川崎綾子

- 勇者達が魔王を倒し冒険を終えたのちの話。そのパーティーにいた長寿のエルフが皆の死を見届け、そしてかつての仲間の痕跡をたどりつつ、彼らの残した弟子と共にまた旅に出る。人が順々にいなくなる寂しさと彼らとまた語り合いたいと願い旅を続けるフリーレン。全体的なトーンは明るいですが、皆がいないことのもの悲しさ。不思議な読後感を与えるオリジナリティさに参った。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

- 大きな時に流れの中で人と人との結びつきに希望を見出せる、読む者にとっても救いの物語。ところどころ出てくるギャグも面白い。

医師 / 岸本倫太郎

- どれかひとつ一位を選ぶならこれしかありませんでした。フリーレンにとっては瞬きの間のような過去の冒険。その時間を少しずつ切り取って散りばめながら描かれる「今」の物語は、戦いがあってもなお懐かしくやさしく感じられます。どのキャラクターも漫画という画面の外でも生きているように感じられる、素敵な作品だと思います。

会社員 / 津田圭

- 第一話の1ページ目から既に面白かったし、それからずっと雰囲気というか何というか込みの世界観で面白いと思いつつ読み続けてしまっていたので、先日ふと「何が好きなのか」を考えてみました。自分が思っていることとしては、結局のところ長命でも短命でも生きる長さは違えど縮図としては同じなんだな、と。そう思うとフリーレンは、彼女の人生の中ではまだ子供なのかもしれない。だからきっと、まだまだ色々な経験をして感情を知っていくと思うんです。大げさな話なのかもしれませんが、自分だってそうで、過去の多くのことが人生を占める割合として小さくなっていきがちで、けれど、どうしても超えられない過去というものもあるようになり、だからこそ人生は美しいし残酷だよな、と思うのです。そんなことを考えさせられる作品です。美しく切ないですね。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 魔王を倒して、世界は平和になりました。めでたしめでたし~からこの物語が始まる。ちょっぴり切ない、穏やかな日々が綴られるファンタジー。

コミック担当 / 実松由夏

- 異類婚姻譚が大好きで、種族や文化の違う人の巻き起こすドタバタってとても面白い。それはドタバタの中にも互いへの愛情や思いやりがたまらなく登場人物たちを愛おしくさせるのだと思う。これは婚姻譚ではないのだけど、それに近いものを感じる。人生は旅というけれど、彼女の長い旅路をページをめくりながら見てみたい。

鳥取の美術の先生 / 佐川由加理

- 魔王を倒したパーティーの魔法使いのエルフが魔王を倒したあとの世界を生きる物語。人間に比べて長い寿命をもつ主人公を通じて、この世を去りゆく仲間や、変わってゆく世界を、少し距離をおいたところから淡々と描かれます。少し寂しいのですが、穏やかな満足感もあり、ずっと、物語のエピローグを読んでいるかのようで、とても心地よいと感じました。

システムエンジニア / 廣瀬公将

- 長い年月を生きていくフリーレンと、定命の仲間達。その仲間達との、長い冒険とたわいもない日常の中で、緩やかに淡々と紡がれる言葉が心に沁みます。

教師 / 持丸宏司

- ファンタジー題材が一般的になった昨今、エルフやドワーフやホビットなどの名称は説明なく「ああ、そういうものやな」と想起されるようになりましたが、種族毎の寿命の差という題材を丁寧に扱う視点の作品はなく、あくまで人間を中心とした物語の添え物としてしか存在しなかった異種族をメインに据えた構成というだけで大賞に推すに足りる作品でしたが、そこに止まらず種族毎の感情の機微や差異を丁寧に描きつつドラマを展開し、青年誌としてファンタジーに求められるエンターテインメントを十二分に提供しているクオリティの高さに、ただただ感心するばかりです。

住職・ライター / 蟬丸P

- 多くはそれが物語のメインとして描かれる、魔王討伐の旅。この作品はそれが終わるところから始まりを迎える、新しい視点の旅の物語。ひとり異なる時間軸を持ったマイペースな主人公を通じて、継がれていく人の想いと出会い、見えてくる時間の価値の大きさを、優しく美しく、そしてユーモラスに描いてくれています。他の作品にはない一瞬の圧倒的時間経過さえ、とても穏やかで暖かく感じるのは、ハイレベルな画力で細部まで丁寧に描かれた魅力的なページが広がっているからこそ。もちろんファンタジー作品に期待されるようなシーンやエピソードをしっかりと展開し、静と動のバランスも絶妙。登場人物も愛嬌たっぷり、毎巻しっかりワクワクさせてくれます。ファンタジー作品は前知識の有無や嗜好に左右されがちで、薦める相手を選ぶことが多いのですが、『葬送のフリーレン』は様々な人に読んでもらいたい、ファンタジー作品に触れるきっかけにもなってくれるような物語だと感じています。ひとりのファンタジー大好きマンとして、これからも追いかけて、推していきたいですね。

会社員 / 伊東敬祐

- もう死んだもの、まもなく死にゆくもの、信じられないほどの寿命を持つもの。それぞれの命との向き合い方が豊か。強い絵は控えめに毎回最終コマに余韻を残す描きっぷりも癖になる。

往来堂書店・コミック担当 / 三木雄太

- 読む前に勇者一行の後日譚という情報だけ知っていたので、てっきり個性的なパーティのメンバーがわちゃわちゃやってる作品かと勝手に想像していたのですが良い意味で裏切られました。エルフという存在は今の日本でマンガや小説やゲームが好きな人なら何らかの作品で出会ったことのある存在ではないかと思えます。「長寿であり、耳がとがっていて長く、美しい」というある程度共通のイメージで語られることが多いと思えますが、そのエルフの時間軸から語られる物語には、私は出会ったことがなく、とても新鮮に感じられました。また、種族ごとに感性が異なり、分かり合えない隔たりがあることがはっきりと描かれているのもこの作品の魅力的な部分だと思えます。

会社員 / 林礼春

- よくできた世界観を上手に表現しつつ、魅力あるキャラクターが活躍するさまは、ファンタジーにありがちな激しいワクワク感ではなく、じんわりと楽しませてくれます。

明文堂書店金沢野々市店 1F フロアプランナー / 木村俊介

- 世界を救った英雄たちのその後という着想が面白い。異なる時間軸で生きる種族の視点や価値観の違い、それに触発される心情的な変化などが読んでいてほんわりします。

自営業 / 小野裕子

- 一見ナンセンスギャグ風の世界設定なのにもかかわらず、とても切なくて温かいエピソードが展開して心を奪われました。読んでみると人恋しくなる作品です。

PENICILLIN / HAKUEI

- 申し訳ないくらいファンタジーが苦手なのですが、これは面白いです！とあるパーティーの冒険が終わった後の話。仲間だった勇者や僧侶はやがて死を迎え、魔法使いのエルフが勇者の足跡を辿るように旅にでるのですが、時間の経過とか、魔法の進化とか、過去の冒険の後始末をしている感じなど、いろいろと視点が新鮮なのです。

Books アイ新田エキナカ店 / 野口忠義



- 1次と同じようなコメントとなってしまうのですが、冒険の後日譚がメインストーリーという新しい切り口が、導入としてとても惹かれました。ファンタジーの世界で異種族は当たり前のように存在しますが、本作のような観点で在り方を表現し、出会いと別れ、その儚さを、これほどキメ細やかに描写したマンガは個人的には初めてで、とても感銘を受けました。

会社員 / 三浦佑樹

- 思い出を大切にしたいと思わせてくれる、作品です。主人公は長命種のエルフで、人間とは時間の感覚が異なります。それはつまり、思い出の価値が人間より希薄ということです。舞台は剣と魔法の世界。主人公のエルフは勇者たちと共に魔王を倒し、世界に平和をもたらしたところから始まります。その後、パーティーは解散し、エルフは人々の記憶から忘れ去られてゆく勇者たちに、寄り添うかたちで旅を続けます。過ぎ過ぎ去った時と再開し、今に繋がる軌跡を辿ることで過去の絆を呼び覚ましてゆく、心温まるお話です。

デザイナー / 佐藤優

- ゲームが世界を席卷して以来、ファンタジーの基本設定が劇的に変化した。本作も（ゲーム的な世界観を持つ）世界を救ったあとの勇者一行の物語。たしかに妖精系は人間に比べて長生き設定で不死に近いというのがデフォルトですが、それをこう使って物語を語るのかと唸ってしまった。

菓子研究家 / 福田里香

- 魔王討伐後の世界観というのは非常に新鮮。かつそこにエルフの「長寿」という特徴を活かした他の人間との時間軸の差分がストーリーにひねりを与えている

会社員 / 齋藤隼

- 魔王は倒され、世界には平和が戻り、勇者とお姫さまは末永く幸せに暮らしましたとき。めでたしめでたし。のそのあとです。私事ですが、ふだんあまりファンタジー系のマンガは読まないのです。それで、今年からマンガ大賞に参加させてもらってるんですけど、そうでなかったら、まだ読んでなかったし、読むのもずっと先になってたかもしれないし、ひょっとしたら手に取ることもなかったかもしれません。ありがとうマンガ大賞。長命なエルフの少女（少女なのか？見た目は。実際はいくつなんだ？！）が、あの勇者との（彼女にとってはけっして古くもない）思い出を辿る旅にでる物語。その旅のテーマはずばり人間。人間の一生のスケールを超越した彼女には、人間がよくわかりません。人間でないものが、人間とは何なのかを求めて葬送の旅をする。この設定がすばらしい。勇者達と過ごしたたった10年は、わずかな時間にすぎません。怠惰な彼女の時間感覚は人間にとっては残酷でもあります。が、希望でもあります。自分自身にとっては肉体の死がすなわち死ですが、その人のことをおぼえていてくれる人がいる限りは、社会的には生きているのだということを聞いたことがあります。エルフがいるかぎり、勇者たちの物語は続くのです。そしてエルフの物語も。

教員 / 戸田穰

- 読み進めているときの没入感が実に心地よい！異世界の日常を淡々と描きながらも、巻数が進むにつれて明かされていくフリーレンの過去と現在が重なるときに「この作品を読んでいて良かった！」と思える瞬間が訪れてきます。

ロングランプランニング / 小森和博

- 魔王を倒し一度の世界を救った勇者一行でただひとり長命なエルフが、長い平和の後にもう一度旅に出る。異世界とかVRMMOとかファンタジージャンルがメタメタな現在で、少年サンデーが出した答えがコレ。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- よくある異世界ものかな？と思って手に取って見たら、いい意味で裏切られた。地味で淡々としているのがいい。サンデーならではの必ず文章の最後に「。」がついているのも一役買っている。アプリの連載の中でも疲れている時につい見に行ってしまう作品です。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

- エルフ族が長寿で、人間の友が先に死んでしまうという設定は昔からある。先代勇者パーティーの1人が先代勇者の子供の新たな勇者のパーティーにも先輩とか保護者的な役割で参加するという展開も昔からある。決して新奇な発想ではない。よくある素材を材料に、これだけ新しい味を良く出せたなと感心します。少年漫画では何十巻にも渡った物語が、実は作中では1週間の出来事だったという時間感覚が珍しくない中、1か月滞在するとか、冬を越すとか1話でいきなり時間が経っていることが何度もあり、吟遊詩人語る英雄の伝記を聞いているような豊かさのある、良質なファンタジー作品です。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 一生の長さは存在それぞれ。どうやって生きて、どう死ぬのかも存在それぞれ。大抵、どうやって生きるかが描かれやすいものですが、この漫画では「どうやって死ぬか」も同等のものとして描かれているのが心地よかったです。種族の違いが当たり前のものとして受け入れられているファンタジーの世界。それは多様化が進んだ世界。ダイバーシティだのなんだの言われ始めて久しいですが、現実がここまで進化するのはいつになることやら…。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 夫が「面白いからとにかく読んで！！」と激推ししてきた作品でした。夫いわく「ゲームクリア後を回想とともに放浪するアフターストーリー的世界観がRPG全盛期には大変心地良い」とのこと。私自身は、ゲームに疎い方でRPG世界観はどちらかというと不得意分野なのですが、アクション少なめで盛り上げ過ぎない展開と、どこか余裕のあるストーリー運びが、読み易くてクセになります。冒険の高揚感と日常漫画的な癒しが絶妙に同居していて、RPG世界観が苦手な私でも無限に読めます。週刊連載でこの絵のクオリティは素晴らしいですし、ほぼ1話完結なのに構成もキャラクターも見事！フリーレンが長寿のエルフであるが故に人間やドワーフと時間軸の捉え方の対比があり鎮魂をどう捉えるか考えさせられる実は深いテーマの作品だとも思います。魂の眠る地を目指すフリーレンたちがどのように「葬送」するのか興味深くこれからの展開がますます楽しみです！！

会社員 / 佐々木つむぎ

- 冒険パーティーのメンバーとしてエルフは必須ですが、エルフの立場から物語が描かれているのが新鮮でした。シリアスになりそうでならない、絶妙なバランスも良いです。たまに見せるフリーレンの感情にぐっと来ますね。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 勇者一行が魔王を倒した後のお話。パーティーメンバーの1人、エルフのフリーレンは人間よりも遥かに長生き。人間の1日、1年、10年なんてエルフにとってはあっという間に過ぎていく。作中であっという間に数年経つし時の流れを早く感じるけど、そんなあっという間の日々が大切に愛おしくて…静かにしみじみ良いです。たまに入るとぼけたギャグや、「鎧を綺麗に取る魔法」や「甘い葡萄を酸っぱい葡萄に変える魔法」などのフリーレンが集めているおかしな魔法も好き。

声優 / 富岡美沙子

- 勇者が魔王を倒したあとの世界…。そんな世界を想像したことのある人は恐らくそれほど多くないと思います。ゲームでも魔王、もしくはラスボスを倒すまでが旅の目的でその後の世界が描かれていることは殆どありません。けどその後の世界を見てみたくなのかと聞かれたら、その世界があるのなら是非見てみたいと言いたいです。そしてそんな欲求に応えてくれたのがこの作品です。

元書店員 / 八重田幸子

- 異世界モノブームの所為で、ご都合主義のお気楽ファンタジーが大増殖する中、この目線に安堵したというのが正直な感想。追放された冒険者でも俺TUEEEEだけがファンタジーじゃない。乙女ゲーのキャラに転生するだけがファンタジーじゃない。根底には勇者やエルフといった共通の知識を織り交ぜながらも、優しく新しい角度から紡がれる物語。何気ない伏線が切なく回収されたりして、ふと読み返す行為が主人公達と同じく冒険の追体験のようで、その手法に感嘆します。

(株) 蔦屋書店 店舗企画本部 / 井出麻悠美

- 勇者がチームを組んで魔王を倒す。剣と魔法のファンタジー小説を下敷きにしたロールプレイングゲームでおなじみの設定を下敷きにしなが、とうの昔に敵は倒され、勇者も年老いてすでに亡き世界が本作の舞台となる。そんな「祭りの後」で物語が成立するのかと思いきや、これが予想をはるかに超えて引き込まれる。勇者ヒンメルやその仲間たちと10年の冒険の旅を共にしたエルフの魔法使い・フリーレンが主人公。長命な種族であるエルフにとって10年はあっという間。世界に平和が戻ってから50年後に天寿を全うしたヒンメルの葬儀で、フリーレンは時の大切さ、残酷さを知り、それがきっかけで「人間を知る」旅に出る。「生きる」と「誰もが必ず死ぬ」とことについての考察、そして「死んだ後に何を残せるか」がすべての私たちに課せられたテーマであること。そんな哲学的でもある命題を、このマンガは読みながら深くじっくり考えさせられる（ちょっと大げさかもしれないけれど）。これまでなかったタイプの作品かもしれない。少なくとも私は類する設定のマンガを知らない。作風はサンデー系らしい上品さがあってとてもよい感じです。

会社員 / 天野賢一

- 時の流れは人によって違う。同じ人間でも感覚が異なるのだ。それが長寿のエルフならばどうか。いわゆる勇者御一行物語の、“その後”に焦点を当てた作品。自分はこの作品に出会うまで、物語が閉じた後の登場人物たちのその後についてを深く考える事は少なかった。しかし寿命の差があれば、仲間を見送る立場になってしまう事も必然。その中で芽生える、あの時にもっと知ろうとしていれば、という後悔は種族に限らず誰しもが思う事なのではないだろうか。居なくなり、逢えなくなってからそのものについて知り、想いを継ごうとすることの尊さや難しさについて思いを馳せることができる、素敵な作品。

C smart ららぽーと EXPOCITY 元書店員 / 杉佳尚

- 魔王を倒した後、勇者や仲間はどうか、“その後”を描いた物語。祭りの後はいつも寂しい。しかも、その寂しさが一瞬で過ぎ去るわけではなく、その後も連綿と続くとしたら――。命あるいは実体は失われても、人々の記憶の残ることで「生きている」と実感する瞬間もあれば、その記憶がねつ造されている場合はどうなのか。遺された主人公が新たな仲間と出会うことで、旅の意味合いも変わっていく。ふとした瞬間に繰り返し「弔い」の意味を問われる一冊。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- 魔王を倒した、勇者一行の後日譚。悠久の時を生きるエルフが、一人一人、仲間たちの最期を見送っていく、彼らとの思い出と現在との仲間との心の交流が切なくもあり。最後は自分自身を葬送（おく）ることになるのか…？！それとも…。時にコミカルだけど、とってもハートフルな異色の異世界もの。何度も読み返したくなる作品です！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 勇者パーティが魔王を倒した後日譚から物語がスタートしているという斬新な設定だけでなく、主人公を魔法使いのエルフに焦点をあてている漫画。長寿であり、少し人間と感性の違う超合理的なエルフが、寿命を終えた勇者や仲間たちのことを回想しながら進む物語は、淡々としているのですが、どこか人間にとって大事なことを感じさせてくれます。

広告会社 ブランナー / 平沼良章

- 一次でも推したくらいすごく大好きなのに、この作品を説明するのがとても難しいです。冒険っていつまでも続き、敵はいる。ずっと同じように生きていくことは難しい。出会いと別れを繰り返していく。人は完璧ではない。などなど、色んな人の生の要素を、読者が主人公のフリーレンと一緒に拾っていくような感じ。ファンタジーですが設定も無理がなく、ギャグもあり起伏もあり、決して派手な作品ではないのですが、幅広い年代の人の気持ちに沁みいっていきんじゃないかと思います。いい作品です。ぜひ読んで体感していただきたいです。

公務員 / 宇田川結衣子

# マンガ大賞2021 ノミネート作品

ビッグコミックスピリッツ / 小学館

## 「チ。ー地球の運動についてー」 魚豊

### 選考員コメント・1次選考

- こちらは1巻がギリギリ12月発売だった作品。連載当初の1ページ目からの衝撃が忘れられない。時代は異端思想が弾圧されていた、15世紀のヨーロッパ。その異端思想者に対する拷問シーンからこの物語は始まる。当時の異端思想というのが、タイトルの副題にもある“地動説”。その地動説を題材にした漫画。強い信念が描かれています。周りに流される生き方ではなく、周りから迫害、拷問を受けたとしても自分の信念を貫くことができるのか、心震えながら読んでいます。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 年末ギリギリにこんな問題作が出るとは……。 「地球は平面」だと信じる人々が、現代に少なからずいるそうですが、この作品は、地動説が正義で、教会が邪悪といった単純な物語ではない。二つの真理が衝突した時、たとえ大多数の他人と違って、人間は信じる道を行けるのかという、極めて現代的なテーマなんだと思う。地動説を、現代で論議されている様々な諸問題に置きかえてみれば、この作品のすごさがわかります。15世紀も今も、本質的には何も変わってないかもしれないんです。もし、この絵が池上遼一だったら、井上雄彦だったら、浦沢直樹だったら、こういう面白さにはならなかっただろうとも思う。いわゆる「低体温の絵」でしか描けないことがあるんだなあと、そこにも感心しました。あと、このタイトルを了承した編集者にも。

読売新聞文化部 編集委員 / 石田汗太

- 前作『ひやくえむ。』に引き続き、人間を突き動かす情念のようなものに肉迫する強さがある。

往来堂書店・コミック担当 / 三木雄太

- 舞台は中世ヨーロッパ。地動説と天動説を巡って、うけつがれる知識と信念の物語。時代を問わず、人間同士の同調圧力や権力に反逆する事は、「怖さ」と向き合い「残酷」に耐え「好奇心」に殉ずる、これが本作のテーマなのだと思います。まだ2冊しか出ていませんが、間違いなく大人向けで、非常にグロテスクな表現が多いのですが、歴史漫画が好きな人はもちろんのこと、小説や映画が好きな人にオススメです。

デザイナー / 佐藤優

- まだ1巻で、これから話が動き出すんだろうというところだったため、他の作品とどちらを選ぶか悩んだのですが、やはりこの1巻の1コマ目から最後のコマまで完全に魅せられ続けてしまった事実を無視しちゃダメだな？と感じた次第です。パワーのある、続きが読みたくなる作品です。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- なんだかグロかったりするのかな、と思って読み始めたのですが、途中から気にならなくなりました。哲学的な文系の話かと思いきや、とても科学的な理系の話。でも、そこには神とは何か、世界とは何かという問いが含まれていて……学問の根っこは、文系とか理系とか関係ないですね。星の観測から世界の美しさを証明する、これからが楽しみです。

主婦 / 堀江千秋

- 地動説が当然の今、天動説を信じてみるのはどうだ！

文筆業 / 海猫沢めろん

- 命をかけるに値するモノ、それに命をかけた人達のリレーが世界の常識を覆していく。。。そんな物語なのかなと思います。理論に基づいて世界の常識を否定する確固たる証明を見つけた人達の、その表情や笑顔がとても羨ましく、そして怖さも感じました。世界に疑いを持つ事は怖い事ですが、突き詰めて辿り着いた「答え」を見て受け入れた第一部(?)主人公の表情が忘れられません。

バンドマン / ターシ

- C教による迫害を受けながらも地動説を信じ、真実を知ろうとする人々の物語。登場人物は異端者として次々に死んでいく、しかし真実を次の誰かに「託す」その瞬間に、満足な死に顔を浮かべる。それは真実から目をそらして「天国」を盲信する人々には決して得られない顔だ。ひとつひとつの死に顔とその微笑を緻密に描いていく野心作。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- まだ1巻ではあるものの、受け継がれる「意思」「熱意」「狂気」というものに感動させられた

会社員 / 齋藤隼

- また、やばいマンガがでてしまいました。15世紀のヨーロッパ。この物語の主人公は、タイトルのように「チ。」＝「ち、まる」＝地球だ！そして地球のほんの薄い成層圏に生きる人々です。思い託されていくリレー形式からは、歴史小説の傑作、久慈光久先生の『狼の口～ヴォルフスムント～』を思い出しました。14世紀を舞台にしたスイスの独立物語は凄惨をきわめましたが、それでも彼らは希望をつないでいきました。一方で、本作の彼らが殉じていくのは祖国や仲間、家族や恋人のためではありません。地球は動いている。なぜ人々は教会の教えに背き、生きのまま火刑に処されるにもかかわらず、この事実を強く肯定できたのでしょうか。拷問ではじまる本作も明るいものではないはずですが、それでも、彼らは悠然としています。物語は、まだ2巻。コペルニクスが『天体の回転について』で地動説を公表したのは1543年のこと。この先の地球の回転をめぐる物語の展開が楽しみです。

教員 / 戸田穰

- 地動説、天動説の話。時代をまたいで次々と主人公が変わっていくが、全員が魅入られた地動説の発展に少しずつ寄与していく。フィクションノンフィクションがとてもうまく入り混じっているから、話の結論は見えているのに物語の結末が気になって仕方ないとても素敵な作品です。老若男女問わず読んでいただきたい作品。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 当たり前を覆すことの凄まじさ。

マネージャー / 樋口健

## 選考員コメント・2次選考

- 一人の短い人生を超えて繋がれていくものがある。自分の人生をポジティブに小さく見せてくれる尺度に気づいたときの楽しさ。前連載作『ひゃくえむ。』でも人を衝き動かすものを描いていた。これからも人間に迫る作品に期待したい。

往来堂書店・コミック担当 / 三木雄太

- 次々と主人公が変わっても受け継がれる思想。歴史に埋もれていった人たちをフィクション交えつつテンポよく描いていく。結論がわかっているところに行くまでの引き込み方が最高です。どこが話の終着点になるんだろう？わくわくしています。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 野口宇宙飛行士がISSから撮影した写真とともにツイートまでしてくれるようになった現在、地動説は科学的な事実として認知されている。そして自分も含め一般には、夜空を見上げてその美しさや壮大さを感じることはあっても、天体の運行を毎夜観測し、記録して研究対象にしたりはしない。もう「知っている」からだ。でも、観測もせずに本当に知っているのだろうか？夜空にはまるで背景のように定期的に天空を動いていく星がほとんどである一方で、その原則によらない動きを見せる星がわずかにあることを。そしてその理由を。夜空の観測を続けていた昔の人々は2,000年以上前からその存在に気づいていた。そして、時代を越えて、現象に見合う理屈を探し続けてきた。本作は、科学的合理性を追究する孤独な戦いであると同時に、社会的合理性の壁に穴を穿とうとする挑戦でもあった、知的営為のドラマ。副題はコペルニクスの著書『天球の回転について』を踏まえたものだろうし、とにかく練りこまれている。

会社員 / やのこうじ

- 「未知なるもの」に届く、その瞬間への畏れと切実さ。すべてを投げ出してでも「信念を貫く」ことの理由が、まだ2巻目なのにばんばんつまってるの、まじで激エモですね。苦しみながら読んでます。「その先」にあるものがみたいから。

株式会社プロプラス 商品部 / 池本美和

- 既存概念を覆すとき、それを阻む力と葛藤のドラマに胸が踊る。今後の展開がとても楽しみです。

自営業 / 小野裕子

- 登場人物の未知なる真理への憧れや探究心が、ものすごい力でグイグイ押し寄せてくる。命懸けのその想いに共感して感動する。

PENICILLIN / HAKUEI

- 地動説を唱えることは異端とされていた時代において、自らの信念を貫き、異端研究を行い地動説を唱える。そのヒリヒリとした状況を軽快なテンポで熱く描く。第1話最後の見開きページの引き込みは圧巻で、映画のワンシーンをしているかのようである。昔は天動説が唱えられていたが、今では地動説が定着しているという多くの読者が知っていることの間隙を突く衝撃作であり、これからどうなるのだろうという強い興味に惹かれて一気に読了し、次巻を渴望している自分に気付かされる。

弁護士 / 三村量一

- 今年一番の大作なる予感がしています。舞台は中世ヨーロッパ。地動説と天動説を巡って、ガリレオに（多分）うけつがれるであろうお話し。人から人へと受け継がれる信念は血よりも濃いと思わせる、重く分厚いテーマを感じます。ここ数年でもここまで重厚な話はなかったと感じて選びました。まだ2冊しか出ていませんが、間違いなく大人向けです。非常にグロテスクな表現が多いのですが、歴史漫画が好きな人はもちろんのこと、小説や映画が好きな人にオススメです。

デザイナー / 佐藤優

- 鈍器で殴りつけてくるような一品。これからの期待。

レビュアー / 縣丈弘

- 偽物の世界に生きるより真実を貫いて死ぬ！いまの時代に困難だからこそあこがれる生き方の登場人物がまぶしい。

文筆業 / 海猫沢めろん

- 「真理が美しくないはずがない。」その視点で深く掘り下げられていく、いや、彫り上げられていく？目を逸らしたくなる現実と、目を逸らせない真理。目を逸らしたくなる真理と、目を逸らせない現実。どちらも存在する感情には違いなく。そしてその感情の奥を覗き込んでしまったなら、もはや選択肢はひとつ。素晴らしい漫画に出会えて幸せです。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- まだ巻が少ないのに、すごく疲れる読後感。登場人物に登場人物に共感しにくいのが難点だけど、逆にこのまま突き進んでほしい。科学への狂信的な情熱をどう表現していくか、期待があります。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 岩明均先生が推薦という帯に惹かれてこの漫画の存在を知りました。12月に発売されてノミネート！快挙ですね！それだけこの漫画の熱量に圧倒された人が大勢いたということだと思います。1巻で「え？おまえ死ぬの？主人公じゃないの??」と全員が思いましたよね、絶対。読後に「天動説」と「地動説」の転換期を少しだけ調べてみたのですが、宗教以外にも哲学や思想が複雑に基づいているようで、表現するのは難しいテーマだと思います。非常に熱量が高く、興味深いテーマの作品だからこそ今後の展開として異教徒として命をかけながら繋げて説を唱えていくという流れが続くよりは可能な限り史実を織り交ぜてリアリティに迫ったものが読みたいと思ったりもします。ガリレオ裁判まで描いてくれないかな！C教がかなり過激な描写で、色々な意味でドキドキします！笑今年1月に発売された2巻も勢い止まらずで、先がどうなるか想像出来ずワクワクしています。これからも注目していきたい作品です！魚豊先生の前作の『ひゃくえむ。』も面白そうなので早く買わなくてはー！！

会社員 / 佐々木つむぎ

- 今は当たり前の地動説ですが、それを信じるのが命がけの時代があったのですよね。その状況をかみくだいていくこと、人の信念の強さを感じさせる力がステキです。今の時代の皮肉にも、読める部分がグッド。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- かなりユニークなタイトル。そしてそのネーミングに違わぬ作品内容。作品時代背景で地動説（正しいであろうこと）を唱えることの困難さの表現が魅力。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 「理由はなく、ただそれを求めるのだ」という知識欲は、狂気と区別がつかない。その人間性の本質がよくわかる、文句のつけようのない傑作。4話目にしてなるほどこういう物語だったのか！という揺さぶりも凄まじく、その後もいい感じに狂ったキャラクターたちが登場する展開でまったく目が離せません。いま最も気になる連載マンガのひとつです。

会社員 / 末永龍介

- 今年は今作品を推したのでノミネート作品に入ってガッツポーズ。とにかくイイ台詞が多すぎる、とにかく4話まで読んでみてとしか言えない。真実への探求が自身の命よりも重いと考える人間の表情の描写が上手だなと思いました。晴れ晴れとして狂気を感じさせる、そんな類の人間達が当時の絶対的な神学という常識を覆していく。。。実際にそれが成されるまでかなりの年数がかかったそうなので一体どの辺りまで描かれるのか。。。このコロナ禍で執筆作業が大変そうですが、とにかくどうか身体に気を付けて描き上げてくださいませとしか言えません。ってもう最後感想じゃなくて願望になってしまいました。

バンドマン / ターシ

- 「世界、チョレ？」と思っていた天才少年が、まさかの人生を選択してしまう。彼を突き動かした真理がまた他の誰かの人生をも変えてゆく。思想がくつがえされるとき、多くの血が流れ揺るぎない信念が受け継がれてゆく。熱き信念を最後まで見守りたい！あくまでこちら側で。拷問には耐えられそうにないので、、、怖いけれど次巻を心待ちにしています！

鍼灸師（漫画家専門・兼美容鍼灸師） / 碓氷麻里子

- 「天動説」が信じられていた時代の方が、そうでない時代よりずっと長かった。でも、人間の生活にとって何の不都合もなかったし、今だってさほどの不都合はないのかもしれない。それにも関わらず、「動いているのは地球だ」と発見し、主張した人々がいた。何の得にもならないのに。それで焼き殺されるかもしれないのに。彼らを動かした情熱とは何だったのか？ 私たちが当たり前だと思っていることは、実はそれほど当たり前ではないのかもしれない。まさに「コペルニクスの転回」と言いたくなる発想の作品です。地動説を公に唱えたのはコペルニクスが最初だと、歴史の本には書いてありますが、考えてみれば、「地球が動く」と仮定する方が、宇宙は美しい」ということは、観察によって、いつでも、誰でも気づくことができた。星空は、身分も貧富も関係なく、万人の上に広がっているから。したがって、コペルニクスより前に、地動説を発見した先駆者たちがいた可能性は大いにある。その名は歴史に埋もれても、知識は命のリレーのように伝わっていったに違いない。地動説の正しさが科学的に証明されたのは18世紀以後だそうで、ガリレオの時代でさえ、地動説はある意味「トンデモ仮説」でしかなかった。本作は、おそらく「歴史マンガ」ではない。科学的真理が正義で、それを弾圧する宗教が邪悪という単純な構図でもない。地動説を「どこかへんだけど、うまく説明できない」と、もどかしく感じる現代の諸問題に置きかえてみればいい。自分が発見したことを「美しい」「正しい」と感じたら、全世界を敵に回しても貫ける信念はあるか。そのように、21世紀の私たちに問いかける物語なのだと思います。

読売新聞文化部 編集委員 / 石田汗太

- 冒頭から強い。つよい。正直表紙もつよい。オーラを感じる。最初のラファウが主人公でグイグイ進むかと思いきや…の展開も最高だし、時代背景や歴史的な内容も織り込みつつ、ラファウの心の子「世界、チョコレート……」みたいな現代語ぶっこみ感の演出も素敵。学問と世界の対決、人と人との対決、信仰と科学の対決…あらゆる「対決」がぎゅっと凝縮され緊張感もりもりのページからあふれるエネルギー。そのエネルギーにやられちゃってください！

会社員 / 西尾美里

- 完璧な1話目で、最高の1巻でした。熱い、そしてカッコいい。荒い絵柄も"味"となっている。地動説に魅せられていく少年が向かう先は…凝縮された一巻から、これからの話がどう展開するか予測できない面白さがあり、続きが早く読みたくなります。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 時代が変われば…科学技術の進歩で現代の僕達には当たり前のことも、15世紀のヨーロッパでは異端思想であった時代も。命をかけるという言葉では簡単に表せない情熱がこのマンガからはヒシヒシと伝わってきます。そんな想いに魅せられて。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 15世紀のP王国某所、とのこと。C教が社会の中心に根付き、いろいろなところにタブーがある社会です。合理的な、美しさの先にあるはずの神。そして、最大のタブーの一つが、「地動説」。もう私たちはその先に何かがあるのか知っています。しかし、その過程で苦しんだ知性がいたことは、あまり知りません。でも、今もいろいろなところにタブーはあります。知性と好奇心は、そのタブーを超えたくてうずうずしています。若い人たちには、是非そうしたほとぼしる体験をして欲しい。このマンガだと、それをちょっとだけ追体験できそうです。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 知りたい事を知るために命を懸ける必要がある時代があったという事そのものが胸にせまってきます。大人より学生さんに読んでほしい一作。

図書館員 / 金田健太郎

- 今回、話が転がり始めた作品が多い中で、純粋にこの先どうなるんだろうと期待させられた一作。

明文堂書店金沢野々市店 1F フロアプランナー / 木村俊介

- まだ2巻ではあるものの、受け継がれる「意思」「熱意」「狂気」というものに感動させられた

会社員 / 齋藤隼



- パワーのある作品ですね。1巻も面白かったんですが、2巻がとんでもなく面白いんですよ……。生きてると盲信してしまっている何かがあると思うんですが、それを盲信と気づくこともないことも多々あるわけで。マンガの中の話だけでなく古今東西そういうものだろうし、常識という洗脳の中で「やりきる」ということがどうということ、ソレをする才能というものは、ステータス的なポテンシャル以外にも宿るよな、と作中の人々の生き様から感じます。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 周りと違う事、違う考え、違う素振りをするや異端と唱えられ迫害されていた時代。真理を唱えることが死と隣り合わせの時代。それでも曲げられない信念を貫き通すことがいかに大変だったのか、心に迫るものがある。ここまでの信念を自分は持ち合わせているだろうか、貫き通せるだろうかと自問自答し、震えながら読んでしまう。漫画好きにもそうだが、男女ともに年齢層隔たりなくおすすめしたい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 真実を託して、満足げな笑顔で死ぬ。恍惚とした死に顔が並ぶ異様な作品。本作は、現時点ですごい熱と密度を持った作品だけど、どう終わるのか、を見届けてから評価したい気もして3位。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 冒険譚です。冒険とはいっても、モンスターを倒しながら町から町へ、ダンジョンからダンジョンへというわけではありません。夜空を見上げ、机上に書物を眺め、想像力は宇宙を駆け巡る知的冒険。死の危険を前にしてもなお、書物をつうじて受け継がれる思考、伝播する熱。描かれる円。人と地球と宇宙を結ぶ、壮大なファンタジー？、いや、崇高なサイエンスの物語です。

教員 / 戸田穰

- 高い志を持った人が「お前は、どうする？」と真っ直ぐ読者である私に問いかけては死に、問いかけては死ぬ……という恐ろしくて、でも熱くて、目が離せない作品。

ライター / 門倉紫麻

- 当たり前になった地球が自転するということ。それが異端として弾圧されていた時代があったことは知っていても、こんなにも具体的に想像したことはなかった。命を捨てても曲げられない強い信念、宇宙を見つめる真っ直ぐな瞳が心に突き刺さりました。

主婦 / 紺野泉

- 真実を事実とすることの勇氣。

マネージャー / 樋口健

- 禁忌はどうして人をこんなに突き動かすのだろうか。禁忌そのものではなくとも、禁忌を題材とした作品には気づけば引き込まれることが多い。天体の動きのスタンダードが天動説から地動説へと移行する中世ヨーロッパをモチーフとし、禁じられた学問に向かってしまう人々の止めようのない善悪を超越した欲求を描く。作品の世界観からして「死」を正面から扱わざるを得ないほぼほぼシリアスな作品のはずなのに、並外れた熱量を描くとどことなく不条理ギャグのようなおかしみがにじむのは作者の持ち味か。2020年に1巻がリリースされた作品なので、2021年にますます期待が膨らみます。

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

# マンガ大賞2021 ノミネート作品

月刊コミックビーム / KADOKAWA

## 「カラオケ行こ！」和山やま

### 選考員コメント・1次選考

- 中学生がヤクザに歌を教える設定ってまずないだろうと思うけれど引き込まれてしまう。和山やま先生の描くキャラは濃くて虜になってしまう。カラオケで紅歌いたくなる～

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- テーマ・表現・ギャグセンス等、作品全体の調和度から見て、現在での代表作はこれだと思います。近年の創作同人誌でも出色の出来でした。気軽にカラオケに行ける世界に早く戻りますように……。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- これは、読むべきでしょう。「笑わせてやるぜ！」というギャグではなく、「クスッ」の名手ことと和山やま。合唱部中学生に歌を教えてもらうやくざとか、「いや、なんで！」とか、心の中でつつこみを入れ続ける 169 ページ。すべての塩梅がちょうど良いのです。好きです。

主婦 / 赤坂真実

- 一見するとまじめな中学3年生男子とヤクザという変な組み合わせなんて怪しくて怖そうなのに、読み始めたら面白すぎて一気に読みしてしまいました。カラオケ行きたい！

主婦 / 紺野泉

- 初めて読んだ時、『夢中さ、君に。』や『女の園の星』とはうってかわって墨が滲んだような劇画調のテイストを取り入れてる事にまず驚きました。その拭えないおどろおどろしさが登場人物のつかみどころのなさやヤクザに対する恐怖心を煽っているようでとても秀逸だなと感じました。まるで短編映画を観たような読後感でした。個人的に和山先生の作品はどれもすぐ実写化出来る(して欲しい)ものばかりなのですが、これは過去一で期待しています。今後続編(ファミレス編)が描かれる予定とのことですので正座して待ちたいと思います。

フリーランス / 金輪英恵

- 友情とも恋ともとれるような年の離れた男同士の不思議な関係と、絶妙すぎる表情や言葉のチョイスから、じんわりとくる温かさや笑いに魅了されていく感覚は、まさに和山ワールド。同時期に発売された連載作もまた秀逸なコメディだが、一本のショートドラマとしての完成度も含め、今回はこちらをプッシュしたい。気軽に手に取れて、読みながらフツと笑って、読後の何ともいえない心地よさをぜひ味わってほしい。刺青に震えてくれ。

会社員 / 伊東敬祐

- 1巻で完結ですが、まとまって、一本の映画を観たかのようにまとまって、最初から笑えるし、かと思えば急展開でハラハラして、ラストもとてもよかったです。狂児かっこよ…狂児ってほんとにすげえ名前だな。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 一昨年に同人誌で出版された時は、その年の MY BEST 1 だった作品が商業出版され嬉しい。とぼけたキャラの個性と、しっかりしたストーリー展開、コミカルな味のバランスが絶妙。作者の底知れないポテンシャルを感じさせる。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 「君に夢中さ」→「女の園」→「カラオケ行こ！」と、刊行される作品すべてが好みすぎて、もう和山先生に夢中さ…！と言いたくなります。連載中の「女の園」とどちらを選ぶかすごく迷ったのですが、出てくるキャラクターから展開までパーフェクトすぎて、読後 YouTube で「紅」をエンドレスで再生してしまったこちらを推します。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 大雑把に説明すると中学生とヤクザがカラオケの練習をする話。これだけでつかみが凄い。読んでみるとキャラクターの濃い個性にハートを鷲掴みされる。セリフが最高に上手い。センスの塊。好き。全人類に読んで欲しい。

建材メーカー勤務 / 竹本慧

- 和山やま先生の作品はどれも好きです。面白いのは間違いない。でも多分読む人、読み方によってその受け取り方、評価が多岐にわたると思うので、多くの人に届いてほしい作品。

医師 / 岸本倫太郎

- めちゃくちゃ面白いコメディ。爆笑じゃなくて、ニヤニヤ笑いが止まらない。言葉にならない「なんだか惹かれてしまう」という感覚をこんなふうに描けるとは！

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 「ヤクザ×高校生」と聞くとありがちなBL展開を想像しますが、全く違うお話でした。ゆるい青春とでも言うのか…。登場キャラみんな「あ～～～こんな人いるわ」という感じなのも流石でした。

会社員 / 畑中瀬路奈

- ヤクザと中学3年生の異色の友情物語。ヤクザと中学生なんて普通に暮らしていたら関わることなんてないのに物語の中では成立していてなんの違和感もないのが面白くて「これはあたりだ」と思いました。

元書店員 / 八重田幸子

- 登場人物が和山先生作品らしい、ちょっと抜けてて不思議でそして愛しいキャラたち。その上で長編らしくストーリーの山場があって「どうなるの!？」というドキドキ感もしっかり堪能できます。ラストシーンに涙ぐんでしまった。これは絶対実写映画化向き！

会社員 / 内野智未

- 1冊完結マンガの傑作がまたひとつ、和山やまの脳から生まれた。。。中学3年生の合唱部部长と歌がうまくなりたいたくザの、ある夏芽生えた奇妙な友情を描いた異色作。この作者にしか描けないベソツ溢れる関係性の妙を堪能しました。好き！着いて行きます。

菓子研究家 / 福田里香

## 選考員コメント・2次選考

- 狂児は聡実くんに出会えてよかったなあと思いました。聡実くんの高校生活を守るために会うのを我慢するくらい大切に、組長にいじられるくらい(いじり方えぐい)大好きで、狂児の「歯車の狂った」人生がハッピーエンドを迎える、そしてこれからも未永くハッピーに違いない素敵なお話でした。聡実くんはいつまでたっても迷惑そうな顔してると思うけど。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 本屋で購入後、駐車場で数分でスラスラ読めてしまいました。なのに読後の余韻が凄い。タイトル末尾の「！」マークが数字の「1」に見えたので読み終わってから暫くは続きが楽しみと思って過ぎて全1巻と知って絶望。作者の他作品も全て読みたくなりました。新たな推し作者が増えて嬉しいです。この漫画の影響でX JAPANさんの「紅」が今の若い世代に改めて広まって欲しいですね。

バンドマン / ターシ

- 天才的な、というほどマンガとして完成されている気がします。謎のリアリティさで没入してしまうほど面白い。

明文堂書店金沢野々市店 1F フロアプランナー / 木村俊介

- 和山先生らしいテンション低めの心地いい空気感のなか、ストーリーが進むにつれ感情が揺さぶられていき、とどめに聡実のあの歌唱シーン！作品の世界すべてが愛しくなるような、完璧な読後感でした。速攻で「紅」を聞いて余韻に浸った…のは私だけじゃないはず。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 真面目くんがガチのヤクザに歌唱指導をするという、新喜劇のような、しょもないっちゃあしょもないお話なんですが、和山やま先生のシュールかつセクシーな、クセになるキャラ造形のせいか、物語が進むにつれて訳のわからない愛おしさが読み手の中に芽生えていきます。1巻完結なこともあって、何故だか絶対に手放したくない一冊になること請け合いです。というか、もはやあらすじだけで優勝している。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

- 序盤からおどろおどろしい何か(ヤクザの匂い・・・?)が画風からまず漂っていて、「もしかして表紙のこの子最後に○ぬんじゃないか」「○ないまでも話が進むにつれて急に窓から新聞紙が投げ込まれてくるんじゃないか」などと勘繰ってしまい、ホラーがとことん苦手な私は怯えながらページを捲っていたのですがまあそんなことはなく。あとは和山先生のあの独特のシュールなノリに一種の吊り橋効果?を感じるがまま、どっぷりその世界観に浸っていました。特にあの紅熱唱までの持って行き方が見事です。「天使の歌声の喪失」「鎮魂曲」と単語だけ並べたら耽美すら感じるのに見守ってるのはタバコ臭いヤクザのおっさん達 in スナックというそのバランス感覚も好きです。からの狂児、からの卒業アルバム、からのあのカラオケルーム、からのラストシーンの余韻ある着地……。単純に一巻完結のお話としてのまとまりが良過ぎです。短編映画を観たような読後感、と一次選考の時に書かせていただいたのですがまさにそんな完成度の高さをこの一冊に感じました。あと巻末のあのプロフィール帳で更に私はもう……。なんなんですかあの丸は……そういうことじゃないですか……。本編の衝撃もさることながら巻末のあのおまけに私は打ちのめされました。この状況下なこともあり、友達に貸したっきり返ってこない紙媒体に痺れを切らしとうとう電子版も買いました。読みたい欲には逆らえませんでした。紙も電子も揃えることは滅多にないのですが惜しくはありません。この1冊の完成度に私は大賞をあげたいのですが、それとこれとは話は別ですので早くファミレス編が読めますように。

フリーランス / 金輪英恵

- 狂児さんが……のところで、私も物凄く驚きました。ドキドキしました…。カラオケの選曲が、どストライクです。

書店員 / 桶谷佳代

- どのコマにもふふっとさせる要素が詰まっていて、爆笑するというよりも、最初から最後までニヤニヤしながら読んでしまう作品です。出落ち感のあるタイトルかと思いきや、結構核心を付いているような…?!

会社員 / 畑中瀬路奈

- 和山先生ファンとしては「女の園の星」も捨てがたい！のだけれど、今年はやっぱりこの作品に1票。好きな作家さんは短編をしっかりと描ける人。そして短編の名手は長編作品もやっぱり魅力的に描ける。年齢的にズバリ青春期の入り口に立った主人公と、もうとっくに大人なもう一人の主人公。エキセントリックな出会いの設定。でも2人の出会いがお互いを少し大人に、少し少年に近づけていて最終的にやっぱり2人の世界は別々のものだけれどいつかの交わりがそれぞれの人生を変えるきっかけになっている。ラストシーン、大好きです！

会社員 / 内野智未

- 2作が同時に10位以内にノミネートの結果にびっくり。どちらも捨て難いですが「カラオケ行こ！」はヤクザまんがの新境地。ヤクザもので舞台立ては全然違うけど、なのに「動物のお医者さん」以来のユーモアの質を行間に感じた。このあわいの、絶妙な感覚を描けるって貴重なおもしろさだ。

菓子研究家 / 福田里香

- テーマ・表現・ギャグセンス等、作品全体の調和度から見て、現在での代表作はこれだと思います。近年の創作同人誌でも出色の出来でした。ほんとにコレを同人で描き下ろせるのはすごいですよ。気軽にカラオケに行ける世界に早く戻りますように……。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 一昨年に同人誌で出版された時に読んだ衝撃は忘れられない。ヤクザに中学生男子（合唱部部长）がカラオケで歌唱指導する、というぶっ飛んだ設定をすんなり読ませてしまう力技が見事だ。何より登場人物がいちいち個性的で、「こいつがどうなるのか目が離せない！」と思わせてしまう。主人公にとってはシュールな展開でも、引きの視点で描くことで笑いを呼ぶ、独特のセンスも健在。底知れないポテンシャルを感じさせる超新星だ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- ヤクザの狂児さんのしゃべりが面白過ぎて、真面目な聡実くんとおの掛け合いが楽しすぎてページをめくるのをやめられず何度も読んでしまいます。一冊完結で短いけど、だからこそ何度読んでしまう！そんな中毒性があります。オチも最高？！好き！

主婦 / 紺野泉

- 何ですかこの設定。引き込まれるしかありません。内容はタイトルが全てを物語ってますが、和山さんの目の付け所や設定が抜群に好きなんです。想像を絶する衝撃ではありませんが、最後に「ちくしょー やられたー」と叫びたくなる展開にはまさに脱帽です。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 小気味よいギャグが最初から最後までずっと襲いかかってきます。セリフ回しが秀逸で物凄く面白い、キャラクターが愛おしい、読み終わったあとの爽快感が異常。でも私の語彙力ではこの素晴らしい作品を説明することができないのです。ただのカラオケ練習ではなく、そこには成長と愛が詰まっているのです。とにかく実際に読んでこの気持ちを味わっていただきたいです。

建材メーカー勤務 / 竹本慧

- 2019年に出た「夢中さ、君に。」が面白くて、その後2020年に出た「女の園の星」の前作との違いに驚きつつ爆笑して、期待大で読んだ「カラオケ行こ！」がさらに爆笑で。なんだこれは。もうずっと笑ってたけどいい話だし。シュールで独特な会話が何度読んでも笑える。なにも聞かずにとりあえず読んでみてと薦めたくくなります。

声優 / 富岡美沙子

- 同一著者が同時に2作品もランクインという事は、票が割れる事は確実なので、『女の園の星』とどちらに投票するべきか悩んだのですが、考えている内にこの作品の凄さを実感しました。まず、学園モノとか教師・お仕事モノとか、一応カテゴライズ出来る『女の〜』と違って、ジャンル分け出来ないという事。ギャグ、ヒューマンドラマ、果てはBLとも取れる内容で、どの世代でも楽しめる間口の広さ、しかも単なるカラオケという身近なテーマをここまで面白く描けるのは、作者の技量があつてこそ。続編も決定という事なので、今後も期待しか無いです。

(株) 鳥屋書店 店舗企画本部 / 井出麻悠美

- 合唱、声変わり、ヤクザ、カラオケボックス…使われているモチーフの1つ1つが最高だし、何よりそれらの組み合わせ方が最高で、1巻完結の作品として完璧だと思った。含みのあるオチもいい！

ライター / 門倉紫麻

- 実は読むまではそこまで期待は薄かったのであるが、良い意味で裏切られた感じ。ヤクザの成田狂児と学生の岡聡実の関係と掛け合いが面白い。カラオケに真剣に取り組むヤクザ達の姿、迷惑がってる岡がいつも連れられて怖いながらも教える姿。そして最後は心打たれるストーリー性。おすすめしたい一冊。

デザイナー / 平沼寛史

- 短編作品の名手だ！とっていたら一冊レベルの長さでも読み応えのあるもので美味すぎる～～。「あっいまこの人(キャラ)何かを考えたな」という視線と間にドキッとさせられる。2作品同時ノミネートで皆さんがどちらに票を入れるのかワクワク。

往来堂書店・コミック担当 / 三木雄太

- いつもの和山作品が吉本新喜劇なら、こちらは松竹新喜劇というか、人情味多め。ヤクザと中学生の友情物語と言ってしまえば簡単だけれど、友情とはちょっと違うような、でも友情じゃないとも言いきれない、そんな不思議な人間関係が面白い。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 中学生とヤクザなんともひなまつりみたいな設定だがまるで違うありえない設定でも淡々と見れる漫画こちらも、ジワジワシュール

tetote 代表 / 力丸真

- 圧倒的な疾走感、エンタメの神髄っぷりをみせる笑いと葛藤と、クライマックスで訪れるカタルシス。こんな超絶作品が同人誌で世に出ていたなんて恐るべし。主人公はどちらも素敵なんですが、キャラクターの強さというよりふたりの関係性こそが面白いんですね。『夢中さ、きみに。』の強すぎるクセ(それもよし!)が、かっちりエンタメの型にはまるところも魅力的でインパクトある作風になるものかと驚きました。

会社員 / 末永龍介

- 本作と『女の園の星』の同時ノミネートは、旬の作家だけに致し方ありませんが、票が分散するだろうなあと危惧します。星先生の授業を受けたいのか、成田狂児とマイクを握りたいのか。悶絶する投票者の顔が見えるよう。私も迷った末、こちらに一票入れることにします。「ギャグの基礎体温の低さ」が和山さんの新しさで、ひょっとしたら『女の園の星』の方が本領なのかもしれない。しかし、本作のスキのない決まりっぷりは、ほとんど奇跡。それと、和山作品にしては、すこーしだけ血圧高めなのがいい。これは好みとしかいいようがありません。元々はコミティア向け同人誌だったことも肩入れしたくなる理由の一つ。まさに今のマンガ界を象徴する快事だと思います。

読売新聞文化部 編集委員 / 石田汗太

- 設定からして面白く、その設定で破綻なく一冊できっちり描き切っていて、大変読ませる作品。笑っていいの泣いていいのか、読みながら翻弄されて、まんまと物語に引き込まれている。

医師 / 岸本倫太郎

- 中学生男子がヤクザにカラオケに連れていかれる話。この一言で説明できる漫画がどうしてこんなにも面白いのか。読み始めたらこの和山やまワールドに引き込まれて離れられない、そんな感じでした。

会社員 / 津田圭

- 設定からして面白いですが、面倒な事に巻き込まれつつ、仕方なく付き合っていくうちに心情が変化していく中学生に、たまらなく共感してしまいました。

Books アイ新田エキナカ店 / 野口忠義

- 中学生がヤクザに歌を教える設定ってまずないだろうと思うけれど引き込まれてしまう。そしてちょっと深い。和山やま先生の描くキャラは濃くて虜になってしまう。カラオケで紅歌いたくなる～

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 和山やまさんの作品ってすごくシュールなギャグ漫画なんだけど、押し付けがましくないというかこちらに登場人物たちの描かれてなきなにかを想像させてくれる余韻というか余白がある。パンチの効いたギャグ漫画も好きだけど、胃もたれしないギャグ漫画として推したい。

鳥取の美術の先生 / 佐川由加理

- ところどころに読んでて吹き出すおもしろさ。

カメラマン / 平沼久奈

- 一冊でこの世界を作れるのが凄い。本当に面白くて、次第に仲良くなる2人にグッとくる。今年のクリスマスに友人にプレゼントしました。それぐらい人に読んで欲しくなる漫画です。

主婦 / 佐藤しのぶ

- こんなにも面白おかしくて、優しくて温かいエピソードを、一冊に綺麗に収めきってくれるものなのか。和山先生のセンスがこれでもかと炸裂しています。最初は「ありえないっしょ (笑)」みたいに軽めの感覚で読み進めていくんですけどね、結果「あってほしい…！」って思っちゃうあの展開。年の離れた個性的な男二人の友情なのか愛情なのかわからない素敵な関係を、多くの人に見届けて欲しいです。いや、ほんと「紅」ってのが、絶妙なんですよ……！

会社員 / 伊東敬祐

- 何度読んでも面白い。考えることを放棄した頭と疲れた体に染み渡る。キャラが立ちすぎた登場人物たちの織り成す世界にどっぷりはまってほしい。

主婦 / 赤坂真実

## 「水は海に向かって流れる」田島列島

### 選考員コメント・1次選考

- 人生のやるせなさに、飄々と、そして正面からぶつかっていく素晴らしいマンガでした。読み終えたあと、ああこのひとたちの軽妙でバカバカしく、どこかしみりするやりとりをもう読めないのか……と切なくなります。

会社員 / 末永龍介

- この柔らかなタッチの絵柄からは想像できないドラマがあった。こんな状況に置かれたら、複雑な感情に折り合いをつけることはできない。実際に主人公たちも苦悶の日々を過ごしているが、時折良いタイミングでユニークな場面が現れて和ませてくれる。重い話なのに読み進めるのが苦にならない。まさに海に向かって流れる水のように、読者も物語をなだらかに進んでいける。最後の着地は本当に見事で美しかった。短いながらも奥深いストーリーが、きつと、たくさんの人の心を染み渡らせるだろう。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

- いい漫画。噛み締めて味のある漫画。自分の父親の不倫相手の子供と同居することにぬるというストーリーなのにドロドロせずじんわりと良い物語になっている登場人物全員の背負う物語がいろいろ見えるのにこんがらがらず、すっと入ってくる。

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 連載はすでに終了し、最終巻も昨年9月に刊行済みの作品ではありますが、2020年を代表するマンガとして推さないわけにはいかないということで。全3巻の隅々まで構築的で、コマの運び、構図、ネコのむーちゃんを含むすべてのセリフ、登場人物の表情や目線の配り方、細かいしぐさの一つ一つ、雨や波の描写まで、どれ一つとしてぼんやりと見逃すことはできなかった。柔らかい画風から受ける当初の印象を覆して、ページをめくるのにたいへん時間がかかるので（小ネタがいちいち大好きでした）、読後の充実感が半端ない。主人公の高校生・直達と、OL榊さんの、じれったくも、まっすぐに相手を思う中でじっくり深まる関係を縦糸に、二人が暮らすシェアハウスに出入りする個性的な住人や知人友人一人ひとりのかかわりを横糸として織りなす丁寧なストーリーテリング。誰かを思いやるときは手を抜かずにしっかり思うこと、相手の気持ちに想像力を巡らせて自分のこととしてしかと受け止めること、人の心の内を土足で踏みじらないよう気を配ること、それでも漏れ出てしまう気持ちには嘘をつかずに伝えようと正面から向き合うこと。臆さず、辞さないこと。……といった、世代や性別やそのほかの属性を問わず、万人が忘れてはいけないことを、さりげなくも過不足なく、しかも余韻をもって描き切った田島列島先生に深い感謝を捧げたいです。掲載は別冊少年マガジン。2018年9月号の連載開始からまる2年。その間に世の中はすっかり変わってしまったけれど、最後の最後で榊さんが見せる曇りのない表情にホッとさせられる。

会社員 / 天野賢一

- 人との関わりを考え直させてくれて、心を開放して洗ってくれるような物語。テンポよい会話も楽しい。

医師 / 岸本倫太郎

- 誰でも多かれ少なかれ、子どものころに親から呪縛を受けている。本作は「人を好きにならない」という呪縛を受けた女性と、「捨てられる」という呪縛を受けた男性が、2人でともに生きる決意をするまでの物語。ラストに主人公が発する宣言は、その1行だけを読んだらウソくさいくらいに明快。しかしそこに至るまでの葛藤を、著者は真面目に、主人公と読者と一緒に、迷いながら間違いながら一步一步描いてくれた。だから本当に胸を揺さぶられるラストシーンになった。しかも、こんな真摯でシリアスな話なのに、全体にはユーモラスというバランス感覚も奇跡的。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 生き生きとしたキャラクターたちが物語に引き込んでくれる。軽いギャグが多めで、絵柄と同じくライトな読み応えだからか、どんどん読みたいと思う、面白かったです

tetote 代表 / 力丸真



- とうとう完結してしまいました。淋しい。でも3巻で丁度良かったです。ギュッと詰まってきました。最後の1コマまで、噛み締めて読みました。最後に水が流れていきましたね、良い終わり方でした、3冊読み返してみて、一番好きな台詞は2巻中盤の泉谷ちゃんの「私の中に修羅がおるのです…」からの教授の「みんなにもいるよオ〜ピロリ菌みたいなもんだよ」の流れ。修羅…いるいる。。。凄い台詞です。怒りたくても、怒れなかった人。怒って、後悔してしまった人。良い子でいたくて、踏み込めない人。雑音とともに生きてる人。そんな人は絶対、この漫画は薬のように効いたと思う。時にはギスギスしながらも、うどんや餃子を食べながら人間、生きていくんですね。(納豆とトマトが入った餃子、美味しそうでした) とても「イイもの」な作品でした。←子供はわかってあげない風ところで田島列島先生と西野七瀬さんの対談を読んでぶっ飛びました。1話目を作った時点ではW不倫設定がなかったってマジか。。そんなことありえるのでしょうか。。

会社員 / 佐々木つむぎ

- リアルな空気感が伝わってくる。ショッキングな出来事があっても、ドラマのように激しく泣きわめく事はなかなかない。言葉にできず悶々として、日常を続けながら、ゆっくりと感情を消化していく。漫画ならではの表現で、その過程を描き切った奇跡のような作品。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 思いやりがすぎる、できた高校生直達くんを中心にした、青春あり、シェアハウスあり、駆け落ちあり、女装あり、教授あり、さえない漫画家あり、猫ありのボーイ・ミーツ・ガール・ストーリーです。ひねくれたり、こじらせてたり、めんどくさかったりしても、嫌な人はいません。たぶん。盛り過ぎじゃないですか？でも腹にはもたれない。すんと心に落ちる。よかった。そういうお話です。

教員 / 戸田穠

- 去年の2次選考でも推したが、2020年、見事に完結したので推す。飄々とした筆致で、とある家族の事情を描く。どんな家庭にも、こみいった事情は転がっているもので、それなりにシリアスで、だからこそありふれた話でもある。それを描く筆致が優しい。抗うでなく、逆らうでなく。ただ、そのようにあるもの。タイトルもいい。「水は海に向かって流れる」。沁みいる。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

## 選考員コメント・2次選考

- 一次でも投票していました。近年、新作をこんなにも心待ちにした作家さんは初めてでした。そして期待をした結果、ハードルを軽々と超えてここまで心を揺さぶられた作品も初めてでした。漫画を好きでいて良かった。今まで漫画を読んでいて良かった。田島列島先生に心から感謝を申し上げたい気持ちです。一次投票のコメントで言いたいことを言い尽くした感もあるのですが。何故こんなに心惹かれたのか今一度、振り返ってみると私には「怒る」というテーマが凄く響いていたのかな、と。自分自身の日常の中でも怒りたくても怒れないこともあったり。怒られるから隠したいこともあったり。怒っていることを知ってもらえるだけで、救われることもあったり。大人になると、歯磨きをしたり、お土産を食べたりして、様々な感情が巡りながらも淡々と日常という現実を生きてるわけです。でも漫画では2人が前に進むことが出来て。自分も救われた気持ちになりました。水が海に向かって流れたラストシーン本当に素晴らしかったです…！！（情緒不安定）田島先生、次回作も楽しみにしております！！！！一生ついていきます！！！！

会社員 / 佐々木つむぎ

- 必ずそうなる事の中にも色々あるそういう意味の伏線回収 chill out な漫画で好きです

tetote 代表 / 力丸真

- あらためて全3巻を一気読みしたらもう後半涙がとまらない。あれえ、もっとさわやかな話だった記憶が……。いや、それはこの軽妙洒脱すぎる超絶トークセンスのおかげ。そしてこのマンガは、みんなのその明るさが、不器用な勇気が、もっとという愛が、ある少女の10年凍結したままの心をゆるゆると溶かしていくお話でした。そうそう……。世界に傷つけられた恨み、それでも前向きに生きようとする意思、そのせめぎあいの中で生まれる衝突、葛藤、笑い。登場人物の誰もが愛おしくなる。ケタケタ笑いながら泣かされるという至高のマンガ体験でした。はあ……。 (ため息)。

会社員 / 末永龍介

- この著者らしい「大人の都合で苦勞する子供」を中心として、人間関係にまつわる（往々にしてシビアな）ドラマを柔らかいユーモアに包んだ佳作。

ライター / 福井健太

- 前年に続いて推してみてもつくづく思ったのは、このマンガについて何かを書こうとすればするほど、たいへん難しくなるということだ。完結した今となっては一層そう感じます。読み返すたびに新しい発見があるマンガが世の中にはときどき存在しますが、まさに本作がそれ。何度も深読みをさせるし、その解釈で合っているのかなあと反芻し、結果的に、そもそも解釈なんかしたくなかったんだよ俺は、と思わせるところがある。感じればいい、みたいな。タイトルもそう。どんな意味が込められているのだろうかずっと考えていた。わかるような、わからないような……。しかし思えば、物語の幕開け、主人公の直達が駅前でOL榊さんの出迎えを受ける場面は雨の夜だったし、直達が榊さんに自分の考え（思い）をしっかりと伝えるのも初夏の海で、だった。水の流れはコントロールできない奔流だけど、それでもすべての水には還るところがある、というようなことを言っているのかもしれない。まったくとゆるく脱力した嗤い（笑い）の連続投入さえ成し遂げればそれでよしとする「志の低い」マンガ（それはそれでマンガの役割としては立派なものなのだけど）も目立つ昨今、心がじんわり温まる小さな笑いを折々に配置しながら、その上で、真摯に生きる意味、傷つきつつも人と真正面から関わり続けることの大事さをしっかり描き切ったこのマンガが達成したものはとても大きい。自分はこれからもこのマンガをたびたび読み返すことになるのだろう。

会社員 / 天野賢一

- これはいちばん豊かな作品だったと思います。笑いも涙も、愛も憎悪も、葛藤も決心も、成長も若さも、過去も未来も、ぜんぶ入り混じっていて。主人公2人だけじゃなく、周囲のみんなの人生も入ってるし。絵柄・語り口はおだやかだけど、ものすごい作品なのは。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 登場人物の心の機敏が、セリフではなく絶妙な表情や間(ま)で繊細に描かれているのが印象的。しかもセリフを蔑ろにしているのではなくむしろそのセンスは抜群で、造語やギャグネタは相変わらず天才かな？と思うくらい最高です。最終巻のあの人の最後のセリフがもう本当に本当に泣けて仕方ありませんでした。

会社員 / 小野塚博之

- おじさんと一緒に暮らそうとしたら、父がむかし不倫してた女性の娘も一緒に暮らすことになって…。こんなあらすじだけだとドロドロした展開を予想してしまうけどそんなことはなく、どちらかというとなにも起こらない平和な展開。そうかと思うと、登場人物たちのズレが少しずつたまって行って、面倒くさいことがあれこれ発生。それらの面倒なことはニュースになるほどではないけれど、実際に身にふりかかったら大変なことばかり。地球の平和を守るとか、おおげさなことではないけれど登場人物たちを身近に感じられ、読みながら知らず知らずに日々の自分を振り返っていました。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- この作品を2次選考でひろえるのがマンガ大賞のすごいところだと思う。いや、本気で。おそらくは事例としては、ありふれた、なんてことはない話なんだろう。自分も、話として聞いたらふうん、とか、へえ、で済ます話なんだろう。人間生きてりゃ色々ある。それぞれの事情も。それぞれの何やかやも。そういう、ひとからげにしてしまうことができるそれを。丁寧に、でも飄々とした筆致で、どこかおかしげに描いてみせるのがこのマンガの善性だと思う。何回でも云うけどやっぱタイトルが良い。『水は海に向かって流れる』。沁みる。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- セリフ回し！セリフ回し！セリフ回し！！！！ とてつもなくもどかしい登場人物のありようが、この上なく愛らしいのだけれど、その愛らしさはとても不確かで捕まえづらい。その捕まえづらい愛らしさが、言葉の距離感で表現されきっている。1巻の冒頭に出てくる言葉から、3巻の完結のひとことまで、本来捕まえきれないものの輪郭を、言葉でなぞりきっている。「私の中に修羅がおるのです…」「みんなにもいるよォ〜ピロリ菌みたいなもんだよ」なんてやりとりが、どこにあったでしょうか。小説で書かれた言葉はかならず重みを持って迫ってくる。マンガの言葉はつねに「スルーしてもいいんだよ」という寛大さをもってそこにある。その「マンガの言葉」がこんなに最初から最後まで貫かれた作品はない。真剣さなんてものに振り回される野暮な意識より、ふんわりとした我々の無意識は、もっと大切なことに気がついている。その無意識が形になって表れた、マンガを読む楽しさここにあり、という言葉の作品。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 最近では珍しい？気もするゆったりと味わい深い作品。こんな青春現実にはあまり体験した人いないよね、でもあって欲しい。物語の終わり方の雰囲気は僕は大好きで、このくらいの感じだとその後の想像がずっと膨らんでいきます。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 人生は他者との交わりによって否応なしに動く。関係が浅ければそれなりに、深ければまた深いなりに。しかし関係の深浅、多寡を超えて、人生を大きく動かすものがある。他者と精神的な何かを共有できる経験だ。楽しさや苦しさの共有であったり、共通の理解であったり、心の重荷の分け合いであったり、それは当人たちにしかわからないものでいい。その分かち合えた思いが、本人の明日を前向きにしてくれるものであれば、すばらしい。…ところで昭和のネタを盛り込みすぎではないのか、本作。

会社員 / やのこうじ

- うまく言える気がしないのですが、割り切れないものを割り切ろうとして、やっぱり割り切れなかったけど、割り切ろうとしたことで、溜まっていた水は海に向かって流れ出したのかなど。やっぱりうまく言えないけど、田島列島先生のお話って、パンクを感じます。ラブ。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 素晴らしい結末を迎えました。不幸の糸で繋がった2人の、複雑な感情に揺れながらも前に進んでいく様に、何度も心を打たれました。重いテーマでしたが、むしろ笑えたり、穏やかな気持ちになることの方が多く、奥深いのにとても読みやすかった。まさにタイトル通り、物語は流れる水のように、読者の心を緩やかにほぐしながら進んでいきました。この作品に出会えて本当に良かった。落ち着く、笑える、泣ける。名作です。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

- みんな優しいところがなんだか切なくて優しくてだからこそ気持ちの收拾がつかないんだろうな。でもわかると読みながらおもってしまった。

カメラマン / 平沼久奈

- 父親の不倫相手の娘さんとアパートで同居というシチュエーションに遭遇した場合、ドラマのような劇的な感情の発露よりも「お、おう」という戸惑いの方が強く、どうしたらよいのか途方に暮れてしまう。田島さんの作品の傾向として「身に降りかかってきた現実味の無い話に対してのリアクション」という作風は多くの人に「いざそうなったら、そうなるよなあ」というある種のおかしみを伴った共感性に溢れており、だんだんと状況を受け入れていくに従って湧いてくる怒りや、ある種の諦観からくるカラッとした笑いが切なくも胸を打つ作品に仕上がっており、当該作もこれからの作品も楽しみにしています。

住職・ライター / 蟬丸 P

- 洗練された素朴というか、生々しい人工物というか相反するものがきれいに同居する様が得難い。

レビュアー / 縣丈弘

- 素晴らしいマンガです。圧倒的。

マネージャー / 樋口健

- 完結作品。内容は昼ドラ。だけど、その絵柄と会話の内容の緊張感のなさ（ほめてます）から、淡々と話は進む。自分以外の人に振り回され一度止まってしまった水が、折り合いをつけ、また流れ出すまでの物語。「怒ってもどうしょうもないことばかり」と言っていた榊さんが、ちゃんと怒れてよかった。

主婦 / 赤坂真実

- 第3巻で完結となった田島列島の『水は海に向かって流れる』（講談社）は、ハードなバトルもドロドロとした情念もないけれど、呼んでいてわき上がってくるような温かさを感じられて好きになってしまう作品だ。直達という少年は父親、榊さんという女性は母親が、どちらも不倫の状態を駆け落ちした過去を持つ。それと知らず直達が高校進学とともに入った下宿先で出会った2人は、事情を知ってお互いに気まずさを感じる。お互いに不倫したのだから、どちらがより悪いということはないのかもしれないけれど、自分の父親が榊さんの家をめっちゃめっちゃにしたという直達の負い目は、後に父親が出戻って母親をよりを戻し、それまでの日常を取り戻したことからより強いものがあつた。榊さんの母親は結局家には戻らず、外に別の家庭を作って、それが榊さんの心情を憂いの色濃いものにしてしまっている。そんな榊さんが、母親に会いに行こうとする展開から進んでいく第3巻の果て、榊さんは母親への気持ちに決着はつけられるのか。そして、直達は榊さんへの気持ちを貫き通せるのか。そんな関心を持って呼んでいける。ドロドロとした情念が渦巻きぶつかりあって混ざり合い、心を狂おしくさせる設定ながらも、田島列島ならではの描線を持ったほのぼのとしたキャラクターやシンプルな背景が中和する形となつて、登場人物の誰にも忌避感を抱くことなく読んでいけるところが素晴らしい。コミュニケーションが限られ、内に引きこもりがちな世情なだけに、外へと向かって出て行き、誰かとつながっていきながら家族と、恋と、仲間の意味を描き出したこのマンガが持つ価値はとてつもなく大きい。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 取り返しのつかないようなことって、実はどれだけ怒っても恨んでも、結局は覆水であり、盆には返りません。で、そのせいで嫌な目にあつた人にもその後の人生があり生きていかざるを得ないわけで、自分の中でどこかの時点で決着をつけて過去のものとしていくわけです。そんな重たい話なのですが実にやさしい世界としてそれを描写しているのがこのマンガの凄さなのではないかと思つます。

会社員 / 林礼春

- 何か、もしドラマ化されたら、榊さんの役は松岡茉優さん！のイメージが離れません。ドラマ化されないかな…と、楽しみで仕方ないです。

書店員 / 桶谷佳代

- すごく重苦しい話のはずなのに、最初から最後まで爽やかで温かい雰囲気でした。直達さんと千紗さんがとても優しく、自分より相手を思いやる人たちだったので。冷静でいることは逃げで、怒ることは向き合うこと、という話には、まったくもってその通りかもしれないと思いました。自分の気持ちに向き合って、真面目に生きることはしんどいです。でも、しんどい先に希望や幸せがあってほしい。それを叶えてくれる物語でした。

主婦 / 堀江千秋

- 個人的に昨年は1次も2次も投票したこの作品。「もちろん今年も！」と思いましたが、1次で5作品を選ぶにあたって、「絶対にこの作品はほかの人からも挙がってノミネートされるはず！」と信じて、あえてほかの作品を挙げました。結果はやはり納得のノミネート。そしてあらためて読み返すと「やっぱり好きだなあ」と、しみじみ思うのです。人が「怒る」ということはどういうことなのか。自分の中にあるその気持ちにどう向き合うのか。その重いテーマと、さらっとした作風のギャップに唸られます。3巻で完結の物語となりましたが、内容はとても濃いものでした。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 止まっていた時を動かすことができるのは、寄り添って生きてくれる人がいるから。それが男女の物語ならこれはもう最高のラブストーリー！ベースのストーリーは「お〇いきりテレビ」に相談しちゃうような内容なのに、独特の作風で最後までホッくりしながら読める味わい深い作品です。

鍼灸師（漫画家専門・兼美容鍼灸師） / 碓氷麻里子

- 読むと時間の感覚が変わる漫画、というのがある。そのひとつがこれ。読み始めると、今生きている自分の世界から、一気に違う流れの世界に放り込まれる感覚に襲われる。ほと、ほと、と流れる時間。その中でふんわりタッチで描かれている実は結構へびーな体験や背景。この独特な感覚が本作の魅力だ。自分の父親が不倫していた相手の娘に会う、となるとこのテーマを扱う作者さんによって、いくらでもへびーに、いくらでも苦しく、もしくはもっと純度を高めた痛さや高潔さに昇華した作品にすることも出来たと思う。だけど、今作はふんわりと始まって、痛みもあるけれどとても静かに。まさに「流れていく」ように進んでいく。母に会いに行くシーンは映画『海がきこえる』を思い出させた。こういう時の男女はとてもドラマチックだと思う。最後まで一気に読める、雨の日の休日におすすめしたい漫画。

会社員 / 西尾美里

- 田島列島作品はほんとうにいい。なにがいいのか一言であらわせないのがもどかしい。人間として営む中で、この作品を「いい」と思う気持ちは大事にしていきたいと思っております。そしてこの作品を「いい」と思う人となかよくしていきたいなとも思います。なかよくしましょう。

株式会社プロプラス 商品部 / 池本美和

- おじさんの家に居候することになった高校生の直達と、そこに住む癖のある同居人たちとの交流を描く良質な人間ドラマ。親世代の過去の過ちとそれに翻弄される子世代という重いテーマを扱っているが、軽妙なタッチでさくさく読ませる。登場人物の心の機微を丁寧に描きつつ、考え尽くされた構成で3巻で綺麗に完結しており、手にも取りやすい。「子どもはわかってあげない」に続き傑作を生み出した作者には脱帽。

弁護士 / 三村量一

- 綺麗な完結。田島先生の作品は絵柄シンプルだけど体温や季節の空気、匂いが感じられる。これもやっぱり実写化、映像化でも観てみたいと思う。漫画としての表現の良さがあつた上で、別媒体でも観てみたいと思えるのは登場人物が一人一人しっかり作品の中で生きているから。シンプルなんだけど生々しい。そしてとてもあたたかい。

会社員 / 内野智未

- 全3巻で過不足なくまとめられ、読後の満足感が非常に高い。自分も同じアパートの住人として主人公たちと一緒に過ごした錯覚さえ覚えてしまう共感性の高い作風はすごい才能だと思う。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 田島列島先生の漫画はどの作品も、心の隙間が見事に描かれていて、クセになります。誰もがそれぞれの事情を抱えて生きているわけです。そしてそれぞれのペースとタイミングとバランスで、これからも生きていく。その豊かさが描かれているような気もしてしまうような。ワケあり家族の日常漫画、と一言で言ってしまうことのできない奥深さがある漫画です。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

# マンガ大賞2021 ノミネート作品

週刊ヤングジャンプ / 集英社

## 「【推しの子】」赤坂アカ、横槍メンゴ

### 選考員コメント・1次選考

- 表紙からの可愛いアイドル漫画かと思う印象を良い意味で裏切ってくる!!! ミステリーとコメディ要素が絶妙で、続きが早く読みたくなる漫画。主人公達に幸せな未来が来ますようにと願わずにいられない。

主婦 / 佐藤しのぶ

- アイドルものなんでしょ。。なんて軽い気持ちで入った自分を恥じたい。転生はあるは復讐はあるは、想像を常に超えるスリリングなストーリーにガクブル。『アクタージュ』で解説されていた演技メソッドや、現代アイドルたちが抱える闇の話など、キラキラした絵からは想像できない、なかなか社会派で硬派な内容。芸能界、怖い。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

- 近年の芸能シーンに見られる諸々のメタ的な解題を、転生ものとフダニット文脈に盛り込んだ作品として、こんな原作者・作画者コンビで読めるとは…。

会社員 / やのこうじ

- まさかの転生もの……これは思いつかんかった！

文筆業 / 海猫沢めろん

- 推し、アイドル、転生、サスペンス etc . . . 、凝縮された展開に圧倒された1巻目。読みはじめと、ここまで印象が変わる作品もめずらしいですね。今後も思い切りのよい「番狂わせ」を期待しております!!!

株式会社プロプラス 商品部 / 池本美和

- ここ最近一番毎週の連載が待ち遠しい作品。一巻の衝撃からどう話をもっていくかと思ったが、ずっと目が離せない面白さ。横槍さんの絵柄も可愛いし、赤坂さんのネームも面白い。赤坂さんの他作品も読んでみようと思わせるくらい、ファンになりました。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- アイドルものかと思いきやいきなり裏切られる展開で持っていけました。話が進むにつれて伏線が回収されつつ、様々なエッセンスを含めながらダークさとコメディさを兼ね備えた絶妙なバランスで進んでいくストーリーが素晴らしい。推しの子を推します！

会社員 / 三浦佑樹

- 今一番続きが気になる作品。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- タイトルや表紙からは想像できないシリアスな展開と適度な笑い。どんでん返しに次ぐどんでん返しで目が離せない

会社員 / 齋藤隼

- なんて面白いマンガなんだ……。なんなんだ、このマンガ。特に1巻、なんて面白いんだ。。いや、2巻も面白いんですが、2巻はこの先への布石的なところがあって、その後の連載へのアレがソレというところもあり単巻で言う1巻のほうが衝撃度としては高く……とはいえ、なんなんだこの面白さは。どうしてもネタバレになってしまうそうでアホなコメントしかできないくらい面白いです。なんなんだコレは……

イロイロ屋 / 杉本善徳

## 選考員コメント・2次選考

- 転生というファンタジーと芸能界というリアルがここまで綺麗に混ざり合っているなんて凄すぎます。今、描かれるべき、そして、読まれるべき、エンターテインメント作品です。ちなみに私の推しは有馬かなちゃん！  
女優 / 齋藤明里
- 斬新なテーマにダイナミックなストーリー展開。それでいて予測不能。コミックスの1巻をまとめて読むとやはり驚愕。多少の強引さすらも計算されたようで、非常に考え抜かれていました。  
サブカル専門ライター / 河村鳴紘
- 作品のタイトルに込められた意味を知った瞬間にゾワゾワと鳥肌が立ちました。ネタバレに触れてしまうので敢えて多くは書きませんが、いい意味で怖い作品だと感じました。ワクワクの震えが止まらなかったです。まだ読んだことがない方にはあらすじも何も知らない状態で読んでほしいです。「えっ！？本当に！！」となってほしいので。私たち読者の想像しえない展開が今後も期待できます。  
元書店員 / 八重田幸子
- 単なるアイドルものではなく、芸能界の裏表から、オカルト要素まで含めて展開していくストーリーに、良い意味で裏切られ続ける良い作品です。横槍メンゴ先生のポップな絵柄に赤坂アカ先生の鋭い切り込み、練られた構成が上手く噛み合っている作品だと思います。間違いなく推せます。  
会社員 / 三浦佑樹
- 推しのアイドルの子どもに転生して、禁忌のオタク街道まっしぐらかと思いきや、急角度のシリアス展開連発に度肝を抜かれました。1つのジャンルとしてくることがとても野暮に感じるくらい、センセーショナルで新しいマンガだと思います。物語の変化に期待と高揚感が高まり、そうきたかと思わせる展開に驚きと裏切りを感じます。急激にIQが下がって「あ...すごい... あ...面白い... 面白い... あらー... あらら... すごい面白い...」と、語彙を失ってしまいました。作者のお二人の素晴らしいタッグには尊さしかありません。物語もマンガもどちらも魅力的過ぎます。自分は今まで何かを推すということがあまり無かったのですが、こりゃあ間違いないですね。推しの子、「推し」です！  
デザイナー / シンガーソングライター / 平松新
- タイトルや表紙からは想像できないシリアスな展開と適度な笑い。どんでん返しに次ぐどんでん返しで目が離せない  
会社員 / 齋藤隼
- 今一番に推せる！早く続きが読みたくなる漫画です。ミステリーとギャグが絶妙で、とても好きです。  
主婦 / 佐藤しのぶ
- ジェットコースターアイドル転生マンガ。この勢いのまま突っ走って行ってほしい。  
漫画読み / サイトウマサトク
- 最初はてっきりアイの子供を育てる医者のお話かと思っていたらまさかの転生ものでびっくりしました。登場人物が皆美形なので目が嬉しいです。これからの展開が楽しみです。  
自営業 / 川崎綾子
- アイドルものなんでしょ。。なんて軽い気持ちで読みだしたら大間違い。転生はあるは復讐はあるは、想像を常に超えるスリリングなストーリーにガクブル。『アクタージュ』で解説されていた演技メソッドや、現代アイドルたちが抱える闇の話など、キラキラした絵からは想像できない、なかなか社会派で硬派な内容。しかし、芸能界って怖い。  
ブランド October Beast 代表 / 北山友之
- こんな話なのかな、という読者の予想をみるみる裏切ってくれる作品。今回のノミネート作品の中で一番意表を突かれました。もっと読まれて欲しいし、たくさんの人に同じ驚きを味わってほしいです。  
会社員 / 津田圭



- 1巻の終盤で悶絶しました。老若男女問わず、読むと面白い作品だと思います。もちろん、人の好みというのは千差万別なのですが、それでも僕個人としては、ここ最近でオススメのマンガを聞かれたときは最初に本作を挙げる人が多いです。マンガ慣れの度合いに左右されない全方位系の作品だな、と。強いて言うなら、ネタバレしたくないので薦める際に「いいから読んで！」とかしか言えないのが難点でしょうか。今もコメント書き辛えーーーと思っています。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 2020年、読者（私）を翻弄させたマンガNo.1を選べ！ってなったらこちらを推します。そもそも最初から翻弄されてたし、1巻読み終わった時点で術中にはまっていた。推しに対するエモさへの共感もさることながら、サスペンスとしても気になることが多すぎる。一粒で何度でも美味しい珠玉の作品だと思います。

株式会社プロプラス 商品部 / 池本美和

- 推しの子というタイトルと表紙絵から、アイドル・星野アイを中心とした芸能界をテーマにした作品かと思いきや、第1話で衝撃の展開を迎え、第2話でタイトル「推しの子」がダブルミーニングであることに気付かされる。そして、第1巻を読み終える頃には、ミステリー要素もが色濃くなっており、読者を全く飽きさせない展開に脱帽。赤坂アカ・横槍メンゴの強カタグというだけでも話題性があるが、今後のストーリー展開から目が離せない作品である。

弁護士 / 三村量一

- 1巻！ 1巻が天才の仕事！ 物語の始まり方として1兆点の始まり方よ。この1巻を成り立たせた時点でこのマンガの存在価値はあった、確かに世に問うた、キズ跡を残したのだと俺は思う。この漫画がこの先どんな展開になろうとも、まずは1巻！ 1巻をなんの前情報もなく読んでほしい。話はそれからだ。そしてタイトルを振り返って震えてほしい。『【推しの子】』……！

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 「そう来たか！」の連続で、ブンブン振り回されるジェットコースターのような作品。タイトルからして『推しの子』の意味ってそっちかーい！ だったし、作中で描かれる死のタイミングも経緯も意表をつくものばかり。でも、何より凄かったのはアイドルのキラキラ感。そうなんだよなあ、抜群の虚実と底抜けの明るさと笑顔と、目には星。物語がどう展開していくのか、肩すかしの連続で不安でたまらない感じも妙に中毒性がある。尊い……

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- 表紙に騙された！ 兎に角、面白い。止まらない。内容に触れてはいけない気がするので読んでみて、私のように嵌って欲しい。1つだけ言えるのは、愛久愛海（アクアマリン）のネーミングはないわ〜（笑）

アニメイト / 鈴木寛子

- 凄いな。ミステリー、リインカーネーション、青春群像、職業もの、芸能界内幕、アイドルオタク考察、とどれだけストーリー要素を詰め込んだ、と唖然とする。驚くべきは、それが破綻なく次から次へと怒涛の展開でぐいぐい惹き込まれてしまうことだ。いやはや参りました。傑作！

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 推しの子ってそういう意味！？のっけからぶっとんだ設定ですが、どんどんおもしろくなっていく……。

文筆業 / 海猫沢めろん

- 日本のマンガは「コミックスを売る」「巻数を伸ばす」というビジネスに傾きすぎて、冗長になりすぎたのかもしれない。本作は昨今のマンガでは考えられないような展開の早さ（出し惜しみ感一切なし！）、設定の強さで多少の説明不足はなんのその、強烈なドライブ感で読み手を作中の世界にグイグイ引きずり込む。もしかするとマンガを始め、日本の物語コンテンツ全般が抱える「テンポ」という弱点を浮き彫りにし、解消する道筋を示す転換点になる作品になるかもしれない。今年度の選考対象となるのは2巻までなので、まだ2021の大賞には至らないかもしれないが、来年の2022においては大本命に浮上するかも。このスピード感、凝縮感、クオリティを維持したまま、爆走してくれますように

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

- まだ2巻ではありますが、展開の早さが凄いです。サスペンスとしても芸能界モノとしても面白いです。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 横槍メンゴ先生は短編集で、赤坂アカ先生は「かぐや様は告らせたい」でハマった漫画家さんなのですが、コラボしてちゃんと面白って凄い。異世界ではないですがこれも転生モノ？なのでしょうか。好きなアイドルの子供として生まれ変わった主人公のお話なんですけど、序盤のストーリーで不穏な空気を出していたのですが、可愛い絵柄で油断するとかなりヘビーなブローを喰らいます。アイドル・芸能界・ミステリーのエンタメ要素てんこ盛りでドラマ制作側の描写も面白く、かつネットの誹謗中傷などの問題に対しての作品内の作者達のメッセージ性にスカッとします。何処までの広がりを見せるのか、最後まで見届けます！

バンドマン / ターシ

- キラキラな理想の世界としては描かれない芸能界を舞台に、リアリティ番組やアイドルシステムといった近年の芸能シーンに見られる諸々をメタ的に解題しつつ、しかし同時に転生ものでフダニットで青春ものでラブコメ要素まで盛り込もうとしている怪作。この原作者と作画者コンビは読者をどこに導いてくれるのか、目が離せない。

会社員 / やのこうじ

- ただのアイドル推し漫画と思って敬遠していたが、なかなかどうしてしっかりした話の作りになっていてとても驚いた。現代の闇とも言える部分にも踏み込んでおりとても面白く読めた。今後がとても楽しみな作品

あゆみ BOOKS 杉並店 店長 / 土屋修一

- 転生、復讐、芸能界サバイバル、そんなに詰め込んで大丈夫なの？と心配になる一々なんてことはない。ガングラン転がっていくお話にグイグイひっぱられ、いいようにひっくり返されてしまいます。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 横槍メンゴさんの作品が好きで『今度はアイドルかぁ…どんなふうになるのかな』と手に取ったらあれよあれよと読めてしまった作品。展開の速さが読んでいて気持ちがいいです。1巻は怒涛のダイジェストでぐっと引き込まれます。ネタバレに触れる前に自分の目で展開を追いたくなる面白さがあります。

会社員 / 伊藤千恵

- 漫画アプリ "ジャンプ+" にて連載。唯一アプリの連載で毎週更新を楽しみにしている作品。引きの強い1巻で驚き心掴まれ、2巻からの展開もエピソードごとに飽きない。原作の赤坂アカさんの理論的な話作りと横槍メンゴさんのポップでキャラの魅力が伝わる絵がとてもマッチしている。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- タイトル以外の予備知識なしで読み始めると度肝を抜かれる、鬼のような変化球式現代転生。いわば『コードギアス 反逆のルルーシュ』@芸能界 or アイドルカツドウ。実際の我々の世界でも起きてしまった痛ましい事件を彷彿とさせるテーマを描きつつも、「こうすることができたのでは？」を提示する社会派的な側面もあり、小気味良いイマ風の掛け合いツッコミの応酬も楽しい上に女の子がめちゃくちゃ可愛く、いろんな方向性から目が離せない作品です。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

- 不慮の死によって推しであるアイドルの子供に転生という昨今の「なろう系」とは別の視点で提供される転生ジャンルに「この手もあったか」と唸られました。知識を持って転生ジャンルに見られる問題解決の方法も封じられている中で、どうやってジャンルの強みを出しつつ物語を展開していくかという先が楽しみになる作品。

住職・ライター / 蟬丸P

- 芸能界の闇を絡めつつ、テンポ良く進むストーリー。成長と共に人と繋がり、芸能界の人々が織りなす人間模様が少しずつ見えて来ました。今後の展開にさらに期待が高まります。

教師 / 持丸宏司

# マンガ大賞2021 ノミネート作品

少年ジャンプ+/集英社

## 「怪獣8号」松本直也

### 選考員コメント・1次選考

- 12月、ギリギリで出ちゃったからには触れて置かないといけないのかな、と。放っておいても売れるとは思いますが、大物タイトルの度重なる完結で、次世代の超ヒット作が渴望される現場では、コレを売らずして何を売るのが。余り残酷過ぎないのも良いです。ヒーローものってこうでいて欲しい。

(株) 蔦屋書店 店舗企画本部 / 井出麻悠美

- まだ1巻ですが間違いなくおすすめしたい作品。1話からのインパクトが衝撃で、世界観、キャラクターの魅力、少年漫画特有の高揚感、画力、迫力など目を見張るものがある。全国的にも売れている作品だが、それも納得の面白さ。今後の展開に期待したい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 一度はリタイアした夢に向かって頑張る主人公が好印象で、今一番ヒーロー少年漫画らしい勢いのある漫画。

主婦 / 佐藤しのぶ

- 熱いバトル展開になりそうな、少年マンガの王道で、まさかの主人公が排除される怪物になるっていう、某巨人ものと似たようなストーリー展開となるのか?と思ったんですけど、主人公のバカなほどの明るさと前向きさに気持ちよい読了感があります!

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 怪獣、守りたい女子、少年漫画の面白いところ詰めまくりなのに、主人公は中年(笑) わくわくする漫画。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 世界観が面白い。話の流れは読みやすいが今後が絵もかっこいいそれぞれのキャラクターが立っているので今後の展開が楽しみな作品。主人公が30オーバーなのでなんとなく親近感がわく。

自営業 / 川崎綾子

- 主人公がおっさんというのがいい。少年の心を持った世のおっさん達に読んでほしい!とにかくかっこいい。ピンチになっても絶対助けに来てくれる!ってわかってても、ドキドキするし、いざ助けに来てくれた時の見開きや演出がかっこよすぎてびびる。かっこいいだけではなく、登場人物の行動や感情に胸が熱くなります。そんなキャラクター達も魅力的。主人公カフカの、腐りかけていたところからの努力。ちゃんと相手をみる人の良さ。クールに構えているけど誰よりも優しく熱い市川。キコルは新人でトップクラスの強さを持ち自身もあるが...。他にも魅力的なキャラクターがたくさん出てきます!バトルはかっこよく、日常はギャグもあってテンポ良く楽しいです。松本先生のギャグ個人的にとっても好きなんです。今年一番出会えてよかったと思いました。応援したくなるマンガです。

声優 / 富岡美沙子

- 第一話、どでかい怪獣の駆除した後の処理を、誰がどうやっているのかなんて考えた事なかったです。何も言わずに人にお勧めしたくなる一冊です。

教師 / 持丸宏司

- まだ始まったばかりだが、おじさん主人公を応援したくなる。

自営業 / 小野裕子

- 挫折した主人公が這い上がるさま、努力、ひよんなイレギュラーからのパワーアップ、、、そして、ライバルや強敵、、ここぞとばかり王道の要素をふんだんにつかっていますが、キャラクターも個性がたっていて、気持ちよく面白いと思える漫画です。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- 怪獣退治の専門家達と怪獣の戦闘のアクションが魅せる。そこに主人公の成長や怪獣の正体などの要素が無理なく絡み合って、今一番続きが楽しみな作品。

医師 / 岸本倫太郎

- 世間が害悪と見なして恐れる怪獣になってしまった中年男の日比野カフカが、怪獣ならではのパワーを正義のために使って怪獣を倒そうと奮闘する。松本直也の漫画『怪獣8号 1』(集英社、480円)は、カフカが怪獣として退治されるのを恐れ、正体を隠そうとしてあたふたするコミカルな様が面白く、怪獣を相手に振るうパワーのすさまじさから『ワンパンマン』のようなカタルシスも味わえて、1冊で何度も美味しさを味わえる作品だ。もっとも、人間を遙かに超越した存在となったカフカが行き着く先で、鬼に堕ちなかった『鬼滅の刃』の竈門禰豆子や、特級呪物の両面宿儺を抑え続ける『呪術廻戦』の虎杖悠仁のように、どこまでも正義を貫き通せるのか。それとも『デビルマン』の不動明のように、人間を憎み始めるのかが気になって仕方がない。怪獣が発生する世界の国々でも、とりわけ発生率が高い日本では、怪獣を相手に戦う防衛隊が組織されていて、憧れの職業になっている。そんな防衛隊員に、32歳の日比野カフカという中年男もかつてはなろうと挑戦しては、不合格になり続けていた。年齢制限が来て受験資格を失ったカフカは、それでも怪獣討伐に関わる仕事がしたいと、退治された怪獣を除去する清掃会社で働いていた。そこに朗報。防衛隊員受験の年齢制限が33歳まで引き上げられた。小学生だった頃の幼なじみで、今は防衛隊第3部隊を率いる隊長として戦っている亜白ミナの横に立てるかもしれない最後のチャンスに挑むカフカだったが、その身に起こったとてつもない事態が、彼を奇妙な立場に追いやる。今一度、防衛隊員を目指すと決意したカフカの前に小さな怪獣が現れ、「ミツケタ」と喋ってカフカの口に飛び込んだことで、カフカは人型ながら怪獣のような姿になってしまった。このままでは防衛隊に討伐されかねないと逃げ出したカフカの前に、新しい怪獣が出現して、人間の親子を襲おうとしていたその時、カフカのパンチが炸裂して怪獣が木っ端みじんに粉碎される。普通では考えられない強い力を振るえるようになったことで、防衛隊員になる夢が近づいたカフカだが、怪獣だとバレたら即討伐は避けられない。怪獣であることを隠して防衛隊員となり、怪獣の力を使いながら活躍していれば問題はないが、そううまく隠しきれぬのか。それより果たしてカフカはカフカのままでいられるのか。怪獣としての本能にカフカの心が飲み込まれ、暴れ出すかもしれない。そうなった時、カフカは禰豆子や悠仁のように兄への思い、祖父の教えに導かれ、自我を保ち続けられるのか。見守る必要があるだろう。第1巻の最後に登場した、円盤のような頭をした人型の怪獣が、何か画策していそうなことが連載の中で示されている。これはカフカのように人間が怪獣になったものなのか、それとも怪獣が人間のふりをしているだけなのか、カフカの将来を考える上で気になってしまう。それでも当面は、怪獣であることを隠し、防衛隊の採用試験に挑んで見事に採用されることになるカフカの、圧倒的なパワーで怪獣たちを粉碎していく格好良さにふれつつ、諦めないで頑張る大切さを思い浮かべよう。その上で、いつかカフカに差別や憎悪の感情が向いた時、彼が選び取る道を見極めることで、憎しみが憎しみの連鎖を招いて混乱が深まる現代社会の悪循環を、どうやって断ち切るかを考えよう。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

- おじさんが主人公の少年漫画。青年漫画ではなく少年漫画と言いたい。カフカ、32歳男子なのは？年下のレノのほうがりっかりしてて、いいボケとツッコミになってます。あ、でもちゃんとカッコいい怪獣漫画です。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 怪獣退治マンガ。シンプルですが、いかにもジャンプらしいマンガなので、12月発売で一気に駆け上がった感があります。

コミック担当 / 実松由夏

- まだ早いかも思いつつも、王道で面白いです。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- ストーリー的な奇抜さはないが、画力と演出・構成力が非常に高く、丁寧に描かれた王道少年漫画(主人公はおっさんだ)。「こういう漫画が読みたかったんだ」という感想を抱く展開が続き、飽きることがない。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 子供の頃の忘れていた憧れを思い出させてくれる、ヒーローになれなかったオジサンが主人公の物語です。仮面ライダーが如く、主人公は人類の敵の姿となりながらも敵と戦う、但し 32 才のもうオジサン。知恵と経験はあるけれど、だけどもう若く無い、それでも夢に目掛けてラストチャレンジしている様がジワっとくる熱いアクションマンガです。

デザイナー / 佐藤優

- 20 年最後にやって来た本命！さすがジャンプと言うべきかやっぱりと言うべきか掛け値なく面白い！

あゆみ BOOKS 杉並店 店長 / 土屋修一

## 選考員コメント・2次選考

- 発売後すぐお客様からの問い合わせ急増。ようやく入った追加を読んでその評価に納得。巻数が進んでいないためまだまだポテンシャルを出し切れていない気がするが……。これからの期待！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- いつも、女の子が頑張る姿や、子供が頑張る姿は見ていて応援したくなるのですが、おじさんが頑張る姿も応援したくなりました！たくさんの"努力"が詰まった漫画だと思います。見つけてほしい、手にとってほしい、読んでほしい、1位になってほしい！頑張れ怪獣8号！

声優 / 富岡美沙子

- 今後数ある漫画賞を総ナメすると思われる程のポテンシャルを持った作品なんの説明もいらない、とにかく読めばわかる！この面白さ、爽快さ！

あゆみ BOOKS 杉並店 店長 / 土屋修一

- 挫折からはじまる物語が熱い！こっちの予想を超えて色々な要素が増えていくし、先が楽しみで仕方ありません！

図書館員 / 金田健太郎

- 1話の入り方、構成、キャラ、画力、などなど引き寄せる力がすごい。純粋に面白い。それに加えてコミカルさもあり、バトル、コミカル、物語性がマッチしていて楽しい。誰もが持つ"少年心"をくすぐるヒーロー漫画。まだ1巻が出たばかりの作品だが、これだけ話題になるのも頷ける。ワクワク感が止まらない。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- シリアスな展開の中に入るギャグ、そのタイミングの絶妙さは鬼滅を思い起こしました。SPY × FAMILY もそうですが、きっとアニメ化するはずなので楽しみです。売り場を盛り上げてくれること期待しています。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

- 12月発売で2020年度新作売上第1位という、近年稀に見るこの勢い、作品の面白さは勿論ですが、最新話更新の度に盛り上がるSNSを見るだけで、マンガ売りとしては嬉しくなります。良い作品に触れれば、誰かと語り合いたくなるのが人の常。『鬼滅の刃』『呪術廻戦』と立て続いた社会現象は、マンガの持つ魅力がコロナ禍という非常時ですら失われない事を証明してくれました。この作品も大旋風を巻き起こす素質は充分。あとは世間に向けて後押しするだけです。

(株) 蔦屋書店 店舗企画本部 / 井出麻悠美

- 漫画を読んでワクワクする。連載の続きを楽しみに待つ。原点中の原点だが、久しぶりにその感情を思い出させてくれた。今どきの漫画として、展開が早く、構成も考えられている。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 挫折した主人公が這い上がるさま、努力、ひよんなイレギュラーからのパワーアップ、、、そして、ライバルや強敵、、、ここぞとばかり王道の要素をふんだんにつかっていますが、キャラクターも個性がたっていて、気持ちよく面白いと思える漫画です。

広告会社 ブランナー / 平沼良章

- 純粋に面白い！そしてキャッチー。まだまだこれから面白くなっていきそうな期待感。多くの人に面白いよ！と知らせたくなる作品です。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

- 少年漫画としてストレートな作品で、一巻を読み終わったあと思わず「おもしろい！」と声に出てしまいました。地球に出現する怪獣から街を守る防衛隊になりたい主人公が…という、ヒーロー物としては王道のストーリーですが、主人公が才能溢れる人、というわけではないところに親近感を感じます。年齢制限で防衛隊の試験を受けられないとか、防衛隊になれなかったけど近い職業の怪獣解体業就く…などの細かい設定も、かつて夢を追っていたことのある社会人にとっては身につまされつつもあるある～な感じ。笑 展開もスピーディで、シリアス・ギャグのバランスもよく、一冊一気に読み込んでしまいました。主人公が、カッコ悪いけどカッコいい。これからどんな風にカッコよくなるんだろう。一巻がこれだけわくわくするんだから、これからも絶対おもしろいでしょ！ヒーロー漫画はこうでなくちゃ！という作品に出会えて嬉しいです。続きが楽しみです。

公務員 / 宇田川結衣子

- 最初のページの一言目が「怪獣大国 日本」って、いきなり持っていかれましたw。そして、怪獣を討伐する仕事に、討伐された巨大怪獣を片付けて清掃する仕事。清掃員の日比野カフカ 32 歳は、ある日「怪獣 8 号」になっちゃった。それでも、討伐する側「防衛隊」を目指す。設定は割とベタなのに、展開が読めない。そしてキャラクターがどれも一癖も二癖もあって魅力的。ワクワクするマンガです。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 日常的に怪獣が街を破壊する世界。怪獣と戦えるパワーを得た主人公は、正体を隠して防衛隊に。枠だけ見るとウルトラマンなのに、ちょっと問題が。それは主人公が変身するのが、ウルトラマンではなく怪獣だということ。しかも年齢的にも能力的にも崖っぷちのオジサン。詰んでます。オジサンが頑張る怪獣漫画。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 怪獣退治の話と思いきや、主人公の立ち直りと成長の物語であったり、相棒とのパディものの要素もあったり、仲間たちとの群像劇であったり、怪獣とは…というミステリーであったり…。読み込み要素も強く、今後の展開が気になる。

医師 / 岸本倫太郎

- 王道ジャンプ漫画ついに始動。特撮好きもぜひ読んでいただきたい。画力もあって、怪獣の造形も良いし、何といってもシリアスとギャグのメリハリがいかにも少年漫画でテンポ良く読めます。

コミック担当 / 実松由夏

- まだ一巻なのにこの勢いと面白さ！正義や討伐、少年漫画によくあるストーリーなんだろうと思い読み始めてみるとキャラクターの性格ややり取りで吹き出してしまった。一気に愛着がわいた状態で読み進める戦いはより一層入り込める。次巻を楽しみにしている人が世界にどれだけいるだろう…期待です。

バイオリニスト / ケリー帆乃佳

- 怪獣、守りたい女子、少年漫画の面白いとこ詰めまくりなのに、主人公は中年（笑）でも全年齢がわくわくする漫画。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- テンポの良さとスピード感と、とにかくカッコいいです！前向きに頑張るカフカを見てると元気です。

主婦 / 紺野泉

- 歳のいってる主人公が未だ果たせぬ夢を追う姿に、グッと背中を押されるような熱量を感じます。まだ1巻。これからストーリーも戦いも、どんどん展開されていくと考えると、無尽蔵の期待感に浸ってしまいます。早く続きが読みたくてたまりません。

教師 / 持丸宏司

- 熱い！熱血ストーリー。まさか主人公が倒すべき怪獣になっちゃうところから始まる物語だなんて。でも進撃の巨人のような悲壮感のないお話に、次の展開が待ち遠しいのです。まだ始まったばかりのマンガだからこそ、今から読んで欲しい。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 2話から思ったのと全然違う展開になったのですがそれがグイグイ面白いです。思ったのと違うのに面白って素敵な作品ですよね。ところどころのギャグのちょうどいいテンション感も読みやすさを+してくれている気がします。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- ヒーロー×怪獣ものに、もう一点の要素を加えることで、ここまで引き付けられるとは驚きました。もったいないのは、広い層に「推す」のが少々早すぎることでしょうか。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 何もかもデタラメにぶっ飛んでるんだけど、細かい設定なんて気にならず、ひたすら面白いと思ってしまう勢いとパワーにやられました。

PENICILLIN / HAKUEI

- ジャンプ漫画らしい熱量で描かれた、とても良いヒーローというか特撮ものなのですが、30代男性を主人公としているからこそそのシリアスさが良いスパイスになっています。怪獣が当たり前に出てくる世界観は、例えるならままパシフィックリムなわけで、怪獣の描写も尖っており、人を選ぶジャンルかもしれませんが、テンポは良く登場人物も魅力的でとても面白いです。

会社員 / 三浦佑樹

- 絵よし！キャラよし！話よし！おまけに掴みも完璧！文句なしの王道少年誌マンガって感じですよ！読み続けて続きが気になること請け合いです。まだ1巻しか発売されていないのにこのポテンシャルの高さには驚くばかり。ヒーローもの、パディものが好きな人にも間違いなくおすすめ。

会社員 / 小野塚博之

- わくわくと楽しく、怪獣にもバトルものにも興味はない読者でも、あっという間に1巻が読み終わってしまいました。

大日本印刷 / 佐々木愛

- バトル怪獣マンガ。主人公がそもそもの怪獣側で正義として戦う。まだ1巻なので未知数なのですが、今後の展開次第では結構な人気のマンガになっていくのかなと期待を感じます。夢を持ったおっさんが主人公なのも良いですね。

デザイナー / 平沼寛史



# マンガ大賞2021 ノミネート作品

FEEL YOUNG/祥伝社

## 「女の園の星」和山やま

### 選考員コメント・1次選考

- どこにでもありそうな日常なのに、読めば読むほど中毒性が…。完全にハマってしまいました。誰かが死んだりする訳でもなく、凄くケンカが強い人がいるわけでもなく、片想いしたり、スポーツに打ち込んだりするストーリーでもありません。だからこそ、クスツとする動きや言動にニヤツとしてしまう僕は既に夢中さ、このマンガに。

(株)エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 星先生のクラスの女子になって「先生って変だけど面白いよね(笑)」と言いながら学級日誌書いたりしたかった。それに尽きます。和山先生の少しレトロとも言えるタッチと、独特のテンポ。何度読んでも同じところで笑ってしまう私はこの作品の虜です。

女優 / 齋藤明里

- 私も女子校出身なのでとても懐かしい雰囲気を感じました。そして、ジワジワと笑った。

カメラマン / 平沼久奈

- ここ最近1番の漫画！もうなんとも言えぬ空気感が大好き。ゆるいけれど、じわじわじわじわと笑いがこみ上げてくる。確かにこんな先生が学校にいたらずっと影から観察しちゃう

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 穏やかな空気感、くすりと笑わせてもらいました。

フリーランス / 金輪英恵

- くすっと笑えるところがいっぱい。出てくる登場人物がみんなくせがあって面白い。2020年一番これ読んでみて！っておすすめしたいコミックだと思いました。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 『夢中さ、君に』で度肝を抜かれたシュールなギャグセンスがさらにパワーアップ。星先生を始めとするちょっとづつおかしい(誉め言葉)登場人物が、どうにもおかしな話を展開する。特に同人漫画の回はヤバかった。久しぶりに周囲に人がいたのに大爆笑してしまった。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

- 和山先生の作品全般のコマ割りが大好きなんですけど、本作の何気ない女子校あるあるのギャグやボケの度に仕掛けられてくるコマ割りに声を出して笑ってました！

ロングランプランニング / 小森和博

- とても楽しみにしていた和山さんの初連載。期待を裏切らない、ゆるい笑いが本当に楽しかったです。主人公の星先生よりも、同僚の小林先生や中村先生、女子生徒たちのアクの強いこと……周りの人たちが濃いから、かえって地味で真面目な星先生が面白く見えます。ひとコマの笑いの威力が半端なく、次のページにどんなコマが待っているのかわくわくしながら読みました。早く二巻が読みたい！

主婦 / 堀江千秋

- お腹抱えて笑う、たまらない作品。先生に変なあだ名がついたり、女子校あるあるにも笑う。もう今や星先生やあの頃の先生側の年齢だから、こっちの事情やこっちからみた景色や、可笑しさもひっくり返るめて面白い！

フリーアナウンサー・本屋店主(希望的予定) / 松尾翠

- 才能の溢れっぷりがやばすぎ。何読んでもわらってしまう。省エネタイプのキャラクターが織りなす「日常のすきま」コメディって感じがめっちゃくちゃ絵柄にはまっている。誰に対してもおすすめできる、稀有な作品。

(株)リプロプラス 商品部 / 池本美和

- 「夢中さ、君に」もとてもよかったけど「女の園の星」はまた違った味わい。個人的は漫画家を目指す「松岡さん」のエピソードが良かった。まさかの星先生も漫画を描いていたという事実。そして松岡さんとの合作漫画の超展開。それが低めのテンションで続くとは。こういう笑いが好きなので、余計楽しい。それにしても私は女子高出身だけど、こんなおもしろ奇妙な先生はいなかったのうらやましい。私の学校では若い男の先生なだけでそこそこモテていたが、そんな生々しさはなくて、星先生はむしろからかわれているところもかわいくて良かった。

会社員 / 西尾美里

- どこまでいろいろな扉を持っているでしょうか！和山やまさんの初めての連載作品。何も考えずに和山ワールドへ誘われ楽しませてもらえる作品です。ずっと描いて欲しい。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 爆笑。とにかく爆笑。ネタとしても絵柄としても本来なら「妙な感じがクスッと笑える」というタイプの作品になるはずだったんじゃないか。それが、作者のぶっ飛んだ言語感覚（飛び抜けたセンス）のため爆笑するしかなくなる。すごい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 女子校ではありませんが女子クラ出身なので生徒の描写のリアルに感服しました。独特なあだ名の付け方とか、会話のテンポとか本当にこんな感じ…。真面目なのにどこか変な先生たちのキャラも良いです。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 女性誌ですが、男性読者もしっかりとつかんでいる。登場人物は、個性的すぎるし、シュールさはさすが和山先生。

コミック担当 / 実松由夏

- 「夢中さ、きみに。」を読んで和山先生の作品の中毒性の強さに溺れました。そして2冊目の単行本の発売を待ち望んでおりましたが、期待以上の作品でまたもその中 Toxicity にどっぷりと漬かりっております。女子高生の摩訶不思議な生態、そしてそれに翻弄される教師の星。そんな星自身も面白要素が詰まっており読んでいて笑わずにはいられませんでした。

元書店員 / 八重田幸子

- 最初からそのノリに取り込まれました。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- やはり今季一番の作品ではないでしょうか。シュールでゆるくて、読んでるほうも肩の力を抜いて一巻まるまる楽しめるような、凝り固まった今のご時世で肩の力を抜いて楽しめる一作。女子高とそこで勤務する教師の話ですが、いつの時代も女子高生は無邪気で残酷で全力で自由でムズカシイ、でもそれに翻弄されているようでブレない先生との日常はひたすらに楽しい。今季出ている1巻のラストも先生の知られざる一面が垣間見えて、2巻が待ち遠しいです！

公務員 / 宇田川結衣子

## 選考員コメント・2次選考

- はじめて読んだ時のクスクス感が心地よく、改めて読み返してみると今度はジワジワ感が心地よい。まるで嫌ではないレベルの絶妙な力加減で両脇をくすぐられる感じとでも言いましょうか。ハッキリと言って虜です。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- またやられました。昨年のマンガ大賞 2020 で初めて出会い、忘れられない一冊となった和山やま先生の「夢中さ、きみに。」に続き、今年もまたノミネートのおかげで未読のマンガに出会えたよビバビバ！とアホな顔して読んだこの衝撃作、また和山やま先生じゃん！（気付け）どこがどう繋がってくるかわからないお見事なお話と、淡々としているように見えて涙が出るほど笑える絵と会話が、もうずっとこれ読んでたいねん……という合法マンガドラッグになってますよね。記憶を消してループ再生したい。あと僕も笑点を録画して土曜に見ようと思いました。月曜日こわあい。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 女子高生達の絵日記しりとり、ある日虚ろな男性の絵が記されていた。毎日絵日記を楽しみにしていた教師はその真実に迫ることができるのか、、、?! ホラーではありません、笑。どこかレトロな作画と、マスクでも隠しきれない笑いを提供してくれるこの作品が大好きです！病みつきになる和山ワールドに是非いらしてください。

鍼灸師（漫画家専門・兼美容鍼灸師）/ 碓氷麻里子

- 何度読み返してもニヤニヤできる。本当に緩く面白い。星先生はもちろんのこと、女の子たちもいいキャラしててなんてたって可愛い。小林先生もいろんな意味でおいしい存在。永遠読み続けたいしどこからでも気軽に読める、1話完結の連載としては最高峰。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- とても好き。このゆるさの中にセンスの良さが詰め込まれているこんな学校に通いたかった。

バイオリニスト / ケリー帆乃佳

- くすっと笑えるところがいっぱい。出てくる登場人物がみなくせがあって面白い。ちょっとくせのある絵も読むといとおしくなりますから。2020年一番これ読んでみて！っておすすめしたコミック。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- ふつふつと面白い。漫画を描くくだりにジワジワとはまってしまい、周りの友達におすすめマンガとしてすすめてしまっています。

カメラマン / 平沼久奈

- 笑えました。誰にでもおすすめできるマンガでした。

マネージャー / 樋口健

- シュール面白いですジワジワ来るタイトルもなるほど

tetote 代表 / 力丸真

- 二次選考にあたり何度も読み返しましたが、やっぱり好きです。星先生をはじめ小林先生、生徒たちは現実にははずがないのに、なぜかどこかで会ったことがあるように錯覚してしまう親近感があります。みんな普通に見えるけれど、それぞれちょっとずつ変で面白い。たぶん現実でもそうで、誰にでも変なところのひとつやふたつあるのだろうと思います。普通の人なんてどこにもいない。みんな変で面白くて魅力的。そう思える漫画です。

主婦 / 堀江千秋

- 抑制されたテンションとばかばかしさの調和が秀逸。この空気感には得がたいものがある。

ライター / 福井健太

- インパクトがあって、しかも余韻がジワジワ後を引く。核となるアイデアのセンス、そして、それを成り立たせるために組まれた緻密な構成が、こういう効果を生むのだろう。独特の味わいとしか言いようがありません。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 個人としては前年の『夢中さ、きみに』(KADOKAWA)に続く2度目のマンガ大賞ノミネートとなるが、今回はまったく別の作品で、それも2作品でノミネートされているという点で、和山やまというマンガ家への支持の広がりが見て取れる。その2作、『女の園の星』(祥伝社)と『カラオケ行こ!』(KADOKAWA)からどちらをより強くマンガ大賞に推したいかと考えた時に、あり得ないけれどもあり得そうで、そしてあり得そうだけれどあり得ないようなボーダーを、巧みに拾い上げて描いてのけた『女の園の星』の方が、推して自分が嬉しい気持ちになれると考えた。女子校で教師をしている星が、生徒たちの描く日報に添えられた言葉からしりとりを類推するエピソードや、上の教室で教師が預けていった犬を飼っていたのが、ベランダを乗り越えて落ちて来てぶら下がるというエピソードを読んで、経験からあるあるとは言えないけれど、想像からあっても良いかとも思えてしまい、そしてあったら良いなと思ってしまう。女子生徒が事業中も描いていたマンガの制作相談に星がのるエピソードも、あるかもしれないけれど教師がマンガを教えるなんてことがあるのかという興味が浮かぶ。そのマンガがどうにもこなれていなくて、登場人物がすぐに死んでしまうシュールさにあふれているということへのおかしみが、笑いを誘って作品へと気持ちを向けさせる。星先生のことなら何でも知っていると言語する女子生徒が、観察の果てに得た星の誕生日だという情報を頼りに、風邪で出遅れながらも午後学校へと出向き、こともあろうの職員室へとクラッカーのバズーカを抱えていく下りなど、実際にあれば停学だって食らいそうな無茶を、女子生徒がやってしまうというシチュエーションのおかしさに引きずり込まれる。あるいは女子校ならではのハチャメチャさが、こうした状況を実際に起こさせているかもしれないという興味も浮かぶ。どうなんだろう。合唱部の少年がヤクザにカラオケ指導を頼まれる『カラオケ行こ!』も、日常と大きくは外れていないものの、どことなくおかしさを感じさせるシチュエーションを巧みに選んで描いている点で共通。どちらも遜色はないけれど、見たことのない女の園の見たら楽しい世界を描いてくれた『女の園の星』を挙げよう。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

- 電車の中で読むと吹き出しかける面白さです。犬に眉毛を書くところがツボ。ちょっと動物のお医者さんの雰囲気もあって良かったです。

公務員/東くるみ

- 笑いが心の底から込み上げてきました。「これは実際に私が通っていた学校にいた先生のお話です」と言われたら、信じてしまうくらい等身大の人物像が描かれています。和山先生ご自身は女子校出身ということではなく、この作品を描かれているそうですが、それとは感じない女子校のリアルさが面白みにさらなる深みを付け加えています。謎な行動をする女子高生に翻弄される星先生を見守りたいです。

元書店員/八重田幸子

- 今や和山やま先生人気は止まらない。どの作品も秀逸だが、個人的にこの『女の園の星』が最高に面白い。くだらなさ満載だけど愛おしい。あと笑いが止まらない。なんて漫画を思いつくのだろう。この才能ある漫画を是非つまんで欲しい。

三省堂書店海老名店・コミック担当/近西良昌

- 特に、松岡さんの漫画の話が好きです。ファンがつかました、のところが、私も嬉しく思いました。秘伝のペットOKの話も好きです。

書店員/桶谷佳代

- ギャグセンスの尖り具合がエグい! 奇才とはまさにこのような方のことを呼ぶのだな、とただただ圧倒させられました! 女子校特有の独特な空気感のようなものがセリフや間(ま)から伝わってきて、より一層笑いを誘ってきます。大人になってから久しぶりに声を出して笑える漫画に出会えた気がしました。

会社員/小野塚博之

- 最高のジワリ。たまらないやつ

フリーアナウンサー・本屋店主(希望的予定)/松尾翠

- 和山やま先生の作品は二作ノミネートされましたが、悩んだ結果こちらを推したいと思います。今季らしい作品であり、おもしろさが既に周知されているのは重々承知しているのですが、やっぱりおもしろいんです！！和山先生のいい意味で平熱の作風は、100%理論的に説明することができない不可思議な女子高生の生態と相性が良いですね。これまでに出ている作品は短編二冊きれいに完結していますが、こちらの作品は和山先生の初の長編作品として、一巻ラストの掴みはオッケーです。えっ、うそ！先生、そうだったの！？と読者もびっくり。二巻が気になる、気になりすぎる！タイトルも秀逸です。大好きな作品です。

公務員 / 宇田川結衣子

- どうしたって面白い。何度読んだって笑ってしまう。和山先生のセンスは唯一無二です。星先生の生徒になりたい。

女優 / 齋藤明里

- 女子校の教師の身辺雑記。公立の共学とはいえ高校に勤めてたからなんとなく雰囲気はわかる。もちろん、この倍以上の面倒くさいことが山積みなんだけど、自分で「学校の仕事って逆転ホームランがある仕事なんですよ」って言ってたものな。それだけ得難い経験ができる職場なんだと思う。あー、また学校図書館に戻りたくなってきた！

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- まずタイトルが秀逸！そして星先生と女子高生たちの日常のたわいもないやりとりと予想外の展開から生まれるグルーブ感がこの作品の最大の魅力！

ロングランプランニング / 小森和博

- 女子校育ちとしては、身に覚えがあるような（いや、実際にはこんな極端なことはないのだけれども）こんな雰囲気だったよな。と、妙に懐かしさを感じる作品。「女の園の星」とうタイトルは「逆紅一点」という感じで「女の園」の中の男性ということなのかな？と思って読んだら、女子校の中の星先生だったことへの衝撃！そして、作品の中の「女子高生が描いた漫画」の衝撃！！声に出して、星先生たちと一緒につつこんでしまいました。

アニメイト / 鈴木寛子

- 読中、ほのかな幸福感に包まれる。

レビュアー / 縣丈弘

- この先生、男子校にもほしかったです。

文筆業 / 海猫沢めろん

- 絵柄から真面目なマンガかと思って読んだらもう大爆笑でした。マンガ大賞の趣旨である人に薦めたいコミックだと思いました。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 読み終わった感想「負けた…。」悔しいけど面白かった。普段ギャグ漫画はあまり読まないし、好みも限定的なんですけど、あんなに笑いが抑えられなかったのは久しぶりです。でもなんでだろう、なんか悔しい！

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

- 初めて読んだときより、2回目の方が面白い！初めての人と会うときに、無意識に悪意があるかどうか、警戒してしまう。作品を読むときにも、なにかの先入観が、かならずある。中華まんを食べよう、としたときに、肉まんをたべるつもりだったのに、実際はあんまんだった時のショック。（伊藤理佐「はらはちぶう」より）そのショックから、何かを食べるときには何らかの警戒をしてしまうのだけれど。初め見たときの絵のクールさから、ひょっとしたら…！と警戒していた気持ちが、作者の他の作品、そして一回読んだことにより、警戒どころか、最大の安心感をもって読んでいいのだ、と分かってからの2回目以降。そこに込められた味わいの深さがより繊細に伝わってくる。そこがわかると、想像以上なんですよ、星先生、そして周りの冴えない教師たちに対する愛情。キャラクターたちのために、よくこれだけの出来事と、それぞれの表情、イメージできるなあ。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

# マンガ大賞2021 ノミネート作品

コミック Newtype/KADOKAWA

## 「メタモルフォーゼの縁側」鶴谷香央理

### 選考員コメント・1次選考

- 穏やかなストーリーで、ピュアなキャラクターが同好の士を得て喜んだりウキウキしたりする様に感動し、いつの間にか涙が出てくる。新刊が出るたびに幸せな気持ちになりました。ありがとうございました。

主婦 / 佐藤しのぶ

- キャラ同士の距離感が絶妙で、離れがたく結びつくがベタつかず。同時に作者と物語の距離感も絶妙で、地に足を付けた盛り上がりを作りつつも、やはりベタつかず。スッと風が吹き抜けていくような、見事な終わり方。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 全5巻完結。ラストの光あふれる縁側の1コマ、最高でした。あらためて1巻から読み返したけど、3巻くらいから涙が止まらない。人と人が出会って、新しい一歩を踏み出す力をもらう／与える。それは「老い先みじかい」と言われる年齢になっても、実は可能なのだということを、軽やかに示してくれる名作でした。市野井さんとうらら以外の人物も、いちいちみんな魅力的で、深い背景を感じさせる。群像劇としてもすばらしかった。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 祝・完結。「この漫画が大好き！この2人が大好き！！」という気持ちが、最後まで途切れないどころか、ずっとじわっじわっと上がり続けて、上がりゆくままで終わった。本当に素敵なところに物語が着地して、雪さんが飛び立った空をうららと一緒に眺めているような、晴れやかな気持ちですずっと満たされている。

ライター / 門倉紫麻

- ストーリーに直接絡まないような日常のワンシーンまでもがとても魅力的に描かれていて、それを追っていく自分の視点と共感が、うららさん（女子高生）よりも市野井さん（老婦人）の方に近いのもとても不思議な感覚でした。そのせいか、想像できたことがなかった自分の祖母（顔やファッションは市野井さんに似てる！）の日常に思いを馳せることもでき、そういった意味でも大切なマンガになりました。でも僕ら世代からはこういうジジババになるのかもしれないね。ちゃんとイベント参加できるように足腰鍛えていかないと！

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- BLにはまってしまったおばあさんとBLが好きな女子の友情譚。誰かが何かを好きになってしまう、はまってしまふこと（しかもBL！）の、微笑ましさとか、さもしさとか、恥ずかしさとか、それを誰かと共有することの嬉しさ、楽しさ、唯一無二さ、面倒臭さ、切なさとか、そういう、こそばゆくなるようなものどもを細やかに描き続けるマンガで大変よかった。そういうものは日当たりの良い縁側にある。

ソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

## 選考員コメント・2次選考

- 大好きなものへの向き合い方や、新しい事を始めるための一歩目を踏み出すことの難しさなど、誰しもが経験したことのある悩みや嬉しさが丁寧に描かれていました。雪さん・うらのキャラクター描写もとても丁寧で、多感な世代のうらの姿には「分かる～私にもこういう事あったわ～」となり、老年の雪さんの姿には「私もこんな歳の重ね方をしたいな～」と憧れました。どんな世代の方が読んでもピタッとハマる部分がある作品なのではないでしょうか。

会社員 / 畑中瀬路奈

- まったく申し訳ない。1次推薦するのをすっかり失念していました。ノミネートは今回が最後だというのに、ここで推さんでどうする！ もうクドクド述べる必要もありませんが、何も劇的なことは起こらないのに、これほど全てが劇的に感じられる作品はない。抑制の効いた終わり方も、うらら風と言えば「完べき」でした。さり気ないようで、あらゆるシーンが考え抜かれている。ため息が出ます。前も書いたような気がしますが、私はうららより、市野井さんの方にずっと年齢が近いのです。第3巻で<何歳かになったら「やってもいいよ」ってなる時が来るのかと思ってたけど>と、うららがお母さんに語る印象的なシーンがありますが、還暦すぎてつくづく思うのは、「もう、やってもいいよ」なんて、誰も言ってくれないってこと。「その時」は自分で決めるしかない。だから、<今やっても いいんだなーと>気づいたうららは、まったく正しい。75歳でも17歳でも同じ。そんな当たり前のことが身にしみるマンガです。元気なお年寄りを描く作品は、他にもたくさんありますが、いわゆる「老境マンガ」とも一線を画するのが本作の価値。年齢に関係ない「普遍」を描ききった傑作です。

読売新聞文化部 編集委員 / 石田汗太

- 女子高生とおばあさんは友達になれるし、それは女子高生とおばあさんに限らないし、どんな年齢でもステキな出会いがあれば成長できる。純粋な関係性は垣根を蹴破って広がるし、関係の純粹さは上へ押し上げる力になる。そこが、物語のカギとなった「BL」とも響き合うところなんじゃないかなと思いました。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 年の差関係なく共通の趣味で友達になれる間柄がとても微笑ましいし、羨ましいです。私が二人のちょうど中間くらいの年齢を迎え、若い頃の自分はどうだったか、老齢になって趣味があっても同好の士と盛り上げられるだろうか、などと考えてしまいました。この作品がきっと数十年後の自分の背中を押してくれるような気がします。とっても大切にしたい作品です。

Books アイ新田エキナカ店 / 野口忠義

- 感動しました。1次の段階では、この漫画、まだ読んでいなかったんです。ノミネート作品としてはじめて読んで……、すばらしかった。75歳のおばあさんと高校2年生の女子高生が、BLをつうじて結ぶ友情の物語。おばあさんの素直さ、無邪気さに触発されて、内気な少女が一歩踏み出す。おばあさんもつられてもう一歩踏み出す。ふたりともときどき。そういうマンガです。タイトルにあるようにメタモルフォーゼがテーマです。10代でも、70代でも変身できる。完結に立ち会えてうれしいです。ありがとう鶴谷香央理先生。ありがとうコメダ優先生！

教員 / 戸田穠

- ひょうひょうとした75歳の市野井さんと関わることで高校生のうららさんがすこしずつ変わっていくことが温かい。そして、75歳の方が新しく踏み出した世界が、私たちの日常で、普段何気なく過ごしていることが市野井さんの視線サイドで描かれると大変貴重で大切にしようと思えます。

アニメイト / 鈴木寛子

- 「こんなことがあったらいいのに」と思える世界を描くのがマンガの役割の1つだと思うが、本作ではそれ（「違う場所で生きている人同士が仲良くなれたらいいのに」）を夢物語ではなく説得力を持って描きだし、「現実世界もそれに近づいていくのではないかな…？」という希望を感じさせてくれる。今、必要な作品だと思う。

ライター / 門倉紫麻

- 最後まで楽しめました。趣味と日常。生きている場所は違ってもお互いに繋がるものがあるのは良いですね。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- あちこち迷い道に入り込んでいたうらちゃんが、自分の「好き」を大切にできるようになって本当に安心しました。年を取っても、雪さんのように軽やかに、自由な心を持ったまま生きられたらいいと思います。正直、このふたりのやさしい時間をもっと見せてもらえるものだと思っていたので突然の終わりがとても寂しかったのですが、この物語らしいとても良い終わり方でした。「終わり方」というか、ふたりの物語は続いていくんだと思わせる「終わり」ではない閉じ方だったので、読み終わった後もとても幸せな気持ちになりました。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- これも1位と迷いました。傑作。人と人が出会って、新しいきっかけを得て、それぞれに進んでいく。出会って、付き合っ、結婚する、のではなく、世代の離れた同性ならではの距離感。出会って、お互いを大事に思ってるけど、さらっと距離がおける。しみじみ、いいなあと思った。ラスト1コマの、光あふれる縁側が忘れられない。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 高齢女性と少女の不思議な交流を描くマンガ。ふたりとも優しい。でも、優しいからこそ、意図せずに振り回しちゃったりする。思いやるからこそ一歩踏み出せなかったりする。最後の場面がタイトル通りで、ここまでキレイに描かれるとひねくれ者の私でさえも清々しさを感じざるを得ない。忘れがたい作品です。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- 歳の差を超えた優しい関係に自然と涙が出てくる。この作品を読めて良かったと心から思える漫画です。

主婦 / 佐藤しのぶ

- 女子高生と75歳の女性がBLを通じて心通わせ、新しい世界を切り開いていく物語。好きなものを通じて人とつながるワクワク感や楽しさが穏やかに描かれています。人との出会いを尊重して、踏み込みすぎない二人の作る距離感と雰囲気がとても素敵で、人付き合いっていいなあとしみじみと感ずることができました。人付き合いのいい面が描かれてるマンガだと思います。

システムエンジニア / 廣瀬公将

- 人との交流が上手ではない主人公の気持ちもリアルに描かれており、読んでいくうちに切なくもなりますが、不器用な主人公が、同じ趣味をもつ人との出会いをきっかけに、少しずつお互いの距離が近くなっていく姿が、朗らかで温かい気持ちを読み手に作ってくれます。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- 小さなちいさな小さなちいさな物語。 人に見せない、見せたくないものの中にしか真実はない。「投稿」というボタンをクリックしてしか世に放たれないSNSに真実はない。 58歳の年の差がある女子高生とおばあさんの間をつなぐ、誰かに好かれるためでもなんでもなく、自分のためだけのものが、人とつながった、共有出来たときのよこびはいかばかりのものか。世の中に大きく広がる必要はない。自分以外のたった一つの存在だけでも分かってくれること、これ以外に人生に何が必要なのだろう。一見簡単に訪れそうなこの出来事は、人への尊敬がないと起きないのだ。登場人物すべてへの尊敬が、作品の隅から隅までみちあふれた、綺麗な綺麗なきれいな作品。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 数々の賞を獲得してきただけのことはある実力作品。個人的に新鮮味に欠けると思うことがマイナス評価。堂々たる安定ぶりで読んで間違いなし。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- お母さんのスタンスが好きです。唯一無二の出会いと、小さい粒がきらきら光って積もっていくような日々。そわそわと、わくわくと、いくつからでもいくつになってもはじめるはじまる新しい世界。限りあるひとときでも、まだまだ、長く長く、紡いでいってほしいと思いました。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子



- 主人公達が作品愛から、ついに同人誌を作った！イベントが制限されている昨今、同人誌即売会のシーンは羨ましいような気持ちにもなりました。

公務員 / 東くるみ

- オタク少女と老婦人という、かけ離れたふたりの主人公たちの年齢や来し方を実際に経験していないと書けないんじゃないか？という心の動きがあまりにもすばらしく、実際にこの作家さんは市野井さんのような老婦人なんじゃないかと、ちょっとだけ疑いました。終盤のサイン会のシーンは、そのページをパッと開くだけでも鼻の奥がツンとなります。そしてそのセリフを先生にそのまま贈りたいです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- おばあちゃんが出会ったのは、BL！絵本を読んでいるかのような絵柄に、なんともほほえましいおばあちゃんと女子高生とのやりとりに、なんだかほっこりしてしまいます。

コミック担当 / 実松由夏

- これはおとぎ話かもしれませんが、こうした話があっていいと思うし、現実にもあってほしい素敵な物語だと思います。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

- 世代を越えた2人の優しい繋がりが温かく、関わり合って生きることを改めて考えさせられる。

自営業 / 小野裕子

- 同じ漫画を読んでも、同じ時間を過ごしていても生きてきた時間の長さが違う2人。そのどうしようもない決定的な事実がひどく寂しくもあり、でもだからこそ同じものを尊く思うその時間が愛おしくもあるのだなとそんなことを思いました。個人的に幼い頃近所の教室で習字を習っていたので、あの頃の墨の匂いと先生の顔を思い出して特別感傷的な気持ちにさせられました。

フリーランス / 金輪英恵

- 最後はなんだかしみりしてしまいました。早く同人誌即売会が平常通り開催できますように。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 年齢差があっても友情は友情だなあ、と思わせられる。BLを題材に取ったところは面白いけど、それだけでなく、人と人の関わり合いを本質的に描いているのが良い。

漫画読み / サイトウマサトク

# マンガ大賞2021 ノミネート作品

週刊ヤングジャンプ / 集英社

## 「九龍ジェネリックロマンス」眉月じゅん

### 選考員コメント・1次選考

- とても巧みな表現で物語の深みが出ています。一コマ、一コマ、見落としてはいけないくらいに物語に関わってくる表現がされており、何度もページを戻って確認しています。いま一番続きが楽しみで、先が予測できない物語です。

元書店員 / 八重田幸子

- 「九龍」で見るとつい手にとってしまいますね。まずタイトルが非常に良い！結構そこから読んだ方も多いのではないかなと思います。九龍で暮らす男女の恋愛ストーリーだと思って結構読み進めてましたが、突如のSF的な展開で更に楽しみが尽きません。

デザイナー / 平沼寛史

- このコメントを書いている今ようやくタイトルの意味に気がきました…。ジェネリックでロマンスなんですね…切ない…。九龍城砦というモチーフに惹かれた事のある人間ならハマらない訳がないと思います。

フリーランス / 金輪英恵

- 「恋は雨上がりのように」であった店長とアルバイトJKという、いいんだけどちょっとその恋愛には入れないなあという引いてしまった部分を同年齢設定ですっきりさせ、かつSF世界を多分に盛りこんだ、謎の多い物語。1巻のラストはかつて『ブレードランナー』でレイチェルが自身がレプリカントの存在を知った時と同じようにぞっとしたのに似ている。が、個人的な意見だと恋愛比重をもっと高くしてもらいたい気もする。いや、違うか。どうだろう(笑)。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

- ちょっとこれは胸打ちぬかれた気分。切なくて情緒的で、それでもって何？展開！サスペンス。映像化・アニメ化希望！九龍の持つ妖しさも、世界観も、キャラクターも、すべてが魅力的。「懐かしさって記憶や経験だけじゃないのよ」あたりの台詞展開には超絶しびれる……。

フリーアナウンサー・本屋店主(希望的予定) / 松尾翠

- 自分が知らない自分の物語。自分ではどうすることもできない、しかし間違いなく自分の物語。とても魅力的に描かれ、惹かれざるを得ないその街で繰り広げられるエキゾチックな恋物語。シリアスな展開やコミカルな場面のバランスも絶妙であり、新しさと懐かしさ、不思議さと爽やかさが同時に感じられるような、魅力に包まれた作品。

C smart ららぽーと EXPOCITY 元書店員 / 杉佳尚

- 過去と近未来の間にうまく漂っている物語全般にあるノスタルジーはとても心地よく散りばめられた謎は物語に深みを与えてくれている。話の終着点がかなり気になる作品

あゆみ BOOKS 杉並店 店長 / 土屋修一

## 選考員コメント・2次選考

- 最初は九龍に住む一人の女性が徐々に自身の恋心に気づき、その思いが膨らんで・・・というラブコメだと思って読んでいたんですが、途中であれっ？となり、次第に何やら謎が深まっていき……。見事に騙されました。ストーリーだけでなく、ヒロイン鯨井のミステリアスな美しさや九龍という地名、町の印象が相俟って作り出す雰囲気も素晴らしいと思います。続きがとても気になる作品です。

会社員 / 林礼春

- 九龍というと、何を思い浮かべるか、人によって違うと思うが、レトロゲームが大好きな私からするとやはり「クーロンズ・ゲート - 九龍風水傳 -」のイメージしかない。めっちゃ怪しい電脳とゆがみに満ちた世界……。調べてみると、作者の眉月先生もこのゲームに影響を受けたらしい!? それもあって、もともと怪しいイメージだった「九龍」像を、更に UPDATE してくる作品に、また出会ってしまった。それが本作。最初は普通の、ちょっと不思議な世界で起こる恋愛物語…? と読み進めると恋愛物語なのですが、この九龍という不思議な街の不思議な要素や謎めき要素がどんどん出てきて心を離さない展開になってくる。鯨井と工藤の絶妙なすれ違いに心揺さぶられる。自分とウリ二つの人物が恋敵…という展開。実際にこのような状況になったらどんな気分になるだろう? 絶対に勝てる気もするけど、絶対に負ける気もするだろう。鯨井 A と鯨井 B、その 2 人の存在の意味は…? 工藤はぶっきらぼうで優しくて気まぐれなタイプ。最近はあまり見かけないタイプの男性像だけど、とてもいい。ぶっきらぼうだけど、昔の恋人の写真をデスクに入れていたりとか、いきなり「嫌いだ」と言ってきたりとかこの人に恋したら振り回されつつ結局はまっていくだろうな…と思わせる言葉にできない魅力があるのだ。そしてそして何よりも謎要素が深まってきたので、気になる。早く早く続きが読みたい! 蛇足: やはり私にとって「九論」は魅惑の都市であり続けることが決まったし、クーロンズゲートもリメイクしてほしい。

会社員 / 西尾美里

- 頭の中から、この世界がはなれない! たぶん、ずっとこの世界が好きだ!!

フリーアナウンサー・本屋店主(希望的予定) / 松尾翠

- SF? ミステリ? ラブロマンス? 話の進め方、世界観の描写が上手な作品。タイトルの意味も分かってきて、先が気になる。

主婦 / 赤坂真実

- 巻が進むにつれて謎の深まっていくのが良いです。鯨井がタイトルから想像するコピー的なものなのか、本人が記憶を失っているだけなのか、まだまだわからないことが多いので今後の展開は楽しみ。鯨井の過去を知っている周りの面々の発言や行動があまり良い意味を持っていなさそうなので、ストーリーの薄暗い部分にも期待です。

デザイナー / 平沼寛史

- 1 巻を読み終えた時に声が出てしまいました。行ったことが無いはずの「九龍」へのなつかしさと漂う空気感、そしてドキドキしてしまうストーリーの展開。ページをめくる手が止まりません。

女優 / 齋藤明里

- 「1 巻のラストまでは絶対に読んでください。そこから沼です。」という POP を作ろうと思いました。2 巻を読みながら 1 巻を何度も読み返してウワーってなりました。世界観が素敵。まだまだ謎がてんこ盛りなので続きを楽しみにしています。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 強烈なノスタルジーの中に見え隠れする謎。何処までが真実で何処までが嘘なのか? 九龍を舞台に繰り上げられる謎が謎を呼ぶ物語。読み始めたら最後、引き込まれること間違いのない作品

あゆみ BOOKS 杉並店 店長 / 土屋修一

- 舞台となる街の造形はもちろん、全体を流れる雰囲気が多量に素敵すぎます。何度も何度も読み返してしまう作品です。

図書館員 / 金田健太郎

- アジアの街角を歩いたときの、懐かしくて胸がうずくようなあの感覚を、丸ごと漫画にしたような作品。無神経な男と日々喧嘩しながらも彼に恋する美女。そんな定番のもどかしい男女関係に謎めいた設定が絡んで、これからどんな世界に連れていってくれるのか楽しみになる作品です。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 働く30代男女の非日常。最高のディストピアロマンス。「廃墟好き」「アジアの路地裏好き」「社会人恋愛もの好き」「切ないラブロマンス好き」など、いろんな人の好きにささる。二人の行く末は少し心配ですが、その展開を楽しみたい作品です。

会社員 / 伊藤千恵

- 中華風ノスタルジックな味付けのほんわかエモい恋愛ものかと思いきや、急転直下のミステリ仕立てに。進むごとにポンポンと置かれていく伏線、何気ないひとことひと仕草が後から効いてくる驚き、それと並行して描かれていく主人公たちの心模様の、じわじわと締め付けるような切なさ。とにかく先が気になるお話です。コミックス1巻のラスト1話で全てがひっくり返る。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

- 正直初めは表紙の雰囲気ジャケ買いした作品でしたが大正解でした。夏、眼鏡、九龍城砦、とくればオタクは必ず手を伸ばしたくなるものです。ただこの「ジェネリックロマンス」というタイトルの秀逸さは読んで見ないとわかりませんね。私は今このタイトルの意味を噛み締めながら本編を読んでいます。「俺はこのなつかしいって感情は恋と同じだと思っている。」という名言。でもその懐かしさを通して誰を見ているのか、という切なさ……。鯨井さんの気持ちに同情してしまうとやってられませんよね。やってられませんけどこの先どうなるのかがとにかくわからない。特に3巻以降SFチックな要素も見え隠れしてきてますます先が読めないのこれからどんな展開になるのか気になります。それぞれが選ぶ選択を見守りたい作品です。

フリーランス / 金輪英恵

- SFで別世界なんだけどどこか懐かしい。登場人物が九龍に抱く感情と、読者である私たちの感情がすごく近い気がする。ミステリーの、謎解きの要素がトリックではなく登場人物の感情の揺らぎによって読み手に伝わってくるのも眉月先生のテクニクだと思う。部屋の外の明るさと、室内の薄暗い感じや湿気った空気が伝わってくる。夢の中に現れる、現実のような現実とちょっと違うような違和感が物語の核心に迫りつつあって、続きを知りたいような知りたくないような、心がザワザワする作品。

会社員 / 内野智未

- 目映いばかりの九龍の街並み描写。複雑に揺れ動き絡み合う登場人物たちのところ。それらがページをめくるたびに琴線に触れ、謎めいた物語の先が気になって仕方がない。明らかになっていない事はまだ沢山あるのだろう。自分が確実に汲めているのは主人公である令子の想いだけだ。謎めいた美しい情景が道中続く、行き先のわからないミステリーツアーに誘われるような不思議な感覚。それが非常に心地良い作品。

C smart ららぽーと EXPOCITY 元書店員 / 杉佳尚

- はじめはノスタルジックなテイストのマンガと思いきや、SFサスペンスの匂いが濃くなっていくのがいい。素敵女子のチャイナ姿が見られるのだけでもいいです。

漫画読み / サイトウマサトク

- どんどん謎が広がってきて、主人公と一緒に取り残されている気分。香港に行きたくなる。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 今まですごく魅力的な女の子と、トキメキを描くのがとても得意だなという印象でしたが、今回の作品はそれに更にサスペンス？謎が加わり面白い！どんな謎が隠されているんだろうか、続きが楽しみです。

バイオリニスト / ケリー帆乃佳

- ユーモアたっぷりのラブストーリーでありながら、徐々に顔を覗かせる謎と伏線……その両軸を、小気味よいテンポで描いてくれており、先の展開が気になって仕方がない作品。色や質感、匂いまで感じられるような九龍城岩には「行きたい」と思わせられ、そこで生きる登場人物たちの表情、仕草、言葉には「会いたい」と思わせる。そのどれもが魅力的で、懐かしさと近未来が溶け合う世界に引き込まれていきます。眉月先生のセンスが光りまくっていて、マンガができる、マンガだからできる演出の可能性というか、パワーみたいなものを沢山のページから感じますね。繰り返しになっちゃうんですが、本当に色とか匂いとか、その空気が伝わってくるんですよ……！この感覚は、ぜひ味わってほしいですね。あと、出てくるご飯がどれもめちゃくちゃ美味しそうなのも最高。水餃子とレモンチキン、めちゃくちゃ食べくなる。

会社員 / 伊東敬祐

- 「恋は雨上がりのように」であった店長とアルバイトJKという、いいんだけどちょっとその恋愛には入れないなあと引いてしまった部分を同年齢設定ですっきりさせ、かつSF世界を多分に盛りこんだ、今後さらに期待が高まる物語。好きな人間がアンドロイドになって戻ってきたとしたら、そしてアンドロイドがまた元彼を好きになったとしたら。。『イヴの時間』のようなSF恋愛世界観が好きな方にもお薦め。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

- 中国の古びた繁華街、高層コンクリートに囲まれた魔窟“九龍城”で暮らす大人たちの日常ロマンス、そしてちょっとミステリー感もあり。周囲から隔離された不思議な街で、懐かしさに恋するようなお話です。

デザイナー / 佐藤優

- 鮮烈。おそらく描かれているのは若い男女の恋愛模様ではあるのだろうけど。それをとりまく世界と事情が、そこはかたなく奇妙で心地いい。その描き方がねえ、涼やかで、洗練されててねえ、痺れるのよ。ヒロインがちょっと一筋縄でいかない人物だぞと知らしめるために、タバコを吸いながらスイカを喰う女だって描写するのズルすぎない？今現在もっとも実存的な漫画批評であるところのニジマンガ編集会議の緑仙の紹介が素敵すぎるのでみんなも見よう。<https://youtu.be/6VA9sKTOSTM?t=3626>

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 九龍城を舞台にしたラブロマンスなのかと思いきや、ミステリーのようにも、SFのようにもあり、全貌がつかめていません。ふとした瞬間に何かがフラッシュバックして、ラブロマンスがミステリーになったり、その逆が起こったり。遺伝子に刻まれた遠い記憶なのか、実際に起こっていることなのか？過去なのか、未来なのか？色んな謎が編み込まれているのですが、ロマンスはとてもしらきら。九龍城ジェネリックロマンスってとてもピットリなタイトルだと思います。今回のノミネート作品の中では一番続きが気になる漫画でした。

システムエンジニア / 廣瀬公将

# マンガ大賞2021 ノミネート作品

少年ジャンプ+/集英社

## 「SPY × FAMILY」遠藤達哉

### 選考員コメント・1次選考

- もう人気ではあるけれど、やはり勢いのある面白い漫画といたらこれ！ボンドもアーニャも可愛くて可愛くて…フェイクファミリーだろうが、とても微笑ましいファミリー。

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- スパイ、暗殺者、超能力者という個性豊かなキャラクターが多いにも関わらず、それぞれが物語に馴染んで生き生きとしている。架空の話で現代よりも昔の設定だが新鮮さを感じるの、マンガの魅せ方が抜群にうまいからだ。たくさんの魅力が溢れるマンガ界のなかでも、飛び切りに魅力の高いマンガ。それがSPY × FAMILY。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

- スパイ(父)と、暗殺者(母)と、心を読める超能力者(娘)の擬似家族が織りなす、ちょっとコミカルでハートフルなお話し。とにかく色々な関係の人たちがしっちゃかめっちゃかに絡み合ってくるもので、1話あたりの人間関係の情報量が多すぎなんですけど、そこがまた面白い!!!

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- スパイの夫、殺し屋の妻、超能力者の養子(女の子)という、突飛な設定がストーリーに落とし込まれて調和しているのがお見事。事情ありの“偽り”の家族ですが、作品の出来と家族の温かさは本物かと。もう勤めなくても既に売っていますが、圧倒的に面白いので……。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 去年に引き続きおもしろいです。ヨルさんのファッションもかわいくて楽しみの一つです。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- それぞれに隠し事のあるキャラたちが、上手にかみ合いながらエピソードが展開していく構成が見事。やはりグッドエンターテイメント。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 設定とキャラクターが秀逸で、読んでいる時間が楽しくて、6巻以降物語の展開と結末が気になる。いつかマシュー・ヴォーンが映画化してくることを願っています！

ロングランプランニング / 小森和博

- 話も設定も楽しく、漫画のテンポもギャグも面白い作品。絵も上手でそれぞれのキャラクターが立っている。新刊が楽しみ。

自営業 / 川崎綾子

- 奇抜な設定の中の、キャラ立ち面々による「普通の家族」感が、最高。疾走感とギャグセンス終わってほしくない、この3人家族の世界。小学生から大人まで、幅広くお勧めした作品！

フリーアナウンサー・本屋店主(希望的予定) / 松尾翠

- ギャングやマフィアも血の繋がりはない集団だけどファミリーって言うし、そういう意味では紛れもなく家族(ファミリー)のお話なのです。任務達成と家族の平和のために、ちち頑張れ。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 相変わらずの美しい作画と美しく作画するに値するキャラ造形の素晴らしさ。主人公他誌に対して新キャラの造形もバッチリ。作者のセンスのよさに感服。そしてストーリーも文句無く楽しい！

菓子研究家 / 福田里香

## 選考員コメント・2次選考

- お互いに正体を隠した偽家族。それによって生じるズレが楽しいんだけど、そのズレを修正したりさらにズラしたりと大活躍のアーニャが、可愛くて面白い。凄腕のスパイでも困難なミッション、それが「幸せな家庭」を築くこと！

八重洲ブックセンター宇都宮バセオ店 / 山本さとみ

- 登場人物が振り切れた思考で、読んでいて面白く、スピード感もありました。

公務員 / 東くるみ

- 夫は凄腕スパイ。奥様は辣腕の殺し屋。娘も実は…なんとも言えない奇跡の組み合わせとなった偽装家族の物語。娘のアーニャがとっても可愛い！妻のヨルさんはもっと愛らしい！一辺倒なコメディじゃ無いので今後の展開も楽しみです！

会社員 / 伊藤千恵

- コメディ、アクション、学園。様々な要素が登場人物それぞれの持つストーリーに沿って、見事なバランスで物語を紡いでいく様は圧巻。兎に角物語が破綻せず魅力的に進んでいくのだ。笑いあり涙あり、という表現が個人的には素晴らしくじっくりくる作品。読者を飽きさせない緩急を持ったジェットコースターのようなこの作品に、自分も目を見開いてしっかりしがみついていると思う。

C smart ららぽーと EXPOCITY 元書店員 / 杉佳尚

- 衝撃の連載第1話を読み終えた時から好きでした！友人に薦める時も、自分のテンション高めがバイアスにならないように敢えてテンションは低めに伝えています。ここでいかに好きかを書き連ねても良いのですが、百聞は一見にしかずです！読み出したら止まらない！はず。

ロングランプランニング / 小森和博

- 主人公は凄腕スパイで、娘は超能力者、妻は暗殺者……という破天荒な設定。”いかにも”なコメディだろうという予想はすぐに裏切られる。ストーリーが進むたびに、素っ頓狂なキャラクターが次々に登場するのに、描かれる世界は一向に破綻する気配がない。それどころか、チャーミングさを増していく一方の主人公一家がかわいくて仕方ない。偽物だったはずの家族がどんどん愛情深いファミリーになっていく様子も圧巻。このままずっと続いて欲しいと勝手なことを願わざるを得ない一冊。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- スパイ×暗殺者×超能力者の疑似的ファミリーを描いた、時にハートフルで、とにかく可笑的、作品です！心が読める能力のあるアーニャ(娘が)、勘違い奮闘するところなんか可愛いけど可笑しくて、思わず読んで笑っちゃう。電車の中でマスクしているからいいけど、ブフって何度吹き出したことか。今一番のオススメ作品！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- スパイである父を筆頭に、母、娘、それぞれ自分以外には秘密を隠し持っている3人から成る仮面ファミリーがそれぞれの立場によって日常に降り注ぐ“事件”を解決しながら家族になっていく(であろう)物語。「職業＝スパイ」である父を筆頭に母も娘も特殊能力の持ち主なので、随所にギャグテイストが盛り込まれているが、家族間に育つ愛情をキーにした読後感は温かい。軽快な読み味、脇を固める濃厚なキャラの充実、練り込まれた設定——。対象巻数6巻と、いまがまさに読み頃。今年2021の大賞にふさわしい作品だと思います

ライター／編集者(馬場企画) / 松浦達也

- 登場人物全員、キャラが立っていて、それだけでも面白いですが、1話完結が基本ペースになっていて読みやすく、どんどん読み進めてしまう。きっとアニメ化するはずなので楽しみです。売り場を盛り上げてくれること期待しています。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

- どの世代にもどんなタイプにもおすすめできる安定のオススメ作品。ジャパニーズポップカルチャー作品！

フリーアナウンサー・本屋店主(希望的予定) / 松尾翠

- スパイものでありながらホームドラマ。その掛け合わせが楽しい。現在のところノリノリに波に乗っているマンガだと思う。見せ場は多く、決め台詞も豊か。演出はよく練り込まれ、荒唐無稽とリアルの間を行き来して飽きさせない。既刊6巻。読みどき。いささか調子に乗っている感もなきにしもあらずだが、それがプラスに作用してとても面白い展開をたどっている。スパイものというシリアスに寄せたアクション作品の設定をまといつつも、その実、世界観は意外に（ときには羽目を外しすぎと思うくらいに）コメディ、という作法。それでいて端正というか、作品の語り口全般に品の良さが漂っていてそこが好ましい。品の良さとはマンガづくりの姿勢が真面目ということ。その真面目さは例えば世の中が平和であることの大切さに関する言及とか、作中で弱者とされるものに対するやさしい視線とか、そういうさりげない部分、物語の本筋とは一見関係なさそうな領域で見え隠れする。その存在があるから安心して読み進め、大いに笑うことができ、個性豊かなキャラクターの関わりやその心情の描写にほっと温かいものを感じることができる。そういう作品としての足場がしっかり固まった5巻くらいから俄然おもしろくなってきた。主人公の諜報員〈黄昏〉の同僚で、鉄仮面の無表情な美貌のうちに乙女の恋情を隠した女スパイ〈夜帷〉（とぼり）が出てきてからのラブコメ展開が最高。「よつぱと」のよつぱ以来のオールひらがなでしゃべる奔放な娘アーニャがかわいい。イラスト的でセンスのいい絵柄にも磨きがかかっている。

会社員 / 天野賢一

- 設定がすごく好き、そしてどう転んでもこのハッピーになる感じがとても良い。歳をとると確定したハッピーエンドがたまらなく好きになるのですよ。まだ物語も半ばだけど、きっとハッピーエンドが確定してると信じてる

鳥取の美術の先生 / 佐川由加理

- どこか少し抜けているキャラクター達が可愛らしく、ストーリーもギャグからシリアスまで心地よく散りばめられており、とても読みやすいです。少しずつ本当の家族ようになっていく彼らをずっと応援したくなります。

建材メーカー勤務 / 竹本慧

- とても読みやすい漫画です。絵もかっこよく、話のテンポやギャグも面白く早く続きが読みたくなります。キャラクターも皆立っていて魅力的です。きっとアニメ化も時間の問題かと思います。楽しみにしています。

自営業 / 川崎綾子

- シチュエーションコメディの王道に正面から挑み、人物造型とプロットの巧さで読者を離さないヒット作。

ライター / 福井健太

- 全員が正体を隠した疑似家族、という設定だけでも面白い予感しかしながら、派手なアクションや駆け引きなどのスパイものらしい要素が詰め込まれて、アーニャじゃないけどワクワクします。最近は少年漫画でも容赦なくヘビーな作品が多くなっていますが、こういう全年齢向けでしっかり面白い作品が出てくるのはさすがジャンプ。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 個性的なキャラクターと世界観、豊かな表現、魅力的な画風、どれをとっても素晴らしいの一言に尽きます。幼い頃にマンガが教えてくれたあのワクワク感を、大人になっても感じられる、飛びっ切りに素敵な作品です。アーニャがかわいいんです。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

- とにかく作画が気持ちいい。お話も毎回楽しい。は??? 絵がうまいって、マンガがうまいって、ひたすら眼福ですね。今後もっと話が進んきたときに、殺し屋設定がどの程度のリアリティを持って描かれるのか?、リアリティラインが難しいよね、とちょっとドキドキしています。

菓子研究家 / 福田里香

- あらためて読むと、ストーリーの構成要素が多い近年の傾向の代表格と言って良いかもしれない。多彩な設定を組み込みつつ、見事に視点をコントロールして、スマートに読ませてくれる。まさに一級品のグッドエンターテイメント!

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦



## マンガ大賞 1次選考作品

### 全作品名・選考員コメント掲載

#### 「青に、ふれる。」鈴木望

- コプレックスをひた隠しに隠して明るく過ごす女子高生と、相貌失認を周囲には必死に隠している高校教師の物語。よくある“先生と生徒モノ”だと思いながら読み始めたら、あっという間に引き込まれ、目が離せなくなった。主人公の少女の不登校のきっかけになった少年が、不器用でいじらしくて、でも、ときどき無神経なひと言をもらすところがまたいい。脇をかためてるキャラクターたちのクセがあるところ、そのチャーミングさもこの作品の魅力だと思う。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

#### 「青の島とねこ一匹」小林俊彦

- 瀬戸内の島での猫と女の子の日常。時間がゆっくり流れてて心地いい。

医師 / 岸本倫太郎

#### 「青の花 器の森」小玉ユキ

- 主人公の絵付け師・青子も、青子の職場にやってきた作陶師の龍生も、それぞれ最初はかたくなすぎるくらいかたくなだったのに、ゆっくり心を開いていく。それが器ができる過程とシンクロして、やさしく美しい。青子が心をとぎしたきっかけになった、元・恋人の真逆の朗らかさと無神経さ、憎めなさがたまらなくて、より一層、青子たちがいとおしくなる。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

#### 「青野くんに触りたいから死にたい」椎名うみ

- ははーん、こりゃあ奇をてらったラブコメだな？と思っていたが全く違った。初めはゲラゲラ笑いながらほっこり読んでいたのに、段々と息がつまり胸が苦しくなっていく。この世界の違和感が少しずつ忍び寄り、心を蝕んでいく。恐ろしくて堪らないのに物語に惹き込まれる。突然訪れるユーモアで緩急をつけられ、まともやゲラゲラ笑ってしまう。もう感情の落とし所がわからない。好きなのに怖い。怖いけど好きだ。好きだ〜。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

- 女子高生と幽霊となった彼氏青野君の切ない愛しいラブストーリーです。これからどんどん伏線が回収されていく展開で、知りたいけど知りたくない！何故なら読むとあまりに切ないから、、、それでも2人を応援したくなる、とにかく愛しい作品です！一度読み始めたらギュッと心を掴まれる、ひと時、周りの音が聞こえなくなるような名シーンの数々を是非見てください。

鍼灸師（漫画家専門・兼美容鍼灸師） / 碓氷麻里子

- まるで「りぼん」を読んでいるかのようなピュアな恋に涙し、ホラーシーンでは次のページをめくるのが本当に恐くて震えてしまう。一作でこんなに色んな感情を揺さぶられる作品は初めてです。盲目的に恋する少女だった優里が、試練を経て人間的に大きく成長していく姿も感動的。男女問わずおすすめしたいマンガです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

#### 「赤狩り THE RED RAT IN HOLLYWOOD」山本おさむ

- 共産主義者排斥、レッドパージ(という名の体制による弾圧)が吹き荒れた戦後のアメリカ映画界。そこに登場し、一ミリの遊びもなく不当な弾圧に立ち向かった映画脚本家、ドルトン・トランポを中心とした群像劇。あるものは信念に殉じたが故に破綻し、あるものはその行動に寄って報われ、逆にすべてに迎合した行動によって生き延びるものもいれば、それが仇となって転落するものもいる。圧倒的な取材に基づいて、歴史が重戦車のように迫ってくる。『ローマの休日』や『スパルタカス』の裏にはこんなドラマがあったのか、という物語を、オードリー・ヘップバーンからチャーリー・チャップリン、最新刊ではマリリン・モンローやスタンリーキューブリック、果てはケネディ大統領などのスーパースターが登場し、一つの歴史の裏にはどれだけの糸が絡み合っているのか、を驚嘆を持って読ませられてしまう。あ、読まされてしまう、と書いたのは、ものすごい情報量が、とてつもなく整理された丁寧で、最適解はこれしかあり得ない！というページですすいすい受け取れてしまうから。いまもっとも、立派なマンガ。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

## 「赤髪の女商人」のゆ

- 同業者にハメられ犯罪者として借金を背負った女商人が知恵で乗り切る話。実在の人物や地名は出てこないものの、ファンタジー要素はない、リアルな欧州の中世を舞台としている。シンプルな線で、ノリも軽いので、難しく考えず読み易いが、世界観の考証はしっかりしている。女性の地位が今とは比べ物にならないくらい低かった時代の話しながら、現代に通ずるものがある。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

## 「悪役令嬢転生おじさん」上山道郎

- 原作を探し回りました（笑）完成度の高いベテランならではの逸品という感じ。

図書館員 / 金田健太郎

## 「あなたはブンちゃんの恋」宮崎夏次系

- 恋をするとひとはばかになるとはよく言ったもので、この作品の主人公“ブンちゃん”は、叶わぬ恋を忘れるため、トンデモな行動に出てしまう。人に迷惑をかけ、自分を傷つけ、それでもまだあきらめられない恋心。ブンちゃんの行動に度肝を抜かれつつ、かつて抱いた激しい感情を思い出し一緒に傷つく。刺さる恋愛漫画、久々に読みました。

主婦 / 赤坂真実

- この人じゃなきゃダメだーってという恋物語。宮崎先生の描く物語の中では切なさや突き刺さる言葉で溢れています。読後はどっぷり余韻に浸れる漫画ばかりです。エキセントリックに見えて、実はみんなそうだったでしょう？恋ってそうだよなって思い出させてくれます。「胸キュン」どころじゃない、ズタボロにされるのに幸せって感じです。

バンドマン / ターシ

- ブンちゃんの切ない恋を応援しながら読む。痛かったりホンワカしたり笑ったり。あっという間に読み終わり。でもこの作品は単なる恋愛ものではなく、構造も面白い。すでに死んだ男の子（が宿ったパスケース）の視点で話が進むから、その子シモジの見る「ブンちゃん」が描かれているから、感情移入のしどころがいろいろ変わってそれが楽しい読み心地になっている。ミステリー要素としてシモジの死の謎などもあるので今後の展開も楽しみで仕方がない。

会社員 / 西尾美里

## 「アニメタ！」花村ヤソ

- 元アニメーターの作者が描く、リアリティたっぷりのアニメ制作現場ストーリー。我々が日々当たり前のように楽しく視聴しているアニメは、その裏側にあるとてつもなく厳しい世界で戦い、作り上げてくれるプロフェッショナル達の技術と愛情の賜物。その有難さとともに、「なりたいたいものになれるのは選ばれた人間ではなく、「なろう」とした人間なんだ」という、全ての人生に繋がるメッセージを登場人物たちから感じ、前向きになる。作者の経験、キャリアが成せるアニメ制作にまつわる知識、小ネタやインタビューも満載で、アニメもマンガも美味しくいただけちゃう作品。

会社員 / 伊東敬祐

- アニメーション会社の方で資料整理の手伝いをしていることもあって、身近にアニメーターさんがいたりする状況からその置かれた境遇が、割とシリアスに感じられている昨今、そうしたアニメーターさんの大変さぶりを描いた漫画として、花村ヤソ「アニメタ！」シリーズはなかなかシビアで、それでもやりがいのある仕事の状況をしっかり描いているということで、いろいろと勉強になったりする。19歳だけれど大学には行かず、専門学校にも行っていなかった真田幸は、「王立少女パンナコッタ」というアニメーションが大好きで、自分もアニメーターになりたいと思って受けたのがN2 FACTORY STUDIOアニメーション制作会社の新人動画担当者の試験。決して上手くはなく、専門学校に行ってからと言われて諦めかけたところに1本の手がさしのべられる。九条斎。「王立少女パンナコッタ」で副監督をしていた九条は、真田幸が自販機に入れようとして落ちたコインの行

方をしっかりと見定めていた動体視力の良さや、空間把握能力に何かを見だし、彼女の採用を決める。ただし、原画に上がるまでは自分が詰める第7スタジオには入れず、第2スタジオでの動画から、「ユキムラ」と呼ばれるようになる幸はアニメーター人生をスタートさせた。そして描かれる苦労の連続。何より原画に上がらなければ第7スタジオには行けないし、それ以前に食べていくのも一苦労。アニメーターの賃金が安いことが世間的に言われているが、中でも新人の動画が得られるお金はどれだけ働いても数万円が良いところ。そんな中でもしがみついて腕を高めて、幸は原画の試験を受けるところまで画力を伸ばしていく。<BR><BR> 自身、アニメーター経験を持ち「エヴァンゲリオン新劇場版」にも原画で参加したことがある作者にとって、自分が経験して来たことを綴ったストーリーだけに深みがあり、重みもある。そんな「アニメタ！」の第5巻では、動画から原画へと上がる試験に落ちてしまった幸が、悩み悶えつつもいったいどうしてといったところで、監督の人からレイアウトをコピーしろ、そしてアイラインを考えるとといった指導が出る。そういう言葉が具体的に、原画としてどれだけ必要なのかは追って描かれることになるのだろうけれど、絵がそれなりに描けて動きもちゃんと出せていても、パースがくっついては原画としては成立しない、自分で空間を作り動きを作れてこそその原画であり、そこへと至る道に必要なことが何かを分からせてくれる。アニメーター志望者には、夢をかなえる前に必要な技術、必要な思いを得られる漫画だとも言える。原画に上がれなかった幸は、少し脇にそれと客観的に動画を眺めることができるからと、動画検査の仕事を始めることになったけれど、そこにいる鬼動検の異名を取るアニメーター、富士結衣子が話していたことがとても重い。「悔しいなら大丈夫ね」「悔しいうちはまだ戦えるからよ」「『悔しい』が消えて『羨ましい』だけが残ってしまったら、もう戦えなくなるのよ……」「私みたいに」うまい原画の人を見て憧れても、それに追いつけない自分が悔しいと思えばまだまだ上昇していける。でも羨ましいと思う気持ちは、裏側にあの人には追いつけない、ああはなれないといった諦めの感情が潜む。そうってしまったら、死にものぐるいでそこに至ろうという気力がでてこないし、別の追いかけ方もできなくなってしまうということなのかもしれない。そうした気持ちは普遍化できる。自分の場合はどうか、うらやましさはあっても悔しさもまだあるから、そちらの火を付けることで爆発させられるかもしれない。そう思うことで、止まっている場所から動き出せる。すべてが停滞して先が見えない世界的なパンデミックが続いていても、それが永遠に世界を覆うことはないのなら、動き始めるその時に向けて悔しさを埋めるために何ができるのか。考えたい。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

## 「姉の友人」ばったん

- 恋と愛と嫉妬と憧れと涙とを瓶にたっぷり詰めこんで特別なラッピングをしたような一冊。開けるとトロリと蜜になって、甘くて少し苦い。恋に落ちていく瞬間とか恋が終わる瞬間とか漫画として切り取り方がとにかく美しく、儂いけれども一生忘れない気持ちってあるよね、と思わせてくれる作品。全編に渡っていい香りがするような、直接的な表現はないのに色気の漂う一冊です。背伸びしたい女の子にも昔そんな女の子だった女性にも読んでもらいたいと思います。

公務員／宇田川結衣子

## 「あの月に向かって打て！」寒川一之

- 本当はもう一年様子を見て、2021年にやってくるであろう、物語の最初の山のタイミングで投票を……と思うほど、物語がゆったりと進んでいるのも好印象だが、まさか打ち切りになってりしないよな……と不安に駆られて本年票を入れることに（実際、ビッグコミックスピリッツ誌の『リボンの棋士』や、イブニング誌の『いとしのムーコ』などの良作が何の事情か連載終了という腑に落ちないケースが続き、マンガ雑誌の連載体制について疑心暗鬼になっています）。秀才一家の末っ子が高校受験に失敗し、失意のまま野球部に入ったところ、超初心者にも関わらず、ホームランバッターとしての才能のきらめき（のかげら）を見せ始める……というのが、物語の現在地。最近のスポーツマンガにしては、素直にゆったりと話を進めてくれていて、すっきりした画風とも相まって読み疲れしない。登場人物も1人か2人ずつ登場させ、主人公との関係性をきちんと描いてから、新しい人物を登場させる。おそらくはもうすぐ最初の大会がスタートするはず。設定も作画も物語も、不要に話を詰め込みすぎでないから、読者としてのものびのび読むことができる。作中に登場する女の子も（なんなら男の子も）かわいく描かれていて、長く続いてほしい作品です。

ライター／編集者（馬場企画）／松浦達也

## 「Artiste」 さもえど太郎

- 人がテーマだ。なんて陳腐すぎて言いたくないんですが、でもやっぱりこのマンガの魅力は、誰からも好かれる親しみやすい顔をして、人という対象の深いところまですさまじい掘り下げを見せてくる点じゃないでしょうか。大好きなこの物語の紹介を書くために、少しでも初めて読んだときの気持ちを確認したくて、結局全巻を読み直したのだけれど、それは友人と仲良くなった後、その人から昔語りを聞きつつ、でも今はよかったなあって酒でも飲み交わしてるような感覚で、自分でも不思議に思うくらいにだいたいずっと涙目でした。なんだ、僕、キモ(ラブ)いな。調和してるのが美しいんじゃないくて、人との違いを前提に調和しようと変わっていく姿が美しいんですね。あと美しいといえば、最新6巻の表紙イラストは、夜のパリを歩いたことがある人なら、ぎゅっと胸を締め付けられるような風景だと思う。ついで、たいへん蛇足かと思うけれど、3巻のリユカのストーリーは、人を理解しようとするためのひとつの見方を教わった、ものすごく素敵なエピソードでした。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

## 「アンダーニンジャ」花沢健吾

- は一。また面白い新作出てきてしまったなあ。現代の忍者かあ。ミッションも面白いしバトルも面白い。学校に行ったり、主人公がニート下忍(実は超強い)という世界観もたまらない。女の子キャラも花沢作品特有の独特な緩い女子キャラとちょっと派手な女子。これからの絡みが楽しみ。支給される武器・防具(忍具)の名前、忍者語の世界観もワクワクさせてくれる。帯に「忍者だらけのバトルロイヤル勃発」とあるが、個性的なキャラクターたちが4巻まででもう盛沢山! きっとこれからどんどん驚きの展開が待ってるのかなと期待させてくれる。

会社員 / 西尾美里

## 「アンデッドアンラック」戸塚慶文

- 少年漫画王道的異能力バトルもの。まだたった4巻とは思えない展開の速さと濃いストーリーでぐいぐい引き込まれます。毎回クライマックスという勢いがすごい!

会社員 / 津田圭

- 「単行本4巻めの展開じゃない」など、そのお話の盛り上がり方から早くも話題になっている、異能力を持った「否定者」と世界そのものとの対決のお話です。戦いを終えるごとに歴史や常識が書き換わっていくお話の規模の大きさ、それでありながら主人公の風子ちゃんとアンディの絆をしっかりと描くエモな展開。週刊少年誌において未曾有のスケールと密度、速度を持った、異形の漫画です。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

## 「違国日記」ヤマシタトモコ

- 両親が急に亡くなった中学生と、人見知り作家の叔母の奇妙な共同生活。なぜここまでひかれるのか。それがうまく伝えられたらと思って何度も読み返しているのだが……。この作品の魅力をなんと云ったらいいのだろうか。表現力の乏しい自分が恨めしい。例えば、フィクションを読んでいるときにはいつもはドラマを見ているような感じになるのに、これを読んでいるとノンフィクションを読んだ時のような刺激を受ける。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- 伯母と姪の2人暮らしは、言語も習慣、倫理観が違うそれぞれの国に住む国民同士の交流に等しい。

菓子研究家 / 福田里香

## 「異種族レビューアーズ」天原、masha

- ここ近年、異世界が舞台の物語ってとても増えていて猫も杓子も異世界! のいい感じだと思うのですが、だからこそ声を大にして言いたい! 「異世界モノはバックデータがものをいう!」と。異世界を描くからこそ現実との世界設定の差やそこから来るギャップがないといけないと思うのですよ。その点この漫画はすごい! 様々な異種族が出てくるのですが、なるほど、生物学的にみたらそうかもー。と納得してしまう面白さがあります。ダンジョン飯に通ずるものがある。内容は大人向けなので、読む人を選ぶと思うがとても面白い。

鳥取の美術の先生 / 佐川由加理

## 「異世界おじさん」殆ど死んでいる

- 今や星の数ほどある「転生モノ」。その面白さはわかります。でも、「まあこのパターンになっちゃうよね」という漫画がとて多く感じていました。そんなときに見つけたのが「異世界おじさん」。思いっきりピンタされたような気分でした。漫画に限界はないな?、と感じさせてくれます。かつての僕と同じく転生モノに辟易している方、是非「異世界おじさん」を読んでみてください。きっと「やられた?」って思いますよ。アイデアものによくあるのが尻すぼみですが、この作品は現在コミックス5巻まで出ていながらにして、一切失速を感じさせません。この先もきっと楽しませてもらえることだろうと期待を寄せている次第です。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 1990年代、ゲームに夢中になっていた'あの頃'を、地獄みたいな表現で思い出させてくれるギャグマンガです。異世界に転生して過ごしてきた17年間は、オークとして狩られ続けるという悪夢のような日々を生き抜き、見事無事日本に帰ってきたオジサンが語る懐古ギャグ漫画です。

デザイナー / 佐藤優

## 「異世界失格」野田宏、若松卓宏

- テンション高めの異世界転生モノが流行る中、こちらの主人公は某文豪風の死にたがり。また転移者達がチートスキルでやりたい放題しており世界の脅威となっているという設定もとても斬新で面白い。そして何よりセンセー、カッコイイ!!

建材メーカー勤務 / 竹本慧

## 「犬と猫どっちも飼ってると毎日たのしい」松本ひで吉

- タイトルそのまま! 本当にいつもたのしい。いつ見ても楽しいし、安らぐ。なんだか今日はつらいな……というとき、いつも開く一冊。犬と猫、似ても似つかない行動を繰り広げるのに、結局のところ、どっちも可愛くて楽しくて。いいなあ、犬か猫どちらか飼うとしたらどちらにしようと思いつつ延々読んでいられる。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

## 「イン・ザ・ポケット」谷和野

- 教訓を物語の形にして伝えることがとても上手い。本棚にそっと残しておいて、子供が読んでくれたらいいなあ。

往来堂書店・コミック担当 / 三木雄太

## 「詩歌川百景」吉田秋生

- 日本の田舎の情景が素晴らしい。美しい自然と風情のある街、狭くて暖かい人たち、田舎特有のまとわりつくような人間関係、日本古来の湿っぽさを持った不思議、自然への畏怖と、いい面も悪い面も描いてあって、田舎の温泉街の一員となったような、強い没入感があります。その中で生きている若者たちを中心としたドラマなのですが、とてもリアリティがあります。日本古来のコミュニティの良さも悪さも含めてどっぷりつかりたい方にお勧めのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬公将

- これぞ、いやこれこそが群像劇\*! 驚くほど丁寧に、繊細に、登場人物の感情やそれぞれの距離感、表情が描かれています。素晴らしい表現力だなあ、と息を呑みます。胸が締め付けられるような、じんわりとあたためられるような、大切な気づきをくれるような。まだコミックスは1巻のみ。完結するまで楽しませてくれること間違いなし。吉田秋生さんの作品に共通して言えるのは、最初から最後まで丁寧にあり続けてくれるということ。続きをお待ちしています。\*群像劇主人公にスポットを当て、それを取り巻く人々という見方で脇役を描くスタイルの劇ではなく、登場人物一人一人にスポットを当てて集団が巻き起こすドラマを描くスタイルの劇のこと。(Weblio 辞書)

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

## 「午後のあくび」コマツシンヤ

- 白玉町で暮らすOLひび野あわこさんの少し不思議な日常を6ページずつのショートショートで描いています。言葉遊びが楽しくて好きです。街中がシュワシュワに包まれる今日は「炭酸アワー」、眠気を吸いとってくれる眠気帽子、商店街ならぬ書店街など。お店や催し物も心ときめきます。雨に関するお店が並ぶ梅雨市(つゆいち)、船の図書館、食べる時計のお店、雲を売る店などなど。漫画の中の不思議が私の日常にもあふれてくるようでわくわくします。ぜひのんびりゆっくり読んでください。

声優 / 富岡美沙子

## 「うめともものふつうの暮らし」藤沢カミヤ

- ねこっぼい姉妹うめとももの、「うれしい! たのしい! おいしい!」が、ギュッとつまった暮らし。画面のすみからすみまで圧倒的かわいさ! そもそも「ねこっぼい姉妹」ってなに! (笑) 単純に猫の擬人化でもない、猫とおんなのこのいいとこどりのバランスが類を見ないです。モワモワの毛布に横たわるときの「モーフ…」という擬音や、クリームチーズを「クリムチ」って略す言語センスも大好きです! かと思うと、セリフが無いコマの間もとっても絶妙で、読んでいる間とてもゆっくりとした時間が流れます。2020年一番癒されたマンガです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

## 「陋巷酒家」丸岡九蔵

- しばらく前に「3丁目の夕日」が流行りましたよね。懐かしく古き良き昭和の世界。であれって懐かしかったけど、本当にみんなが好きなのは古き良きあの人情の世界だと思うのです。その人情の世界を今よりずっと未来のサイバーパンクの世界に持ってきたらどうなるか。きっとこうなる! オーバーテクノロジーの世界観を舞台に描かれてるんだけど、なんだかとても懐かしく登場人物に共感する。かと思えば違う世界線を感じたり。その緩急がとてもよい。攻殻機動隊のメンバーも飲みに来てたりして欲しいなー。SF好きなあなた。こんな作品もぜひお勧めですよ!

鳥取の美術の先生 / 佐川由加理

## 「映画大好きカーナちゃん NYALLYWOOD STUDIOS SERIES」杉谷庄吾【人間プラモ】

- 杉谷庄吾【人間プラモ】による「映画大好きポンポさん」のスピノフ漫画で、オーディションになかなか合格できないでいたフランちゃんを主人公にした「映画大好きフランちゃん NYALLYWOOD STUDIOS SERIES」(KADOKAWA、880円)のストーリーに、自分から動き出さないことへの叱咤を受けているようで身を引き締めた読者も大勢いただろう。もっとも、そんな外側の世界から物語を受け取っていた読者よりも、全身を殴りつけられるような衝撃を受けた人がいる。女優志望のカーナちゃんだ。同じく女優を目指し、いっしょに何度もオーディションを受け、落ちるのを繰り返していたフランちゃんが、自分から動いて自分が輝ける場所を作り出し、スターへの道をかけあがっていったのを横目に、カーナちゃんは先んじて映画デビューを飾りながら、脇役に甘んじ続けていた。どうして自分は。そう思う心の中には、演技が硬くて応用が利かず、オーディションに落ちてばかりいるフランちゃんを見下している自分がいた。自分は何でもそつなくこなしてデビューも先に果たしたのに、どうしてスターにはなれないのかといった嫉みの感情もたぶんあった。だからスターにはなれないのだとは気づかずに。そんなカーナちゃんが自分で気づき、動き出そうとするのが、「映画大好きカーナちゃん NYALLYWOOD STUDIOS SERIES」(KADOKAWA、920円)だ。不満を抱きつつ街を歩いていたところでぶつかってしまい、その時に突っ込んできた車にはねられてしまった男を病院に訪ねたカーナちゃんは、科学考証か家として仕事をしながら脚本家を目指していたその男、デュラントに自分をヒロインとして登場させるなら、ポンポさんを紹介すると言って誘い出す。どちらかといえば冷笑的だったカーナちゃんの目に、今までになかった炎を見たポンポさんは承諾したが、デュラントの脚本はSF好きが高じつつもSFマニアに笑われたくないという思いから、固くて難しくてわかりにくいものだ指摘して、これを直せたら改めてプロデューサーとして仕事をしても良いともちかける。自分はスターになるべき上手い女優だと思っていたがっているカーナちゃんと、自分は高尚な科学考証を盛り込んだ歴史に残るSF映画を作れると思い込んでいるデュラント。どこか

似たものどうしの2人が、映画というエンターテインメントの世界で自分自身の間違いに気づき、あるいは思いを曲げてでも這い上がろうとする姿に、世を拗ねて生きている口先ばかりの人間として、頭を叩かれたような気にさせられる。とはいえ、ポンポさんもポンポさんで、共同出資を持ちかけた映画プロデューサーから、SF映画は費用対効果が薄いとされた時に、「作品内容の精査を怠り、数字という名の大衆に迎合し続けたら…」「映画は芸術ではなく退屈しのぎの効率重視な消耗品に成り下がってしまうのよ!!」と訴えて、開いてから同額の出資を見事に引き出す。理想的過ぎるというなかれ。理想を失って何がエンターテインメントだ。そんな思いを新たにさせる展開だ。そうして整ったお膳立ての上、アクションスターのレオン・ポールウェイドが主演と監督を務めることになって、ますます高まる期待の一方で、カーナちゃんの方に問題が起こる。演技は上手い。けれども心が乗っていない。それがだから、カーナちゃんとの差だと気づいて追いつこうとしても、才能に違いがあって追いつけない時に、それでも掴んだチャンスは逃したくないとカーナちゃんがとった戦略がすさまじい。具体的にどうかは読んで頂くとして、これもひとつの女優の在り方だと感嘆させられるだろう。何かをやりたいと願った時に、さしのべられる手を待つだけでなく、自分自身で気付いて何かを成し遂げようと走り出す大切さを教えられた「映画大好きフランちゃん NYALLYWOOD STUDIOS SERIES」に続いて、夢のためなら見てくれにこだわらず自分をさらけ出す必要性、それでも芯だけは失わないで夢を見続ける大切さを感じさせられる「映画大好きカーナちゃん NYALLYWOOD STUDIOS SERIES」。合わせ読むことで、映画の世界に限らず創造の世界で自分の道を拓いていくヒントを得られるだろう。こうなると気になるのが、「映画大好きポンポさん」シリーズの中心にいて、アカデミー賞監督にもなったジーン・フィニが次に何を始めるかということ。「映画大好きカーナちゃん NYALLYWOOD STUDIOS SERIES」の末尾で往年の名プロデューサーから話を持ちかけられたジーンはポンポさんと対決するのか。そして挫折するのか。それともいっそうの大きさを得るのか。今はその物語が紡がれる時を待ちたい。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

## 「A子さんの恋人」近藤聡乃

- こんなにも美しく、前向きで、愉快的な別れのシーンは見たことがありません。別れは辛いだけではない。前向きで自分を次のステージにすすめてくれるものだということを教えてくれる。そんな漫画です。しがらみを断ち切って、新たな一歩を踏み出したい人におすすめの漫画です。

システムエンジニア/廣瀬公将

## 「扇島歳時記」高浜寛

- 『ニクスの角灯』を毎年投票し続けていました。(手塚治虫文化賞おめでとございます!!)『扇島歳時記』は『蝶のみちゆき』の続編にあたり『ニクスの角灯』よりは前のお話。2作品に登場した廓生まれの「たまを」が14歳の時のお話です。両親も知らず、遊女になるという残酷な宿命を背負いながらもいつか来る「その時」を待つ禿として過ごす時間が静かに描かれています。普通の遊女ものと違う点がとても面白い。長崎が舞台のため、異国文化との交流やキリスト教の存在が色濃く出ていたり。出島のオランダ商人の家で働き、様々な人と出会い「廓の外」を体験して「たまを」は成長していきます。炊事、洗濯、お使い、料理、、オランダ商人って女郎さんと住んだりしてたんですね。知らなかった。知らなかった世界ですが、キリスト教の存在等リアルに表現されていて本当にこんな風景だったのだろうか、と映像を垣間見ているようです。この作品は「長崎三部作」の最終節ともいわれているのですが『扇島歳時記』が私は一番好きな気がします。どの作品も大好きなので、甲乙はつけがたいのですが、「たまを」が明るくあどけなくて、遊女になる未来が一層切なくなります。季節感を大事にして、人との出会いを大切に。自分の運命を呪わず、楽しむ工夫をして逞しい。周りにいる誰かを大切にしたいと思える作品です。

会社員/佐々木つむぎ

## 「往生際の意味を知れ！」米代恭

- この人ホント、フィクションとしての生々しさがリアルだな、と思います。前作の不倫にしても、今作の元カレ精子バンク扱いにしても、友人の話として聞かない事も無い、有り得なくも無いけど普通無いよね、という感じ。面白いけど、他者に薦めたいかと言われると気が引けるので、大勢の人に是非自力で手に取って貰いたいです。

(株)鳥屋書店 店舗企画本部/井出麻悠美

- 前作のあげくの果てのカノンもサイコヒロインが輝いていたが、今回もサイコカップルが輝いてる。子種だけ寄せというヒロインと、元カノをもはや神格化している主人公のやり取りがちょっぴりセクシーで尚且ついろいろ破綻していてとても続きが気になります！

建材メーカー勤務 / 竹本慧

- なんて面白いマンガなんだ……。あくまで自分の観点でしかないけれど、この作品のネームの感じから推測するに、作者は自分の中の暗闇に触れたことがあるんじゃないでしょうか……。それこそ自分が鬱の経験を経たことで知った感情が言語化されていたりで、ムチャクチャしんどい涙が溢れるけれど、それだけリアルな心理描写がされていることに感服しています。バカっぽい設定が作品の重さをフォローしているけれど、自分的には近年読んだマンガで一番重たい言葉がズシンズシンきます。

イロイロ屋 / 杉本善徳

## 「王妃マルゴ」萩尾望都

- 萩尾望都が描く16世紀のフランス宮廷。ときはカトリックとプロテスタントの宗教戦争のさなか。愛憎、陰謀、罨、乱、殺戮。萩尾望都の世界の道具立てはすべて揃いました。2020年は萩尾望都先生の『王妃マルゴ』と山岸凉子先生の『レベレーション 啓示』という、ふたつのフランス史ものが完結した記念すべき年となりました。この21世紀のはじめに、この二人の大作家がフランス史の物語に惹かれたというのは、読者としてなんとという幸せかと思えます。オルレアンの乙女に対して、数多くの男たちと愛を交わしたマルグリット・ド・ヴァロアという、このコントラスト。『王妃マルゴ』といえば、パトリス・シェロー監督の同名の映画、その主演のイザベル・アジャニーが思いだされますが、萩尾望都の描くマルゴは、どのような女性なのか。いま読まなくていつ読む。いやこれからも読まれるに違いないだろうけど、やはりいま読んでほしい物語です。各巻の表紙を飾る美しい貴族たちの装束にもうっとりです。

教員 / 戸田穰

## 「おかえりアリス」押見修造

- 幼馴染みが男の娘になって戻ってきた。こんなふうには言えばキャッチーかもしれないけど、今までの作品やあとかきを読むと、そんな簡単なものにはならないだろう。男らしさをどんな風に腑分けしてくれるのか？ 楽しみです。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

## 「おじさまと猫」桜井海

- 日々の生活に疲れ癒しを求めてつつい手に取ってしまった。

カメラマン / 平沼久奈

## 「オッドマン 11」道満晴明

- 道満先生好きです。

文筆業 / 海猫沢めろん

## 「おむすびの転がる町」panpanya

- panpanyaさんのお話で、一番好きな本です。ツチノコのお話が大好きです。こんなツチノコだったら、私も同じことをするな、と思いました。

書店員 / 桶谷佳代

- 毎作毎作、果てることなきpanpanyaさんの視点、発想、表現のその深さたるや。隅から隅までこだわり尽くされていると感じるのは、なにも新作「おむすびの転がる町」だけではなく、過去の作品も全てなのです。装丁の遊び心もたまりませんね。紙の限界に挑戦しているかのようでもあり、ワクワクさせてくれます。漫画と漫画の間に時折配置される日記、そして最後の解題も読み逃すことなかれ。panpanyaという漫画家、そしてその作品の魅力については、筆舌にし難いものです。しかし強いて言うならば。「あなたはpanpanyaの漫画を体験したことがありますか？」もしまだ体験したことがないならラッキーです。是非一度、読んでみてください。どの作品を手にとったとしても、きっと後悔することなく、本棚の1番いい場所で、ずっと大切に読み返され続けることと思います。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文



## 「カイニスの金の鳥」秦和生

- 19世紀イギリス、女性の立場が弱い時代。女性が作家になるなんて夢のまた夢だった時に男装して作家になった主人公。そしてそうだったが故の葛藤を描く。お話が丁寧。親友となるマイルズとの関係が少しずつ変化していくのも心地よい。全体的に葛藤を乗り越えていく人たちの前向きな内容なのが安らげる要因なのかも。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

## 「輝夜伝」さいとうちほ

- かぐや姫と天女に隠された謎をめぐる平安絵巻。美男美女の美しい絵に恋にアクションにワクワクします！

主婦 / 紺野泉

## 「かしこくて勇気ある子ども」山本美希

- 表紙をはじめとして、作中の「赤」がとても印象的。赤は命の色。「かしこくて勇気ある子ども」だった故に大人から攻撃されてしまった少女がいる。そんな理不尽がこの世にはある。徹底的に絵での表現にこだわる山本さんの描く、子どもを授かった夫婦の期待・不安・葛藤。印象的なセリフもたくさんありますが、その一方で、もしこの本にふきだしが無かったとしても絵だけでじゅうぶん伝わるところではと思うくらい、人物の表情が豊か。そして前述の「赤」が、幸せな雰囲気をもたらしたり、不穏な空気を表したりと、ページによってその印象がめまぐるしく変わります。親たちは、そして生まれてくる子どもは、理不尽にどう立ち向かって生きていくのか。わたしには子どもがいないので、描かれている夫婦の気持ちを本当の意味で知ることはできないのですが、想像し、寄り添うことはできます。この本が、その気持ちを強くしてくれました。子どもの未来のために大人は何ができるのか。全ての大人に読んでほしい1冊です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 絵本のような雰囲気の絵だったので、ちょっとファンタジーっぽいのかと思いきや、大変リアルなおはなしでした。一歳児を育児中ですが、赤子は本当に心がまっしろで、これからどういう子供に育つかは周りの大人次第なのだと思うにつけ、この話がどーんと心に刺さり、誰もが住みよい世界になるよう努力していくことを諦めてはいけななと思います。

主婦 / 堀江千秋

## 「片喰と黄金」北野詠一

- ゴールドラッシュで沸くカリフォルニアを目指すアイルランド人の少女と青年の物語。袖振り合うも多生の縁といいますが、旅をする中で、そこでしかない出逢いをひとつひとつ大切にしていける彼らの真っ直ぐな生き方に胸を打たれること間違いなしです。毎巻泣きます。主人公のアメリアとコナーの主従関係、好きじゃない人はいないはず……！

女優 / 齋藤明里

## 「髪を切りに来ました。」高橋しん

- 事情があって、東京から南の離島に“留学”してきた親子。『何も起こらない話』と著者は言っているけど、思っていることをうまく伝えることができない親子が頑張っている姿、島の人々の優しさと強さが胸を打つ。家庭に並ぶご飯が全部おいしそうで、とても良い。おいしいごはんは心を癒してくれる。

主婦 / 赤坂真実

## 「カラーレス」KENT

- 人間も色もない世界で、色を巡って戦う。白黒マンガでの表現をうまく使って描かれてるなと思います。人間がいなくても人の姿の少女の存在がまた引き立ちます。ありそうでなかったSFアクション漫画。これ巻頭カラーとかになったらやっぱり白黒なんですかね。と余計な事も考えつつとても楽しみです！

デザイナー / 平沼寛史

- 色素が失われ、異形化が進んだ人類。じわじわと次の展開をたのしめる SF アクション。モノクロの紙面＝色が失われた世界として表現されていて、ピンポイントで入る青緑色の色彩が綺麗です。

会社員 / 伊藤千恵

## 「可愛そうにね、元気くん」古宮海

- 「鼻血を出した同級生こそラッキースケベ」と感じる猟奇的な自分を、立派な変態と主人公が認識しているという抜群のつかみ。高校生・元気くんが自分のフェチに向き合って同人作家としてリョナ作品をモリモリ書く一方で、そのモデルとしている同級生にそんなことを現実にするのはダメだし、同時にこれは世間に顔向けしていいことではないのだ、と社会ともちゃんと向き合っていく、というこのヒリヒリする現実解からスタートするだけでもたまらないのに、そこに、完璧好感度女子同級生が、裏の顔と悪意とSな性癖をもって登場して、すべてを振り回し始める…！！ いくら巻が進んでもスピードが落ちる気配がないし、男女ともに全キャラクター性癖丸出し博覧会なんだけど、それぞれの性癖に対する感じ方のディティールが恐ろしい。そのせいで、もう、真の意味でキャラクターがエロいこと、エロいこと…！ こじれにこじれている現状、これ、どこに話は進んでいくのでしょうか…！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

## 「ガンニバル」二宮正明

- 年明けに9巻が出たので、推すのも今回が最後。「禁忌の人喰い村サスペンス」というキワモノ的惹句にビビらず、とにかく一度読んでみてほしい。作画、構図、演出、セリフに至るまで、現代トップクラスの技量を味わえます。「さぶさん」みたいな、普通ならモブ扱いのオヤジすら「ここに生きている」と感じられるのはすごい。ただし、物語は相変わらず凄惨で怖すぎる。連載は「あの人」の正体が明かされる戦前編の核心へ。単行本を待たず、毎号食い入るように「週刊漫画ゴラク」で追っています。

読売新聞文化部 編集委員 / 石田汗太

## 「消えた初恋」アルコ、ひねくれ渡

- 誤解から勘違いして始まってしまった恋?! 青春してます。恋してます。友情してます。胸キュンします。友情×恋の発展がどうなっていくのか気になる漫画です。周りのキャラもとても魅力的です。笑いあり、涙あり、そして爽やかさあり。おすすめです。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

## 「消えたママ友」野原広子

- シンプルな絵柄で、ごく身近な世界のことをリアルに描きながら、なんと息詰まるサスペンス！ 読みながら「オウ！」と声が出てしまう。すんごくややこしい人間関係のもつれ、すれ違い、わだかまり、その他もろもろを、わずかなコマ数と短いセリフと最小限の線で過不足なく描き出してしまう力量に脱帽。

朝日新聞記者 / 小原篤

## 「寄生列島」江戸川エドガワ

- サスペンススリラーこういうホラーが大好きなのですが、その中でも勢いをとても感じる作品。出てくるキャラクターがいちいち個性的で読めないのになにかどんでん返しがあるのでは？と深読みしつつ楽しんでいます。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

## 「きみにかわれるまえに」カレー沢薫

- ペットを飼っている人だけでなく、ペットをこれから飼いたい人に是非読んで欲しい漫画。ペットを飼う事を可愛く面白く、でもそれだけじゃなく色々と考えさせられる短編集。一話目から可愛くて笑えて泣けます。

主婦 / 佐藤しのぶ

## 「君には届かない」みか

- 3巻ヤマトのお父さんの台詞で泣きました。かわいくて切なくて続きが楽しみです。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

## 「君の大声を聞いたことがない」くれよんカンパニー

- 人生いつも誰かの脇役だった三十路 OL が舞台に魅せられ、不器用ながらも夢を追いかける姿に、いつしか応援したくなること必須！何故か鹿、背負ってチャリ漕いでるかは、本編読んでのお楽しみです。

鍼灸師（漫画家専門・兼美容鍼灸師） / 碓氷麻里子

## 「君は放課後インソムニア」オジロマコト

- 永遠に続くような高校1年生の夏に、真に分かり合えるかけがえのない相手と出会えたら。出会えただけじゃなくて時間をともに過ごせたら。過ごすだけじゃなくて同じ気持ちを共有できている、と心の底から実感できたら。100%の信頼感を託せる相手がいつも隣にいたなら——。誰でも夢想するだろうそんな「理想の夏」が真空パックされているようなマンガ。メガネ男子・中見と同クラの曲伊咲（まがり・いさぎ）は偶然に出会い、ともに不眠症で悩んでいることを知る。校内に昼寝の場所を確保するという利害が一致し、手を組む中で次第に親しくなっていく。そのゆっくりとした関係性の深まりを、一コマコマ、丁寧に丁寧に、描いていく間合いがとても気持ち良い。2人それぞれの過去や不眠症の理由も次第に明かされていくのだが、本作については先を急いでがつつく読み手はいないだろう。それよりも2人が互いを他とは違う唯一無二の大切な相手だという確信を強めていく小さなエピソードの積み重ねと、それを受けて相手を見やるときの目の輝きがだんだん増していく絵力の巧みさ、胸が震えるようなリリカルな作品世界こそが楽しい。仕事が終わった後にお酒でも飲みながら、能登のなつかしい景色の中でゆっくりと進む時間の流れを追いつつゆったりとページを繰るとかがよい感じ。掲載は週刊ビッグコミックスピリッツ、2019年連載開始。春の文化祭準備から始まって5巻が出て夏休みというのはオジロマコト先生らしいペースで、長編の予感（ペースがゆったりだからコロナを意識しないで済むというのもあるような）。屋上の使われなくなった天体望遠鏡室、田舎道沿いの古びたゲームセンター、港、神社、満天の星空、雨宿りで駆け込んだバス停の小屋など、舞台装置も最高に胸キュンものかと。重要な脇キャラの猫もいい。

会社員 / 天野賢一

- 自分だけが抱えていると思っていた不安や悩みを誰かと共有できたとき、ストレスは大きく軽減されるし、何よりその共有できた相手と強い絆が生まれます。理解しあえるって本当に嬉しいし心が温かくなる、そんなことを感じさせる作品だと思います。

会社員 / 林礼春

- 睡眠障害をもつ高校生男女の物語です。天文部を舞台に徐々に心を通わせてゆく様子がみずみずしくて、眩しくてたまりません。淡く、ロマンチックなイメージの中に、ちゃんと熱い温度やしめっぽさもあるので、心に残ります。理想的な青春の形がここにある。現実に少し疲れて美しい世界に触れたい人におすすめの漫画です

システムエンジニア / 廣瀬公将

- 「瑞々しい」なんて言葉は、スイカくらいにしか使える気がしない僕の人生ですが（あと梨、それと桃）、このマンガはやっぱり瑞々しいなあと思います。オジロマコトさんのマンガには、このお話で初めて触れたのですが、描かれているコマの外側にも世界を感じられる素晴らしい背景（こういうのも背景っていうんですか？背景だけでも楽しめる・・・）の上で、肉体の重さを持っている登場人物たちの一挙一動やくるくるまわる表情がたいへん魅力的で、今よりずっと自由で、いい感じに不完全だった、自分の青春時代のことを、少し思い出せるような気がするマンガです（いや・・・そんないい経験なかった・・・かも？）

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 誰にも打ち明けられない秘密と、欠落感を抱えた二人が共に時間を過ごすこの物語。自分には何か欠けている、何かおかしいと感じている本人とは裏腹に、もう一人はその一方を素晴らしい存在だと感じている。なんて素敵なことなのだろう、と読み進めながら思ってしまう。10代の間、起こること全てが鋭く刺さり、その全部において全力だった感覚。それが作品の中に詰まっていて、とても眩しい。更に更に、とにかくキャラクターが魅力に溢れている。イサキが可愛い。ガンタも可愛い。とてもとても甘酸っぱい、青春ラブコメディ。こんな青春を送りたかったなあ！

C smart ららぽーと EXPOCITY 元書店員 / 杉佳尚

## 「きみを死なせないための物語」吟鳥子、中澤泉汰

- 宇宙都市の新人類たちのドラマを経て、壮大な秘密と新たな希望が語られるSFコミックの傑作。全八巻で完結した今こそ強く推したい。

ライター / 福井健太

- 2020年堂々完結のSF少女漫画。宇宙都市国家コクーンで暮らす人々の物語。丁寧に織り上げられた物語はとにかく圧巻。

会社員 / 津田圭

- 人類は突然変異し、ネオテニイという長寿の人類が生まれた。そして光合成する人類、ダフネーは奇病を持ち16で死に至る。そんなダフネーの少女を死なせないためにネオテニイの四人が紡ぐ物語。読み解く程に難解ではあるものの、彼らが葛藤しながらも答えに辿り着くまでを美しい作画と世界観で描き、日常をしばし忘れてしまいました。

鍼灸師（漫画家専門・兼美容鍼灸師）/ 碓氷麻里子

## 「金曜日はアトリエで」浜田咲良

- 環さんが印象的です。テレビドラマになると、面白いだろうけれど、多分駄目でしょうね…。個人的なイメージは、檀蜜さなのですが…。これから先がとても楽しみです。

書店員 / 桶谷佳代

## 「クレイジーフードトラック」大柿ロクロウ

- SF！おっさん！メシ！車！銃！そして女の子！好きなもの全部のセスペシャルメニュー的な嬉しさ！

図書館員 / 金田健太郎

## 「煙と蜜」長蔵ヒロコ

- とにかく、姫子がかわいい、文治がかっこいい。年の差カップルですが、なんともほのぼのとしていて、読んでいてほっこりしてしまいます。時代背景もありますが、和装や背景など、とても丁寧に描かれているので綺麗です。

コミック担当 / 実松由夏

- 電車広告で絵を見た瞬間に「私が好きな設定に間違いない」と直感した作品です。そしたらドンピシャで脳内で大きなくす玉がパカーンと割れました。自分では経験することはない純愛ドラマが描かれており激動の時代の中でふたりが一体どのように愛を育んでいくのか見守ってみたいです。

元書店員 / 八重田幸子

## 「後ハッピーマニア」安野モヨコ

- 43歳の身で読むと恐ろしいマンガ。

カメラマン / 平沼久奈

- 「シゲタ！やっぱり君が好きだよ！」とシゲタとの再会に歓喜しつつ、40代のシゲタには「あの頃の私はシゲタのことを本当には理解していなかったかもしれない…」と思わされるような発見がある…という、最高の続編。59歳・寿子さんのようなタイプの女性を批判的にではなく、こんなにも生き生きと描けるのは、安野さん以外にいないと思う。自在に引かれる描線も完璧過ぎるし、手書き文字の小ネタ（お風呂でEVIL……）も冴えまくって細部まで読み逃してなるものかと思う。

ライター / 門倉紫麻

## 「恋する母たち」柴門ふみ

- 『東京ラブストーリー』の著書が手がける、3人の母達が折なす紆余曲折のラブストーリー。ラストまで、まるで昼ドラを一気に堪能した感のある満足度でした。

鍼灸師（漫画家専門・兼美容鍼灸師） / 碓氷麻里子

## 「恋せよキモノ乙女」山崎零

- 着物が好きな女の子が仕事と恋に真正面から頑張る話。話自体はありきたりなのですが、とにかく着物愛がすごい！出てくるコーディネートが全て可愛い。主人公が前向きな気持ちで着物に向き合っていて、服を選ぶ時の気持ちはこうありたい、そんな気持ちを思い出せてくれる漫画です。私自身は毎日着物を着るところか、年に1回着ればいいぐらいの日々ですが、場所や季節、選ぶ気持ち、柄やその意味を丁寧に、嬉しそうに説明しているところを読んでいるだけで幸せな気持ちになります。着物コーデのページだけ毎回カラーにしてほしい…！着物を着たり、興味を持つ人がもっと増えたらいいな、という想いも込めての選出です！

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

## 「小犬のこいぬ」うかうか

- Twitterの頃からファンだった作者さんの待望の一卷目！とてもシュールなんだけど、人の感じる孤独や闇でもそれを包んだり救ってくれる人の優しさが犬となって表現されている。終わる頃にはみんなこいぬを応援したくなっているから気をつけろ！

鳥取の美術の先生 / 佐川由加理

## 「珈琲をしづかに」みやびあきの

- 大人に対する漠然とした憧れを持つ高校3年生の主人公が、ふとしたきっかけで立ち寄った喫茶店の“大人な”女性マスターに惹かれていく。でも大人だと思っていたマスターも実は全然大人になんかなりきれていなくて。大人ってなんだろう、恋ってなんだろうという誰もが通る葛藤を抱えながら、主人公が少しずつ成長していく様子を甘酸っぱいストーリーと美しい絵で描く。描写と描写の間の取り方が上手く、読みながらまさに喫茶店で珈琲を静かに飲みながら考え事に耽る時のような、あのゆったりとした時間を過ごすことができる良作

弁護士 / 三村量一

## 「午後3時 雨宮教授のお茶の時間」鷹野久

- 『ハリー・ポッター』のトリークルタルトをはじめ、物語の中に登場する美味しそうなお菓子をイギリス文学とイギリス菓子を愛する文学部教授が作ります。物語にもお菓子にも興味がわく一冊です。

会社員 / 伊藤千恵

## 「ここは今から倫理です。」雨瀬シオリ

- もうドラマ化されるから十分メジャーだとは思いますが、好きなので一票入れさせてください。というかもう全ての学校の図書室に入れて欲しい。これと「3月のライオン」があればイジメはなくならないかもしれないけど苦しむ人は減ると思ってます。

バーテンダー / 村井真也

## 「古代戦士ハニワット」武富健治

- 相変わらず面白いので、去年に続き推します。第二部に行ってます、主人公以外の周りの描かれ方が面白くなってきた気がします。地震も水害も疫病もありとあらゆる災害において多くの人が亡くなって、今日もテレビを見ると何十人という人が亡くなったと思うことが毎日のようにあるのだけど、だからこそ一人一人の書き方。よくモブと呼ばれる一人一人のリアリティが去年の今頃よりグッとくる

鳥取の美術の先生 / 佐川由加理

- 暗黒神話 meets 特撮！という時点で個人的にはたまらないし、一方で読み手を選ぶ作品だとも思う。しかし最高。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

## 「児玉まりあ文学集成」三島芳治

- 言葉によって世界をつくり変える文学少女と、彼女に心酔する少年のお話が、ラブコメというジャンルを危うく揺れ動いていく。それはときに、決定的に世界を変えてしまったようで、世界をおおっていたボールを引き剥がしてしまったようで、すでにラブコメではない、なにか別のものが浮かび上がってくるようで不安になるのですが、その読み心地がたまりません。

会社員 / 末永龍介

## 「寿エンパイア」せきやてつじ

- 前作「バンビ〜ノ！」から一転、寿司職人の世界が独特の世界観で描き出される。ハワイ生まれの主人公がシャリを天高く掲げれば、「エンジョイ！」の決め台詞とともに美しい寿司が現れる。女性に手を出しまくりの若旦那、これ以上ないほどに憎たらしい兄弟子、寿司を握れば稲妻がほとぼる師匠、個性豊かなキャラと演出が盛りだくさん。これが寿司の帝国である。

弁護士 / 三村量一

## 「この世界は不完全すぎる」左藤真通

- 面白い！！！！はぁ新しい！面白い！！めちゃくちゃ面白い！！なぜ主人公ハガがこんなおかしい行動を取っているのか、なぜこの世界で異常事態が起きているのかというネタバラシが1話であるのでまずは1話読んでみてください！

声優 / 富岡美沙子

- ゲームの世界に入り込む設定はありがちなのですが、本作は主人公の立ち位置が特殊で、とても斬新に感じました。ゲーム開発に携わった方なら、より楽しめると思います。理不尽な？ゲームを中から体感し、そこを打破していくのは新鮮で面白いです。

会社員 / 三浦佑樹

- もしゲームの世界からログアウトできなくなったら…という作品は多数ありますが、本作の主人公はデバッカー。何か特別な力を手に入れるわけでもなく、ただひたすらデバックをしながらなんとか生き延びようとする展開が熱い！

会社員 / 畑中瀬路奈

- ゲームの中に入るというのはよくある設定ですが、デバッカーに焦点を当てた漫画というのは珍しい。デバッグについて困難を切り抜けていく中で「えっ！？あ？なるほど？でもそういうバグあるよね？なるほどウマイ」と思わず呟きながら読んでいます。絵作りも好み。まだまだ1巻2巻とこれからですが今一番注目している漫画です。ちなみに「将棋指す獣」という将棋漫画が好きだったので終わってしまい、情報を探して原作者さんのTwitterに辿り着き、原作者ご本人が描かれている漫画ということで読み始めた漫画です。「将棋指す獣」も面白かったです！

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

## 「金剛寺さんは面倒臭い」とよ田みのる

- 圧倒的なマンガ的楽しさと、にじみ出る作者の善性が最高です。

漫画読み / サイトウマサトク

- 大・団・円 ! 完結した! もう笑っちゃうぐらいすっげえシンプルで強烈な人間讃歌を、これでもかというくらいテクニカルに描いておられたな。読むのにやたらカロリー使わされた気がするが、幸福を伝播させるには熱量が必要になるんだろう。心地よい疲労感と読後感と幸福感。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

## 「最果てのパラディン」奥橋睦、柳野かなた、輪くすさが

- 溢れすぎて流行りでもなくなった「異世界もの」の中でも圧倒的に面白いと思います。ていうか異世界ものと忘れてしまうくらい作り込まれたファンタジーです。欲しい王道と意外性のバランスがちょうど良くてずっと読んでいたくなります。

バーテンダー / 村井真也

## 「サターンリターン」鳥飼茜

- 掲載は週刊ビッグコミックスピリッツ。2020年秋発売の最新第4巻を機にストーリーが一気に展開し、俄然おもしろみが増してきた。いま最も続刊が気になるマンガだと思います。小説家の加治りつ子(本名は理津子)は、かつて親交があった中島淳が30歳を目前に自死したと知らされる。中島の求めに応じる形で彼をモデルにした小説を書いたことがある理津子は、当時を振り返り、「中島を殺したのは自分だ」と考える。そして担当編集者の小出とともにその足跡をたどるうち、縊死の前夜、彼が8人の女性に同時にプロポーズのメールを送信していたことを知る――。単行本の発売ごとに切れ切れに読んできたからかもしれないけれど、このマンガは1回読んだだけでは筋立てがずっと頭に入ってこない。だから、今回このコメントを書くために何回か通して読み直してみても再発見がいろいろあった。話をつかみあぐねる理由のひとつには、読み手(私)にとって、主人公理津子が1人の人格として像を結びにくいからことがある。つまり『キャラが立っていない』。そしてキャラが立っていないということが、理津子に得体の知れない現実味を与えている。だってそうですよね。実在の人間にはいろいろな側面、いろいろな断面があって、分かりやすい『キャラ』でその人すべてを語れるわけではない。誰かと長く付き合っても、ときに啞然とするような知らない一面をその人に見出すことはよくある。しかしながらマンガの登場人物は一般に『わかりやすい』ことが求められるので、多くは一人一人にくっきりとした性格付けがなされる。そういう操作や演出がなされないまま剥き出しに放り出された主人公だからこそ、通り一遍の理解では済まない引っかかりを読む者に残す。編集者の小出が担当する慧眼の有名女性作家が理津子を評してさりげなく言う「言葉が本体にひっついてないね。あれは、相手次第の水鏡だわ。」(3巻第18話)という一言に現れているように、どれがほんとうの理津子なのか、それとも『本当の』理津子などそもそもいなくてぽっかり開いた空洞なのか、そこが分からないので読み手は『分かった気になる』ことができない。そんな理津子の、マンガの登場人物としては異例のとりとめのなさは絵姿にも明らかだ。おどおど怯える表情、老成して達観したような表情、おぼこくてあか抜けな表情、大人びて鋭く「できる」女の表情、無心な子供のように邪気のない表情。魂の抜けたような無表情。一人の人間の内にあるたくさんの人格が、メイクで顔を変えるように唐突に不連続に現れるところは圧巻だ。これは余談ですが、ふだんほとんどマンガを読まない私の妻は、このコメントを書くために積んであった単行本4冊を深夜に読み始め、そのまま朝まで読み通してしまったそう。理由は「だってほっとけない絵だから」。読むのをやめるとなんとなく後ろ髪を引かれる思いがして居心地が悪いのだ。4巻で展開される地味な不動産屋勤めの女のエピソードが胸を打つ。なおプロポーズされた8人の女性のうち、4巻段階で複数が未登場。この後どんな展開をたどるのか、これを書いている時点ではまったく予測がつかない。今春発売という第5巻が待たれます。

会社員 / 天野賢一

## 「サチコと神ねこ様」Wako

- ノラ猫の神様・神ねこ様の可愛さに癒されたり、サチコの毒舌にスッキリしたり、不思議なことが起こる展開にドキドキワクワクしたり…そして神ねこ様に癒されてほっこりします。

主婦 / 紺野泉

## 「潮が舞い子が舞い」阿部共実

- 巻を重ねてクラス全員のキャラがはっきりするにつれ、群像劇の面白さがますます高まります。春、新しいクラスでいろいろごちなかった関係が、夏を迎えて徐々に打ち解けてきて、陽キャもオタクも、ギャルもヤンキーも、変人も変態も、がちがち生きていく。この学生生活がなんて愛しい！

会社員 / 末永龍介

## 「自転車屋さんの高橋くん」松虫あられ

- 1巻の映画館の話が好きです。テルちゃんがハンカチ貸してくれてる小さいコマとかも。高橋くんがアニメ好きって分かった時点でもう味方だーって、この人こちらの味方だーって勝手に親近感が爆発しました。2巻はとにかくたもつの話が…泣きました。あと表紙と帯の紙質が好きです。作品の雰囲気と合ってる。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- トキメキます。高橋くんが、格好可愛い。何か、忘れていたトキメキを凄く思い出します。ヤンキーにツナギ、最高！やや無口なのも良い。そして、ショータくんが、超絶可愛い。

書店員 / 桶谷佳代

- 高橋くんもパン子ちゃんも本当に人の気持ちのわかるいい子たちで、大好き！！変な誤解で2人がすれちがいまくるとか大きなアクシデントは組み込まれていないのに、ずっとドキドキして、うまくいってほしいと願って、思いのほか早くうまくいって、でもそれが早すぎ！とも思わず、ただただこのまま幸せでいてほしい、と願ってしまう。パン子ちゃんお手製のポテサラサンド、私も食べたい…。キミちゃん、テルちゃんとの友情もよいです。「違う環境の人同士が仲良くする漫画」のすごいのが次から次へと出てきている気がします。

ライター / 門倉紫麻

## 「SHY」実樹ぶきみ

- もはや一大ジャンルになった「ヒーローもの」の急先鋒。繊細で臆病ながらヒーローになってしまった「シャイ」こと照ちゃんが、各国のヒーローたちに背中を押されながら世界を襲う巨大な敵意と戦う物語です。全編通して「心」にフォーカスを当てたお話作りが、時にしんどく、それでも優しくとてもエモいです。弱々しい主人公が見ていく「心の強さ」の物語、今だから読んでほしい作品です。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

## 「シャドーハウス」ソウマトウ

- 顔が無い「シャドー」と顔の役割となる「生き人形」の「対」でキャラクターを見るという新感覚。そして、その設定のもとで少しずつ編み出され明かされていく謎、細部まで丁寧に描かれるゴシックな人物や世界に、気が付くと思ひ切り引きずり込まれている。どんどん読み進めたいくなるストーリー展開はもちろん、主人公たちの微笑ましいやり取りと、常に拭いきれない恐怖感との塩梅が絶妙。トーンをあまり使用せずに表現された明暗が、それぞれの魅力をさらに際立たせているように感じる。表情も背景も、一冊一冊が隅々まで見応え十分。映像化も目の今、先取りして間違いはない。

会社員 / 伊東敬祐



## 「シャングリラ・フロンティア ～クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす～」硬梨菜、不二涼介

- クソゲーを愛していた主人公が、王道の神ゲーに挑む様が、泥臭く、妙に作品の世界に引き込まれていってしまいます。クソゲーの世界でパーティを組んでいたトッププレイヤーたちが、誰もが知る神ゲーの世界で再度パーティを組み、難関クエストをクリアしていく姿も見どころです。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- 同名の小説（それも『小説家になろう』の投稿作）のコミカライズ作品。いまのマンガ業界では、続編に外伝などスピンオフ作品が当たり前になり、テレビ場組のコミカライズまでお気軽に行われてしまう。そして僕個人として、そういう作品は数ページ読んで飛ばしてしまうことが多い。どこか熱量に欠ける気がする作品が多いのだ。もっとも熱量を感じるコミカライズ作品もある。ストーリーは"クソゲー好き"な高校生が気まぐれで、VRの"神ゲー"に没入するところから始まる。原作の設定をばっちり活かした魅力的なキャラクターと躍動的で細密な画風、そしてマンガらしい物語の推進力が実に心地良い。情報量が多いのに、読み進めにくさを感じない。作中のほとんどがゲーム中の世界を描いていて、ゲーム内のキャラクター（アバター）のレベルとは関係なく、アバターを操作するプレイヤー自身が積んだ経験値でゲームの進行が変わっていくスリリングな展開は、古くは『トルネコの大冒険』『風来のシレン』といった"一発勝負"の名作ゲームに興じたことがある人ならわかるはず。原作ファンには賛否あると聞かすが、マンガから入った身としては素晴らしいコミカライズで、何より原作の細密な設定を、マンガとしてコマの中に見事に表現しきっていることに喝采を送りたい。

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

## 「16bitセンセーション私とみんなが作った美少女ゲーム」若木民喜、みつみ美里、甘露樹

- 主人公がちょうど同い年（1973年生まれ）で、1992年からのPC業界をシンクロして振り返ることのできるマンガなので、自分にドンピシャ！と読み込みました。その実、その後のPC業界・ソフト業界（アダルト込み）・WINDOWSの登場（実名でないのが残念）と、時代の移り変わりを感じることができる、もはや歴史漫画かも知れません。物心ついた頃からWINDOWSのあった若者にこそ、PCの黎明期を知ってほしいと思い、ここにに入れてみました。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

## 「Shrink ～精神科医ヨワイ～」七海仁、月子

- 身近な存在になりつつあるとはいえ、まだまだ心療内科というのは抵抗があるというのが正直なところだと思います。でも自分が、もしくは周りの親しい人が、いつ心の病を患うかわかりません。いざという時のためにどうしたらいいのか、そんな時の「御守り」になってくれる作品です。

Books アイ新田エキナカ店 / 野口忠義

## 「浄土るる短編集 地獄色」浄土るる

- 本当に地獄だなという作品集。「神の沈黙」を読んだ時の衝撃が忘れられないです。今までどんなに凄い作品に出会っても作者自身に興味湧く事はあまり無かったんですが、単行本ラストのイラストを見て作者へ想いを巡らせたのは初めての経験でした。救いがあるかと思ったら大間違い、でももっと読みたくなる、そんな中毒性がドギツイ作品。。。でもメチャクチャ面白かった！

バンドマン / ターシ

- 規格外、唯一無二の作家性。小学館新人コミック大賞で佳作をとった「鬼」に衝撃を受け、その後にスピリッツに掲載された「神の沈黙」に脳天を撃ち抜かれた私にとって待望の単行本。露悪的だとか救いがないとかいう感想も目にしますが、著者はただこうとしか描けないのだろうと思いますし、そうせざるを得ない心情に癒されます。

会社員 / 末永龍介

## 「少年のアビス」峰浪りょう

- 町、家族、友人、宿命。闇に堕ちた人間が行く先は絶望の淵。少年と関わった人たちの、心の闇の蓋が開いていく描写がとても深い。日々の我慢や犠牲、先の見えない失意の積み重ねが人を闇に落としてしまうんだと哀しくも共感してしまう。物語の鍵となる過去にはまだ謎が多く、これからが益々気になる作品。は一チャコかわいい。

デザイナー／シンガーソングライター／平松新

- 兎に角、話が暗いです。まったく幸せな人間がまだ誰もできません！ 田舎の闇とか人間の暗い部分のみをフューチャーしてる事にズンと重苦しさを感ぜさせられます。現代的な閉塞感を持った若者たちに悪い大人の存在がより一層胸くそ悪さ高めてくれます。

デザイナー／平沼寛史

## 「昭和天皇物語」能條純一、半藤一利、永福一成

- 原作があるとはいえ、タブー的な題材に挑む姿勢が何よりすごい。複雑で分かりづらい昭和時代ですがマンガにすることでイメージがつかみやすくなっているのは確かで、ネット社会となった現代と比較すると考えさせるものがあります。反面、どうやっても万人向けではないと思いますが、だからこそあえて勤めてみる一作です。

サブカル専門ライター／河村鳴紘

## 「シヨタくんとおじさん」tunral

- かわいくて泣けます。擬音が独特で面白いです。おじさんは見た目アレですが悪い人ではありません信じてください。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当／園田美智子

## 「新九郎、奔る！」ゆうきまさみ

- 応仁の乱前後から後の北条早雲・伊勢新九郎の生涯を辿る意欲的なテーマであり、ただでさえもやっていた室町期のあれこれを最新の歴史研究を参照に描き上げる歴史大作としての貫禄は十分

住職・ライター／蟬丸P

- 次の大河はこれだ！ 読者の多くが、そう確信しているはず！ しかし、このペースでいつ完結するのか？！ 史実沼にはまってしまうのか。それが歴史ものの不安なところですよ！ ゆうき先生お願いします！

教員／戸田穰

- 室町幕府の政所に仕える伊勢氏。それにつらなる伊勢新九郎は、のちに「最初の戦国大名」と呼ばれる北条早雲になる……。だがこのマンガでは、家督を相続したものの、父の失態のために無位無官のまま領国経営をしなければならぬ一介の青年に過ぎない。20年、いや、30年くらい前は北条早雲の小説といえば、司馬遼太郎の『箱根の坂』くらいしかなかった。それも『竜馬がゆく』『国盗り物語』などが複数回映像化がされているのに比べると、『箱根の坂』は渋い作品という扱いだった。マイナー感は否めなかった。それが今は伊東潤をはじめ数々の作品がある。一般向けの学術書も数多くある。今一番ホットな分野じゃなからうか。小田原攻めの時の小田原評定、北条氏政の湯漬の食べ方など、終わり悪けりゃすべてダメって感じで、いまいちパッとしない小田原北条氏だが、徳川家康の関東移封とその後の発展を考えると、彼らの領土経営は決して悪いものではなかったのではないかな。そんなことを考えながら読むと倍面白い。

鳥取県立図書館司書／野間勤

- 時代もの。また面白そうな時代の面白そうな主人公見つけて来たもんだねえ、と楽しみにしているうちに案の定面白くなってきやがったので推す。複数のグループ間で、それぞれの事情とそれぞれの思惑抱え込んでゴチャゴチャやってるの最高に面白いな。

ソフトウェアエンジニア／第式齋藤

## 「水曜日のトリップランチ」たじまこと

- 「どこでだれとごはんを食べるか」を大事にした作品です。コロナが収束したらこんなロケーションで好きな人とご飯をたべようとキラキラした気持ちになります。3巻で完結するのでサクッと読めるのもオススメの理由です。

会社員 / 伊藤千恵

## 「スインギンドラゴンタイガープギ」灰田高鴻

- ページを開いたそこにあったのはものすごい熱量だった。己の大切なものを、大切にしようとする想い。表現への渴望。人が持つ熱い部分が存分に出ているストーリーとなっている。その一方で人が持つ闇も含んだ時代背景が、この作品の味の一つになっていると感じる。国と国の対立や、人種。人々が集まると避けることのできない部分なのかもしれない。しかし音楽において、そのようなものは意味を失っていく。いい演奏、いい音はそういったものを飛び越えていくんだな、と思わせてくれる。登場人物の思いが交錯し、これからどのような物語を紡いでいくのか、また主人公の当初の目的はどのような形で達成されるのか。行く先を楽しみに見ていきたい。ユーモアに富んだ和訳も作品の彩りになっており、つつい読みながら表情が緩んでしまうところも素敵。

C smart ららぽーと EXPOCITY 元書店員 / 杉佳尚

## 「数字で遊ぼ。」絹田村子

- 数学と日常との融合の仕方が素敵です。

教師 / 持丸宏司

## 「スーサイドガール」中山敦支

- 中山先生にしか描けない可愛いヒロイン達、そしてドキドキするバトルシーン。キャラデザインの唯一無二さ。こんなにもポップに自殺を描いて、生きる希望を与えてくれる作品があったでしょうか。今こんな状況下だからこそ、この作品が必要な人が沢山いるような気がしています。

女優 / 齋藤明里

- 変身魔法少女モノのフォーマットに対する、強烈なアンチテーゼと見せかけた豪速ド直球でポジティブな物語です。「自殺」というセンシティブこの上ない題材を、人外の悪意による悲しい被害であると定義して、それをぶっ飛ばしていくという救済のお話。ともすればめっちゃくちゃ暗くなる世界観を、中山敦支先生ならではのパワフルなキャラクターが大声で叫びながら闘っていく様は圧巻です。あとやっぱり中山先生の女の子キャラが死ぬほど可愛い。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

## 「スーパーベイビー」丸顔めめ

- ピュア黒ギャルが小説家志望の地味系文学青年に恋する話。好きなものを好きと真っ直ぐ言えるギャルのたまおちゃんも、照れ屋さんながらも大切な人の為にはがんばる文学青年の楽丸くんも2人とも純粋にキラキラしていて眩しくなります。読む度ニヤニヤしちゃうような彼らをずっと応援したいです。

女優 / 齋藤明里

## 「スキップとローファー」高松美咲

- 昨年のランクインをきっかけに、追いかけて読んでいます。現実では殺伐としたことが多く、漫画もシビアな題材のものは読むのが辛くなってきた今日この頃、とてもほわほわと幸せな気分になれます。主人公はもちろん、周りのキャラクターが魅力的です。こんなに嫌いな人が出てこない漫画もめずらしい。ドラマとかになったらいいのになあと思います。

主婦 / 堀江千秋

- 劇的なことなど無かった学校生活を送ってきた身ですが、この漫画を読むと「もしかしてそれは、みつみがいなかったからでは?」「自分もこういう高校生活を送ってなかったっけ?」と思わせてくれる。日々のちょっとしたことを劇的と思うのが学校だったなど。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 物事の捉え方をみつみさんから勉強させていただいています。

マネージャー / 樋口健

- 去年も投票しましたが今年も。派手な事件はなくても引き込まれる、これぞ青春。悩んでぶつかって、誰かとつながりを感じたり、大切なものを見つけるための愛おしい時間。本当に悪意だけのキャラがないのもいい。懐かしくてまぶしい、あの頃を思い出します。

会社員 / 内野智未

## 「スケッチー」マキヒロチ

- マンネリとした日常を過ごす女性がスケボーと出会って、人生を広げてゆく話。いくつになっても、自分の世界が広がってゆくのはとても楽しい体験です。その楽しさを、都会的な人間関係と、おしゃれな空気感をまとわせて体験させてくれる漫画です。日々の生活に閉塞感を感じている人、新しい生活をはじめたい人におすすめの漫画です。

システムエンジニア / 廣瀬公将

## 「スケベの青春」畠たかし

- 表紙とタイトルの古臭くさが気になって読んだのですが、いやあ、スケベでした。スケベを公言している三田村は、エロ話が苦手な清纯派？早見が人前で絶対脱がないことに気づき、気になりすぎて出来心でコラ写真を作ってしまう。そして、それが本人にばれるも…？なところから始まるラブコメ BL。コメディ要素満載だけど、しっかり恋愛漫画です。少女漫画生まれちょいエロ漫画育ち BL かじりの皆さん、多分ツボです。性春、好きでしょ？？？とありあえず、スケベって言葉いいですね。

主婦 / 赤坂真実

## 「スタンド UP スタート」福田秀

- 起業する内容については、参考にしたであろうビジネスモデルの話を日経の記事などで探せばすぐに出てきそうなくらい分かりやすいが、それがメインではなく、一度の失敗で全てが終わる日本の社会で、失敗してもやり直せば良い、というテーマが説教臭くなく語られる、今の時代という感じのする漫画です。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

## 「刷ったもんだ！」染谷みのる

- 印刷業界を描いた「業界モノ」ですが、同人誌や同人グッズなど漫画好きにも馴染みのあるモノも沢山出てくるので、親しみやすい作品かと思います！また、私自身がそうなのですが、印刷会社に依頼をする立場の職に就いている人も「アレってそんな風に作ってたんだ！」と楽しめるかと思います。

会社員 / 畑中瀬路奈

## 「すみれ先生は料理したくない」大久保ヒロミ

- 何も考えずに笑いたいときは、大久保ヒロミさんのマンガを読むに限ります。料理ができない人間が思っていることを、笑いに変えてくれてありがとうございます！料理が好きな人や得意な人から見たら「失笑」なのかもしれませんが、わたしは共感の嵐でした。料理がまったく出来ないピアノ教師のすみれ先生が、料理に失敗するたびに作って歌う「料理嫌い協奏曲」が最高です。2020年、声を出して笑ってしまうマンガ No.1 でした。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

## 「世界は終わっても生きるって楽しい」鳥取砂丘

- 厳しいけどあたたかい雰囲気うるっと来ます。楽しんで読んで癒される＆泣かされる。明日も生きようと思える作品。

図書館員 / 金田健太郎

## 「セクシー田中さん」 芦原妃名子

- 表紙を見たときの第一印象でセクシーな田中さんがショムニ的にバッサバッサと爽快にお仕事をする漫画なのかな、と勝手に思っていました。まさかのベリーダンス!!! めっちゃ面白い!!! 田中さんはコンプレックスがあって不器用ながらも節約家でちょっと乙女で、素敵な女性でした。主人公の朱里ちゃんがファンになる感じが可愛い。私もベリーダンスやってみたくなりました(ちょろい) 一癖も二癖もあるキャラクターがリアルに痛いところを突いてきたり考えさせられることも多くて。でも人間臭くてつい笑ってしまうことも多い。「曲がった背筋を何度でも伸ばそうと思ったの」という言葉。何歳でも、誰に何と思われようと背筋を伸ばして良いんですよね。芦原先生は不穏な空気を作るのが上手な作家さんで大好きなのですが、田中さんも朱里ちゃんも自分の居場所を作れるといいと思います。ちょうどダンスレッスンをサボった日にこの漫画を読んだもので死ぬ程刺さりました。私も背筋頑張ります。

会社員 / 佐々木つむぎ

## 「戦争は女の顔をしていない」小梅いれと、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ、速水螺旋人

- ノーベル文学賞作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチの同名の書籍の漫画化。ソ連の(特にドイツ戦で)戦っていた女性たちの姿をオムニバス形式で描く。「敵と言ったって人間だわ」「ベニヤの標的は打ったけど」。18歳の少女狙撃兵が初めてドイツ兵を撃つ時の心理描写は、その絵とともに忘れられません。生理の血を洗い流すため、爆撃の中で河に入り死んだ少女たち。ここで思い知るの、戦争という人の営みに反するものがいかに悲惨であるのか、という普遍的な真理です。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

- 本作で描かれる戦争の姿は、われわれ日本人が一般に見聞きしてきた戦争のありかたとはずいぶん違う。背景知識なしに本作を読むとおそらく面食らうことが多いだろう。しかし、第二次世界大戦の独ソ戦において、当時まだ若い共産主義国家であるソ連がドイツにギリギリまで追い込まれ多大な被害を出した後に劣勢を覆し反攻していく過程、言うならば「勝ち戦」から生還した女性たちの経験を多く描いたものが本作だという大つかみでの知識があったとしても、その視点からのみ消費しきれものでもない。監修の速水螺旋人さんがブログ記事で個人的補遺として「台詞はただの台詞ではない。元兵士たち、あの戦争、あの時代、あの国について我々がなにを知っているのか。この本は理解するためのものではありません。理解していないことを知るための本です。」と述べられている通り、思索を伴うことで読み取ることのできる余白、奥行きはとても広い。そしてさらに2巻では…。その意味においてコミック化されたことが極めて貴重な作品。

会社員 / やのこうじ

- 第二次世界大戦中の旧ソ連軍の退役女性兵士の実録インタビューをまとめたものが原作。インタビューの喋り口調が原作そのままにネームが作られているようで所々不思議な読み心地。若干の読みにくさを感じなくもないが、それを加味しても是非読んで欲しい。女性が男性と同じように戦地に赴き戦うということで、男女の性差を見せつけられて衝撃を受けました。自分が僅かに知っていた戦争というものの知見がひっくり返って、色々なことを考えさせられる作品です。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 第二次世界大戦のソ連女性従軍者へのインタビューのマンガ化。よくこれをマンガにしようと思ったな…。正気ではない。なにぶん元々が世界大戦という無貌の怪物の渦中に放り込まれた一女性の叙述なので何もかもが唐突で鮮烈で強烈で異常で過剰で、混乱の極致にある。読むと鉄柱で頭をぶん殴られるようなエピソードが続く。それが、そんなものですら、絵物語として、マンガとして、滔々と読めてしまうということ。それを許すマンガつつうジャンルの熟成度、この国の文化状況もすごいと思う。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 難しく、重いコミカライズをキチンとやってくださっている感に脱帽。原作ともども、自分も襟を正して読まねばと思わされる作品。

図書館員 / 金田健太郎

## 「千年狐 ～千宝「捜神記」より～」張六郎

- 毎年コツコツ投票しているのですが、ランクインさえしないことがとても謎です。人ならざる者たちがメインの物語ですが、彼らの目を通すことによって、人間や歴史を客観的に見られます。醜いところも多いけど、そればかりではないし、ある程度は鈍感に、タフに生きていかないといけないよね、ということを広天たちから教えられている気がします。最初から一貫して、シリアスにもコメディにもなりすぎないバランスのよさが好きです。

主婦 / 堀江千秋

## 「その着せ替え人形は恋をする」福田晋一

- 日本が誇るオタク文化の一つコスプレについて描かれている作品ですが、ただコスプレ衣装を作るだけではなく悩みが付きにくい思春期の苦悩や葛藤もしっかり表現されており、共感できる部分がたくさんあります。

元書店員 / 八重田幸子

## 「宙に参る」肋骨凹介

- 夢物語ではない、現実味すら漂う SF 作品。本当に好きな物を純度高く描いているんだらうなという感じがピシバシ伝わってくる。少々難解で何度も読み直したくなるような、良い意味で不親切な感じもまた魅力的。日常生活への科学技術の溶け込み方など、世界観の作り込みにはほんと脱帽で、案外未来ってこんな感じなのかも？なんて思っ

てワクワクします。

会社員 / 小野塚博之

- 「年刊日本 SF 傑作選」に収録されるような味わい深い SF 作品がコミックで読める！ということに満足しています。ストーリーについて述べるのが面白さにつながるわけではないのが SF でもありますし。

会社員 / やのこうじ

- 未来における人々の営みを大上段に構えず淡々と描く点では『第三惑星用心棒』とも通じるものがある。こういう SF としてしっかりした作品が漫画メディアで出てくるのは双方のファン冥利に尽きる。

レビュアー / 縣丈弘

- 夫の遺骨を義母に届けに行くところから始まる物語。どんなに近代化が進行して人々の生活スケールが大きくなるうとも変わらない日常と習慣を感じられる作品です。今手に取ってほしい SF 作品の一つです。

会社員 / 伊藤千恵

## 「ダーウィン事変」うめざわしゅん

- チンパンジーと人間の間生まれたチャーリー。彼はヒューマンジーと呼ばれる存在。人間でもチンパンジーでもない彼は社会の中でどういった扱いを受けるのか？ 見たところとても冷静に飄々と生きている。だが彼の存在は人間社会が抱える欺瞞を炙り出してくれる。彼が放った「人間だけを特別にする理由があるの？」というセリフは痛烈だ。自分の存在を客観的に見て、謙虚さを忘れないためにも読み続けたい作品だ。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- 人間とチンパンジーの間に生まれた「ヒューマンジーのチャーリー」物語は、動物保護団体のテロや『人間は他の生物と何が違うのか』を考えさせられる海外ドラマのような臨場感で進む。とにかくチャーリーが発する言葉が格好良い！チャーリー語録がラインスタンプになったら欲しいな、と思われました。

鍼灸師（漫画家専門・兼美容鍼灸師） / 碓氷麻里子

## 「ダーリンは74歳」西原理恵子

- 高須クリニックの高須院長と、漫画家西原理恵子の恋愛！？物語。実際の二人の日々を綴ったエッセイマンガなのだが、愛にあふれててハッピーになる。70代と50代のカップルという大先輩の恋愛を見せられると、人はいくつになっても「愛」を持ち続けられるんだ…というような嬉しさを感じる一方で、破天荒だと思っていた西原先生を超える破天荒な高須院長の生き方がとても面白い。都市伝説でしかお目にかからないフリーメイソンの偉いポジションだったり、九兵衛の寿司をお茶漬けで食べたり。「こんな人いるんだ!？」という偉人伝を読んでいるようなエピソードも満載でただただ愉快地読める。西原さんの過去作にちょっとだけ出ていた高須院長がいまや主人公とは！しばらく作品を読んでなかった人にもぜひおすすめしたい。

会社員 / 西尾美里

## 「第三惑星用心棒」野村亮馬

- 遠未来の地球を舞台にしたポスト・サイバーパンク漫画。士郎正宗の正嫡といってもけして褒めすぎではないだろう。

レビュアー / 縣丈弘

## 「大ダーク」林田球

- 装丁がまずめちゃめっちゃかっこいい。電子書籍での所有はもったいない。ドロヘドロと同じように独特なキャラクターやマスクデザインであるものの、中身はまた全然違う作品。それが大ダーク！中でも主人公が小学生の頃のエピソードも入っているのですがかわいい面白いで最高。死ま田=デスがかawaii。嫌われ者だけどポジティブでかawaii。どんな時に読んでもなんだか心に平穏をもたらしてくれる作品。2020年はコロナ禍で暗い気持ちになることもあったけど、この作品で明るい気持ちになれたのが良かった。

会社員 / 西尾美里

- ドロヘドロで林田ワールドファンだから大ダーク、あいも変わらず的林田ワールド全開でドロヘドロ好きな人しか受け入れてもらえないかもです

tetote 代表 / 力丸真

## 「高丘親王航海記」澁澤龍彦、近藤ようこ

- 30年ほど前に読んだ、澁澤龍彦さんによる原作の摩訶不思議な、しかし魅力のある小説がなんと漫画化されたと聞き、早速読んだら、もうあの雰囲気のままびっくり！高丘親王は、平城天皇の皇子で一時は皇太子でしたが、出家して67歳で唐にわたり、一説ではマレーシアあたりで虎に殺された、とされています。割とぶっ飛んだ方のようにでしたが、その方の大冒険がマンガで広がるのはちょっと嬉しいです。あの澁澤ワールドをぜひご堪能下さい。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

## 「ダブル」野田彩子

- コミックのジャケットの躍動感に惹かれて購入してみたが、登場人物の男性向け2人の距離感が近すぎてBLなのか！？と思ったがどうも違う。劇団員の2人の話だが、ストーリーが展開されるに従い、タイトルの「ダブル」の意味が理解できたように思える。個性的な登場人物のセリフは漫画からでも熱量が伝わってくる所に引き込まれた。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 友情と才能と嫉妬。簡単には語れない感情が、二人の役者を通して丁寧に描かれていて苦しくなります。どの世界にも、光に当てられる人と、その影にいる人がいる。この先彼らはどうなっていくのか、とても楽しみな作品です。

女優 / 齋藤明里

- とにかく色気がすごい。多家良と友仁が色っぽい人物だから、というだけではなくて、ストーリーの流れやセリフまわし、そこから撮るんですね（最高）という構図、表情、筆づかい……と、作品全体でバンバン色気を発している。大好きな「天才もの」「芸能もの」を大好きな野田さんの作品で読めるという幸せをかみしめている。

ライター / 門倉紫麻

## 「ダンピアのおいしい冒険」トマトスープ

- まるで絵本のような絵柄の可愛さとキャラの魅力で歴史が苦手な自分でもすいすいと読めちゃいます。航海中の人間ドラマとしてはもちろん、サバイバルグルメ漫画としての側面もあって1粒で2度美味しい作品。そして圧巻なのが巻末に掲載されている参考文献の量！めちゃくちゃ研究して描いてるんだろーなというのが一目で分かって信頼感がすごいです。

会社員 / 小野塚博之

- 『最新世界周航記』をベースにマンガを描く人が現れるとは…。加えて様々な資料・史料を用いて（巻末にしっかり参考文献として挙げられている）多面的に補い、腕・節と度胸と賢さそして幸運がなければ自由な立ち回りができなかつたであろう時代の希有なマルチタレントを、胸躍る冒険のドキドキ感を伝えるためか、はたまた時代が内包する血腥さを中和するためか、どこか懐かしい筆致で描くすごい作品です。

会社員 / やのこうじ

- 17世紀。英国の私掠船に乗った博物学者ウィリアム・ダンピアの航海記をベースにした創作などと通常の出版社では取り合わない題材が見事にブレイク。絵柄や話の確かさに加えて SNS 時代のマンガ発掘を象徴する快作

住職・ライター / 鱒丸P

- なんだかこのしあわせな読書体験、どこかで・・・と既視感を覚えて、はたと気付きました。あ、あれだ、小学校の頃、夢中になって読んだ、「マンガで読む歴史シリーズ」のめっちゃ凄いやつな感じだ！（語彙力）17世紀に実在した探検家ウィリアム・ダンピアの冒険を描いた、このとんでもなくワクワクするお話は、ダンピアとともに世界に対する好奇心が満たされていく気持ちよさを体験しながら、海洋冒険ものとしてのさまざまな出会いと別れを含んだスペクタクルが、すっきりとデフォルメされてても、ものすっごくうまい絵（やっぱり語彙力）で描かれる、僕にとって2020年いちばんの出会いマンガでした。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 17世紀のイギリスの私掠船に載っていた博物学者の物語？！ テーマ超しびれる！！17世紀のヨーロッパで出版されていた航海記が、2021年の日本でマンガ化されてるって、ロマンがありすぎじゃないですか！ まったく知るよしもない生物の生態から、土地の風土、気候、船乗りや原住民たちの考え方までが飽きる暇無く繰り出され、超贅沢な海外旅行を楽しませてもらっているよう。なかでも、「おいしい冒険」とあるように、アホウドリからコバンザメ、ココナッツからウミガメ、果ては餓死寸前の航海中に船乗りが食べざるを得なかった虫の湧いたビスケットまで何でも食べて見せてくれるのが眼目の一つ。で、これだけの様々な要素のベースにあるのが、どこまでも軽やかで重くならない可愛い絵柄とそれを貫く思想。怪我で現地の村に取り残されることになった仲間に対して、「へえ！いいなあ！」と言うダンピア、すげーよ…！！ 作者さんは他のお仕事をされている一方でこの作品を描いていらっしゃるみたいですが、1巻から2巻にかけて物語の大きさがまたわかりはじめて、明らかに面白くなっているので、このままずっと丁寧にマンガ化しつつけてほしいです！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

## 「腸よ鼻よ」島袋全優

- 自らの実体験を面白おかしく漫画にしており、出てくるキャラクターも濃くとても面白い。腸に優しいレシピなども紹介していて勉強になる。あと作者がイケメン。体に気を付けて頑張してほしい。

自営業 / 川崎綾子



## 「妻が口をきいてくれません」野原広子

- 野原広子さんの作品を去年はたくさん読みました。少し偏った女性を描くので、シャクに触ると感じる人もいるかもしれないが、この作品は老若男女いろんな人に読んでもらって感想が聞きたいと思った。結婚って本当に難しい...

bar 図書店主 / 岡部愛

## 「底辺チューバーが宇宙戦争を撮ってみた」バナイー、渡辺恒造

- 突き抜ける承認欲求と繰り広げられる宇宙戦争豊富なアクションシーンは痛快！ジャンプの勇気・努力・根性の要素がしっかり感じられてスカッと読めます。

会社員 / 伊藤千恵

## 「デッドマウント・デスプレイ」成田良悟、藤本新太

- いわゆる転生モノですが、異世界のリッチ的な存在が、こちら側に転生したという、通常とは違う転生モノです。テンポも良く、ストーリーの中でいろんな伏線も生まれており、毎話楽しめる作品。

広告会社 プランナー / 平沼良章

## 「天国大魔境」石黒正数

- 巻が進むにつれて謎な部分が少しずつ解けていくのですが、一方で別の謎も出てくるので続きがすごく気になる作品です。新しい巻が出るたび前の巻も読み直してるときの気が……。完結したとき絶対にもう一度通して読み直すだろう作品です。

会社員 / 林礼春

- 2019年「このマンガがすごい！」で、1巻しか出ていないにも関わらずオトコ編1位になりましたが、多くの人に手に取ってほしい読み時は「今」ではないでしょうか。初期に張り巡らされた伏線が回収されつつ、あらたに生まれる謎にページを捲る手が止まらない。荒廃した世界にふさわしい、ドライな筆致にも痺れます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- だいき。大傑作を約束された作品だと思ってます。すきすぎて語彙力がなくなるくらいはやばSF。完結まで走りきってほしい。

株式会社プロプラス 商品部 / 池本美和

- AKIRAへのオマージュということだが、謎が解けたり謎が謎をよぶストーリーにはまってしまう。

自営業 / 小野裕子

- 謎だらけの2つの世界が、巻を重ねるごとに徐々に近づいてきて、少しずつベールがめくられていくような感覚。シンプルで可愛らしさもある絵柄と、その分残酷さが浮き彫りになる石黒作品。早く続きが読みたい！

会社員 / 内野智未

## 「天地創造デザイン部」蛇蔵、鈴木ツタ、たら子

- アニメ化されたことにより、語りのテンポの良さが一層明らかに！進化という自然の見えざるデザインに対する帰納的推論の楽しさを、製品デザインとその具体化というプロダクトマネジメントの過程になぞらえて語る本作は、子どもが読んでも大人が読んでも知的な興奮をかき立てられます。

会社員 / やのこうじ

## 「天帝少年 中村朝短編集」中村朝

- 中村朝が主に同人誌で発表した読切の掌編集。旧家で起きた集団死と「オカイコ様」の伝説。すべての物を喰らいつくすトウテツの子。安アパートに現れたちんちくりんな座敷童。等々どれも設定に意外性がある上に、展開が予想を超えてくる。常に「誰も読んだことのない物語」を作ろうとしているのだろう。そんな滾る創作熱に惹きつけられてやまない。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

## 「東京入星管理局」窓口基

- 超絶画力に奇想天外なイマジネーション、それにカッコイイ美少女バディが組み合わさってとんでもないマンガになってます！ 藤子不二雄 A 先生ばりのすこしふしぎも、エグめの『メン・イン・ブラック』も全部乗った、SF 好きなら今読んでおくべき傑作です！

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

## 「峠鬼」鶴淵けんじ

- 古代倭国を舞台に描かれるファンタジー漫画。残酷さと可愛らしさが同居する神々がとても魅力的。

会社員 / 津田圭

- これも「鬼」ものか……と何の気なしに読み始めたら、例の超ヒット作とは趣が違ふものの、これはこれで掘り出し物。「古代倭国ファンタジー」にしてはキャラの言動が現代的なので、最初ちょっと戸惑うでしょうが、だまされたと思って2巻の最後まで読んでみてください。おおっと驚き、最初から読み返したくなること請け合いです。主人公は陰陽道の祖・役小角。小角と言えばおなじみ前鬼・後鬼ですが、後鬼が人間の少女というのはかなり意外だし、前鬼の少年キャラも大変好感持てる。倭国の神々のデザインも凝っていて、まさに「ハルタ」っぽい濃密な世界観を味わえます。SFではないのに、「ああ、アレか！」とSFオタクの琴線に触れるところが随所にある。まだそれほど話題になっていないのが不思議なくらい。今からツバつけておくのが吉です。

読売新聞文化部 編集委員 / 石田汗太

## 「童貞絶滅列島」川崎順平

- 斬新すぎる設定でいろいろな意味で今後が気になる。こちら面白いがこの作者はエッセイ漫画の方が面白いと定評がある。今後も両面で頑張ってほしい。

自営業 / 川崎綾子

## 「東独にいた」宮下暁

- 「ヤングマガジンサード」での連載。毎号毎号、見たこともないような意欲的な演出に取り組んでくださっていて心から読むのが楽しく、また嬉しくなる。

往来堂書店・コミック担当 / 三木雄太

## 「図書館の大魔術師」泉光

- 作品の原作者が作中人物で登場している仕掛けが面白く感じている。それぞれのキャラクターの関わりや展開が楽しみな作品。

自営業 / 小野裕子

## 「DOG SIGNAL」みやうち沙矢

- 犬に対する接し方についてとても勉強になる。作中の犬の表情が豊かに描かれていて作者の犬への愛が溢れている作品。これから犬を飼うがいたらこの漫画をおすすめしたい。

自営業 / 川崎綾子

## 「友達として大好き」ゆうち巳くみ

- ギャルと生徒会長が「友達」になることを目指す『可愛くて真剣な友情譚』。青春のきらめきがまぶしくて、思わず泣いてしまいました。掲載誌で1話目を読んだときは、主人公のサナコのこと、この作品のこともこんなに好きになるとは思っていませんでした。どこか投げやりで自分を粗末に扱っているサナコに、どちらかといえばイラっとしたぐらい。でもそれは違いました。サナコは自分を粗末にしていたのではなく、自分のことも他人のこともどう大切にすればいいのかわからなかっただけ。ゆい君や同級生たちと接していくうちに徐々にその方法を知っていくサナコのごとがどんどん愛しくなっていきます。1巻の終わりではまだサナコの味方が少ないのですが、2巻に収録されるお話ではサナコの世界がぐっと広がるので、どうしてもそこまで読んでほしいです！

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

## 「とよ田みのる短編集 2 イマジン」とよ田みのる

- 想像力することの素晴らしさ、無限の可能性に気が付かせてくれる漫画です。それだけでなく、強い意志、優しさを持つことの大切さをおしえてくれます。どんな状況でも、心次第で世界は変えられることを教えてくれる漫画だと思えます。現実負けそうになっている人におすすめの漫画です。

システムエンジニア / 廣瀬公将

## 「ドラフトキング」クロマツテツロウ

- 夢がある。現実がある。そこにドラフトがある。リアルの野球を観る目が確実に変わる、「野球人間ドラマ」！

㈱リプロプラス 商品部 / 池本美和

## 「とんがり帽子のアトリエ」白浜鷗

- 世界観がとっても素敵。知恵と工夫によって魔法陣の使い方の幅がグンと広がるところが好きです。

教師 / 持丸宏司

- 魔法がある世界を素直に楽しめる。登場人物それぞれのストーリーが丁寧に描かれている作品。

自営業 / 小野裕子

## 「風のお暇」コナリミサト

- もう面白さが知れ渡っている漫画ではあるけれど、やはりオススメしたい作品人の何気ない言葉って、何年も何年も刺さっているもんなんだよなあ…ほんと最新刊では、母親側の心情も見れて新しい展開が。

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- また、ドキドキの展開になってきましたね。しつこいですが、私は慎二さんを応援しています。

書店員 / 桶谷佳代

## 「夏目アラタの結婚」乃木坂太郎

- 少し不真面目な公務員の夏目アラタが、連続殺人犯の女性と繰り広げる心理戦・頭脳戦にゾクゾクします。獄中からでも手紙一つで、これだけ人の心を揺さぶれるという発想がすごいといえますか……。法廷の戦いも見どころで、裁判官も切れています。どう着地するのか楽しみです。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

## 「波よ聞いてくれ」沙村広明

- ヒロイン・鼓田ミナレの生き様のカッコよさ、出てくる言葉の面白さ、火事場のクソ力。まさに「破天荒」を絵に描いたような、嵐を呼ぶ女。なかなかこんなに面白いヒロインには出会えないので今年も一票で。

会社員 / 林礼春

- 2011年3月11日の午後2時46分ごろに始まった、三陸沖の太平洋を震源にした激しい揺れは東北にとどまらず、西は関東から中部へといたり、北は北海道にも届いて東日本の広い範囲に甚大な被害をもたらした。東日本大震災と名付けられたその地震によって、東北を中心とした太平洋沿岸には津波が押し寄せ、その映像はテレビで生中継されて見る人に深い絶望を与えた。現場で今まさに巨大な波にのまれようとしている人たちからすれば、テレビ越しの絶望感など取るに足らないものであったことは当然だ。そういう人たちにとってリアルタイムで状況を目の当たりにできるテレビの映像が、停電や破壊などを免れて映ってさえいれば大いに助けになったことも想像に難くない。テレビが果たす役割は決して小さくない。一方で、強いインパクトを直接、映像によって伝えてしまう面もテレビは持っている。直接の被害は免がれ、ひとまず落ち着き先を見つけた人にとって、そうしたテレビによる直接的な災害の姿は、さらなる恐怖を煽り不安にさせる働きもあった。だったら文字だけのネットはどうか。個人の感想がダイレクトに発信されては受信されるネットでは、不安ばかりが増幅されかねない。そんな時、ラ

ラジオだったらどういった放送が出来たでしょうか。そして、どういった働きをしたらでしょうか。2011年3月にラジオをほとんど聞いていなかった人間にとって、今に至る関心事だったりする。そのことを、少しなりとも教えてくれるような場面が、沙村広明による漫画「波よ聞いてくれ」のシリーズ最新刊となる「波よ聞いてくれ 8」（講談社、660円）に登場する。北海道を未明に襲った大きな地震は、津波こそなかったものの山崩れなどを発生させ、大きな被害をもたらした。家財もめっちゃくちゃになった上に、停電で真っ暗な中に放り出された人たちに向けて、藻岩山ラジオ局（MRS）で深夜というよりもはや早朝に近い時間に、時分の番組を持ってパーソナリティを務める鼓田ミナレは不安なリスナーを鼓舞し、困った事態を解消するためのアイデアを集めて発信して、最初の夜を乗り切らせる。ミナレに限らずラジオのリスナーたちは、声でリスナーに語り掛けては適切な適切な情報を発信しつつ不安を除き、落ち着いた時間へと戻ってけるように誘導する。ショッキングな映像に寄りがちなテレビではなく、強い言葉が増幅されがちなネットでもない、意思と心意気によって選んだ言葉を発信していけるラジオならではの役割が、感じられるエピソードになっていた。もともとは、札幌にあるスープカレー屋で働いていた20代の鼓田ミナレが、愚痴のように喋った50万円もの金を持ち逃げした男への罵倒の言葉を録音され、ラジオで流されたことから始まったラジオ局との付き合いが、ミナレをパーソナリティへと引っ張って、そのまま時分の番組を持つまでに至らせる。ズブの素人が意外な才能を認められ、駆け上がっていくシンデレラストoryとも言えるものの、一気呵成のサクセスにはならないところが現代的。担当する番組も、自分を裏切った男を女が殺害する様子を、まったく事前に説明を入れないでミナレが実況風に喋る内容で、破天荒さにあふれている。そうした無茶を承知で引き受けては、突破していくミナレの生きざまを面白がれる作品であり、またラジオという媒体が持つ特徴や、置かれた環境をストーリーに乗せて開設してくれるお仕事漫画でもある。第5巻と第6巻に入っている、波の智慧派という宗教法人が登場するエピソードでは、ラジオを含めた放送メディアが直面している課題も指摘される。テレビにはかなわず、ネットにも推される中で宙ぶらりんなメディア。そんなラジオが持つ意味を、第7巻の終わりで発生した、北海道を襲った大地震を受けて改めて感じさせてくれた第8巻を経て、物語はどこへと向かうのか。バレンタインデーの特別番組に抜擢されそうなミナレはスター海道を歩むのか。兄の過保護からようやく抜け出した城華マキエは、放送作家として独り立ちしていけるのか。興味がつきない。2020年にテレビアニメ化されて、杉山里穂が演じるミナレが腹の底から出るような強い声で、どこまでもパワフルな鼓田ミナレというキャラクターに命を吹き込んだ。その声が、放送されたエピソードの中ではまだ描かれなかった、未曾有の震災でも決して慌てず、かといって煽らず日常と非日常の境目を感じさせない喋りでリスナーを引っ張った場面で、ミナレをどう演じるかを是非に見たい。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 例えすでにアニメ化していたとしても。前回も前々回も投票していたとしても。まだ9巻が出ていないんだったら投票するしかない漫画というものがあまして。それが「波よ聞いてくれ」です。巻を重ねるごとにどんどんキレッキレになっていくので、次巻を楽しみにし続けられます。これってすごいことだと思います。読者を漫画に引きずり込むような引力。読んでいるのに読まされているような感覚にすらなります。この漫画特有のタイム感に依るものと思いますが、とても心地よいです。魅力については、すでに語り尽くされているのではないかと思います。それでも言わせていただくならば。「とにかく面白いので是非読んでね！」

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

## 「忍者と極道」近藤信輔

- カルトとカルトの殲滅戦を独特のセリフ回しでロマンティックに描く。まあこれはみんな好きになるわなあという作品。

レビュアー / 縣丈弘

## 「猫奥」山村東

- 吉野さん（猫）可愛いし、お話はずいぶん笑います。滝山さん、怖くさせているつもりはないけれど、凄く残念ですが、怖い。（笑）。滝山さんの気付いていないところで時々報われているのが嬉しくなります。

書店員 / 桶谷佳代

## 「猫が西向きゃ」漆原友紀

- 異常現象処理の専門家は『蟲師』に通じるが、日常の軽さを加えた演出もまた素晴らしい。実力派の技量とセンスを手頃に味わえる良作。

ライター / 福井健太

## 「信長を殺した男」藤堂裕、明智憲三郎

- 明智光秀の言い分を中心に据えた設定は野心的であり、ある意味「狙った」と思われがちですが、一方で原作者の伝えたい！という魂を感じる一作でもあります。歴史ものゆえ、先が分かっているのに、先が気になるのです。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

## 「ノラと雑草」真造圭伍

- かつて海水浴での事故で娘を失い、家庭崩壊を経験した刑事・山田が、JKビジネスの摘発で補導した家出少女・海野詩織の境遇を見かねて自宅にかくまう。ノラネコのように荒んでいた詩織とも何とか打ち解け、世代や境遇の違いを超えた共感が生まれる。だがささやかな生活は長くは続かず…というストーリー。モーニングtwoでの連載は昨秋終了し、単行本最終第4巻も発売済みということで、推せるのは今回が最後。このマンガの切実さができるだけ多くの方に伝わればと願います。きょう食べるものがない、今夜を明かす場所がない、そもそも頼る大人が一人もいない、という子供の貧困（詩織が時折見せる暗い目の描写がすごい）に直面した時、自分ならどのように対応するのか。児童相談所などの公共の福祉が意味をなさない案件だと知りつつ、見て見ぬふりをするのが大人なのか。読みながらそんなことを考えずにはおれない現実味がこのマンガにはあります。「オレはどうしたいんだ」という山田の煩悶は、そのまま本作品の読者への問いかけとなる。手を差し伸べたところで先は見えている、どうしようもない、そう考えて目をつぶるのは保身でしかないのではないのか、という。山田は亡き娘への贖罪だけでなく、自身の信念からも「常識」から踏み出し、「世間体」を振り切り、ただの一人の人間としてなすべきことに踏み込む。その選択は社会的には破滅への道でしかない。しかしながら第4巻で約80ページにわたって描かれる先のない逃避行の只中、終わりを悟っている2人が手に入れる束の間の幸せの何とおいしきこと。助手席で詩織が言う「今めっちゃ楽しーし私」「家族で旅行とか行った事ないから」という言葉は、実母による虐待、神待ちに現れるパワハラ男、連続殺人鬼の執拗な付きまといなど、周囲の酷い大人たちにひどく傷つけられてきた詩織が、人間らしい家族（疑似ではあるが）の温かさを知った証だ。ハッピーエンドにはならなかったとしても、山田が罪に問われたとしても、それは無駄でも無意味でもない。世の中は物事を表面的にしか見ないし、興味本位でしかとらえない。本作はそんな世間の冷たさと無責任さ、格差社会がもたらす不幸の連鎖に起因する救いのない状況を容赦なく（本当に容赦なく）描くが、それゆえに一縷の希望を見いだすラストシーンが強い印象を残す。

会社員 / 天野賢一

## 「BURN THE WITCH」久保帯人

- 魔女とドラゴン！1巻目なのにもう3巻くらい読んだ感じのストーリーの厚さ！次が楽しみなマンガです。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

## 「ハヴ・ア・グレイト・サンデー」オノ・ナツメ

- ずっと続くと思っていた「休日」が終わってしまった。コロナの時代になかなかできなくなってしまった「休日の過ごし方」の手本のような作品

あゆみ BOOKS 杉並店 店長 / 土屋修一

## 「破壊神マグちゃん」上木敬

- 邪神やら魔王やらが人間世界で落ちぶれる話は、ペース溢れすぎてるのが多くてあまり好きじゃない。けどマグちゃんは可愛いので許す。なんなら破滅使徒血盟の書にサインしてもいい。ナプタくんはヤドカリがいるからオッケー。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

## 「バクちゃん」増村十七

- 東京って良い街？日本て良い国？何気ない日常の楽しさに触れつつ、マスコットのように可愛らしい『バクちゃん』を通して、移民問題や人種差別、ダイバーシティを賛美しながらも不寛容な現代日本の実情が見えてくる。堅苦しく攻め立てる訳でも、強く主張している訳でも無いけど、取り敢えず人に優しくしなきゃな、と無意識を刺激してくれる良作。

(株) 鳥屋書店 店舗企画本部 / 井出麻悠美

- 当たり前すぎて気付かなかったことに改めて気付かされるというか、読み終わった後には少しだけ自分の住んでいる世界の解像度が上がったような気持ちになりました。読んで良かったな、と素直に思えた作品。

会社員 / 小野塚博之

## 「ハクメイとミコチ」檜木祐人

- 縁やつながりのある生活を改めて考えさせられる世界観。生活の中の愉快さを感じさせてくれる作品

自営業 / 小野裕子

- 素晴らしく綿密にねり練られ、そして描かれている SF。本当にこういう世界があるような気さえしてきます。現に僕は、この作品に出会う前よりも、木の葉の裏側や、地面の小さな穴に注目することが増えたような…。それぐらい「説得力」がある漫画です。小さな世界に暮らす、小さな存在たちの、瑞々しい暮らしぶり。僕たち人間よりも、日々を、そして瞬間を大切に、楽しんで暮らしているように感じます。憧れてしまうような「暮らし」が、ハクメイとミコチの世界には確かに存在しています。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

## 「博論日記」ティファヌ・リヴィエール、中條千晴

- 人文系大学院博士課程の闇はフランスでもやっぱり深かった。カフカ作品の不条理が博論執筆過程の不条理と重なります。少年老い易く学成り難しでした。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- たっぷりと風刺をまぶした上に、冒険的でドラマチック。論文の中も院生ライフも不条理まみれ。笑って泣けて、ポロポロになっていく主人公に同情を禁じ得ない。脇キャラのアクやクセのとらえ方も巧みで、観察眼の鋭さを感じる。

朝日新聞記者 / 小原篤

## 「はたらく細胞 BLACK」初嘉屋一生、原田重光、清水茜

- 切ない。もっと体を大事にせねば、こんなにも体内は疲れてしまっているのか、と思わされました。健康第一

カメラマン / 平沼久奈

## 「バトルグラウンドワーカーズ」竹良実

- 『辺獄のシュベスタ』を描いた竹良実先生の新作がロボット漫画！？と驚きました。失業中の冴えない男（30歳）が未知の生命体「亜合体」と戦うパイロットになり泥臭くチームの皆と戦う、というSFロボット作品の内容で3巻まで楽しく読んでいましたけれど。…それだけのはずがないですよえええええ、竹良先生ですもの！！という気持ちになりました、4巻のラスト。ええ、竹良先生ですもの！！（2回目）敵の正体としては正直やはりと思っていましたが、4巻のラストは衝撃でした。これから読む方は4巻まで読んでほしいです。「そんなバカな、…」ってなります。絶対、続き気になると思う。5巻でまた展開は変わり、仲間たちの人間性も深みも増して、面白さは加速していきます。前作もそうでしたが（シュベスタは凄いい漫画でした。拷問や人が死ぬ場面が多すぎて人にオススメは出来なかったけど苦笑）逆境に立ち向かう緊張感がリアルに伝わってきて、読んでゾクゾクします。はじめは冴えない主人公の平さんが真面目でまっとうな性格で、少しずつ皆に信頼されていく様子も良いです。他のキャラクターも生活感や人間味に溢れていて魅力的です。竹良先生、これからも応援していきたい推しの作家さんです。続きの巻も楽しみにしています。

会社員 / 佐々木つむぎ

- 前作『辺獄のシュベスタ』が、魔女狩りのあった中世ヨーロッパの修道院を舞台に、意志の力で峻烈な逆境を乗り越える強い女性の物語を圧倒的な脚本力で描ききった作者の次連載作。となれば、超期待！と読み始めたところ、長時間勤務、介護、いじめ、学歴問題、などなど、地味で現代的なぬるい絶望を背景に、人生積んでブラック組織に勤めるしかなかったパッシブな青年が、人類に害する生物を遠隔操作するロボットを操作する、という業務に就いて、逆境のなかでも博愛と地道さを武器に、攻略不可能と思われた的個体を撃破していく…！という展開に、いや確かに面白いんだけど、ちょっと地味すぎじゃないか、と、…、思ったら！！！！3巻以降、…、鬼！！！！何度、心底驚かされたことか。どう考えても予測不可能なのに、確かに！と感じさせる伏線が回収される大展開が、3、4、5巻と鮮やかに続いていく！！前半で描かれていた地味な描写とはまったく違う派手さに驚かされ、一方で前半の地味さもじわじわと意味を持ってくる…！いまこの瞬間、ホントに一番面白い。竹良実、おそろべし！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

## 「薔薇はシュラバで生まれるー70年代少女漫画アシスタント奮闘記ー」笹生那実

- 70年代少女漫画の現場の様子を描いたものですが、著者がアシスタントをしていただけあって、語る先生に合わせた画風になっているのがスゴい、そして懐かしい！！漫画家や作品の名は知ってるけど読んだことがないという人にも、雰囲気伝わればいいなあ。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 数年前にコミティアで同人誌を購入しました。うわっ、懐かしい画風！と思って立ち止まったら、作家さん（笹生さん）が「わたし、美内先生のアシスタントやっていたんです。当時の自分のマンガの再録とその頃のアシスタント生活のことを描いてます」と接客してくださったので、「Cossori 1970~1979」という本を購入したら、これがめちゃくちゃ面白かった！！！！また読みたいと思っていたら1冊にまとまりました。うれしいし、もちろん面白い！

菓子研究家 / 福田里香

- 昭和の少女漫画好きにはたまらない大御所作家陣の「裏話」がこんなに沢山！と驚きました。ネットも無くFAXも無かった、そんな時代の少女漫画がどんなふうになられていたかを知る貴重な資料でもあると思います。

会社員 / 畑中瀬路奈

## 「BADON」オノ・ナツメ

- 前科者の男たち4人が出所し、第二の人生に始めたのは高級煙草店だった…という設定から凄いい。共同生活を送る個性あふれる主人公たちは、男臭いのにはスタイリッシュで、オノ・ナツメの集大成となりそうだ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

## 「麦酒姫 朝陽昇作品集」朝陽昇

- この本が出るのを何年待っていたことでしょうか。ひとりの漫画家さんが絵柄も作風もこんなに幅広く、自由に作品を生み出せるものなのかという驚きに満ちた作品集。朝陽昇さんの漫画からは、描かれている人間の温度がたしかに感じられます。くまのぬいぐるみがヒッチハイクをして、泣いている元の持ち主を助けに行く『みよちゃん、どこに行く？』が特に傑作。カバーを外すとそんなところにまでマンガが！？と驚いたり、遊び紙が入れられていたり、こだわりの装丁も必見です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

## 「光の箱」衿沢世衣子

- どうしたらこんなお話を思いつくのかほんと不思議。奇怪な事件が次々と起こってるのにキャラのセリフや描き方がとても淡白で常に平熱を保ったまま話が展開されていくギャップの面白さと、日常と非日常がシームレスに行き来するこの独特な空気がたまらない！舞台が深夜のコンビニというのがまたニクいなあ。

会社員 / 小野塚博之

- 2020年になってから気付いたのです。私が衿沢世衣子先生が好きだということに。好きだぞ…？と気づいてからは衿沢先生の作品を沢山読みました。『ちづかマップ』は特に気に入。何でしょう。コマ割りが独特。テンションはドライだけでも、視点は暖かく優しい。ユーモアがあって、ふわっと包んでくれる感じ。一度味わうとクセになります。文学的。そんな唯一無二の衿沢先生の『光の箱』は生と死の間に位置するコンビニを舞台にしたオムニバスストーリー。三途の川ではなく何故かコンビニ。「死の直前にコンビニに寄る」客と巻き込まれる店員が行き交う不思議な世界観。死の匂いが滲みつつちょっとほっこりして、ミステリアスな余韻の残る読後感でした。闇猫可愛い。オムニバス短編が好物な方は是非。

会社員 / 佐々木つむぎ

## 「ひとりでしにたい」カレー沢薫、ドネリー美咲

- 設定的に「やや手遅れ気味な『逃げ恥』」なのでは……。実家の余裕からイマイチ危機感がないあたり、身に覚えがありすぎました。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- お仕事マンガや食マンガ、ある意味ハウツー本に近い、物語プラス雑学を楽しむジャンルが増えてニッチ化する中で、遂にココまで来たか感のある『終活』がテーマ。しかも、おひとりさまの終活。親の世代ですら『風呂場でスープになった状態で』発見される可能性がある事を考えると、知っておかねばならない事は目白押しで、特に同世代女子には配って歩きたくなる一冊です。取り敢えず、うっかり死ぬ時はソファーで！

(株) 鳥屋書店 店舗企画本部 / 井出麻悠美

## 「ヒマチの嬢王」茅原クレセ

- 鳥取県米子市のキャバクラを舞台に、歌舞伎町の元ナンバーワンキャバ嬢の暴れっぷり、仕切りっぷりが爽快です。キャバクラのビジネスの仕組みも興味深く読めます。人間関係のドロドロ感、クズキャラもおいしい味を出しています。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

## 「卑弥呼 - 真説・邪馬台国伝 -」リチャード・ウー、中村真理子

- 新しい邪馬台伝説の誕生。斬新な切り口はさすが「リチャード・ウー」先生。それを中村真理子先生が素晴らしい画で表現。もっともっと評価されるべき作品に思っています。

本と文具ツモリ / 津守晋祐



- 本年の2年連続投票作品。3世紀に倭国に君臨したとされる女王、卑弥呼。生まれつきの女王、カリスマとして描くのではなく、野望と思考と論理と行動によって女王へと上り詰める過程を描く。当初、我欲のために行動していたダークヒロイン（女性なのでヒーローではない）が、戦いの中で協調性や人間性を高め、人望を集めていくある種の成長譚。細密で力強い画風、物語のスケール感など惹きつけられる要素がてんこ盛り。名作になる予感ひしひし。というところまでが、昨年の選評。その後、物語のスケールは順調に大きくなり、舞台が「邪馬台国」であることの意味もより明確になってきた。心の機微が愛憎につながり、欲望に根ざした権謀術数が積み重なる。魅力的なサブキャラも続々登場&復活。今後へのますます期待が高まる。

ライター／編集者（馬場企画）／松浦達也

## 「姫と騎士たち」山本白湯

- ツイッターで知り、面白いとチェックしていた山本白湯さんの待望の初コミックス！ゆるい絵柄なのに熱さもあって、みんないいキャラだしいい人で平和で面白い。この空気感、ずっと読んでたいな？そしてやっぱりまとめて読めることが嬉しい！！販売してくれてありがとうございます！今地でやってる連載もまとめて販売してくれること待ってます？。

bar 図書室店主 / 岡部愛

## 「風太郎不戦日記」勝田文、山田風太郎

- 昭和20年の日記。敗色濃厚な日常と虚しい大本営報道。医学生・風太郎青年の鬱屈は2020年に通じている。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

## 「フルーツ」皿池篤志

- 「バカ」と呼ばれる異端者への糾弾。それがその物語の主要なテーマとなっている。ストーリーはじっくりくる王道SFではあるが、そのキーとなる異能を「バカ」という単語に置き換えるだけでなぜここまで考えさせられる内容になるのか。迷惑をかけるはみ出しものなのか。インフルエンサーなのか。はみ出したものが悪いのか、はみ出しものを受け入れない世界が悪いのか。また「バカ」になってしまった主人公はどんな世界を作り上げられるのか。今後の物語が気になって仕方がない。

C smart ららぽーと EXPOCITY 元書店員 / 杉佳尚

## 「不思議の国のバード」佐々大河

- 実在したイギリスの女性探検家が明治初期の日本を旅する話。日本人なのに何故か知らない明治時代の庶民の生活が赤裸々に描かれています。日本人としてのアイデンティティがバンバンと壊されていくのが最高です。

バーテンダー / 村井真也

## 「ふたりソロキャンプ」出端祐大

- 巷で流行りのアウトドア作品。ハウツーもの、ギア紹介にちょいラブのテイストがたまらない。また登場人物がグイッと飲み干すビールの画が最高です！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「ブラックナイトパレード」中村光

- 聖☆おにいさんの作者がこんな漫画を書いていたなんて！キリストとブッダの次はサンタが題材とは！なんとも、面白い設定の話。シリアスと笑いが良い具合に混ざっている。

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

## 「BLUE GIANT EXPLORER」石塚真一

- ずっと追いかけている漫画。主人公がどんどん成長してって周りの登場人物もどんどん魅力的になっていく。すばらしい漫画。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 物語の舞台が変わるごとにタイトル変更。よって毎年、私の「推し」作品。作品力はピカイチ。音楽の魅力に引き込まれます。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「BLUE MOMENT」小沢かな

- 気象災害をモチーフにした作品。集中豪雨や台風、河川氾濫といった災害が発生したとき、その最前線で奮闘する気象学者。テレビではにこやかな“雲王子”、果たしてその正体は――。災害や遭難といったシビアな状況下で、主人公たちは何をどう選ぶのか。自分だったらどうするかを繰り返し突きつけられる。でも、決して重苦しくなく、夢中になって読み進めてしまう。次巻が待ち遠しくてたまらない。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

## 「紛争でしたら八田まで」田素弘

- 実世界を下敷きとして国際政治や紛争をマンガというエンターテインメントに昇華する、『ゴルゴ13』にしかなし得なかった世界観を継承するマンガが現れた。それもより軽快にテンポよく、誰にでも楽しめる読み味で。主人公は地政学リスクコンサルタントであり「世界を回る解決屋さん」の八田百合（1巻では美女キャラとして登場して行く先々でビッチだなんだと罵倒されるが、巻数を重ねるごとに人間らしいおかしみのほうが前面に出てくる……というのは脇道の話）。世界中の小さな町や村で起きる、小さくとも深刻な民族対立や格差による断絶を、八田が知性と地政学とプロレス技とローカルフードで解決していく。取材の深さも物語の膨らませ方も噛み砕き方も見事の一言。われわれ日本人が感覚として捉えるのが難しいミクロな民族紛争について、ディテールの説得力も盛り込みながら、トルク高くグイグイ読ませていく。そこにある痛みを想像する作者のイマジネーションも素晴らしいし、東京海上日動リスクコンサルティングの上席主任研究員の監修もディテールの読み応えに何役も買っている。もちろん伴走者であり、監修者をアサインした（であろう）編集者も超GJ。いい作品はいいチームが生むという好例に違いない。

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

- 地政学リスクコンサルタントの八田が、世界各国の企業の依頼を受け、「地政」学の「知性」を駆使して民族同士や政治グループの対立を解決してゆく。イギリスやミャンマー、ウクライナ、タンザニアなど世界を股にかけるスパイ映画のような展開や民族紛争などのテーマも扱うシリアスさが同居しつつも、民間の人間として泥臭く現地人と関係を築いていくのが面白い。各地の料理、風俗に対するマニアックな知識も盛り込まれ、一種の旅行記的にも楽しめた。2020年に第1巻が刊行されたこともあり、ブレクジットや北極圏航路など比較的最近の地政学リスクが題材となっていることも評価できる。

弁護士 / 三村量一

## 「ヘテロゲニア リングステイコ ～異種族言語学入門～」瀬野反人

- 言語学の研究をテーマにした漫画です。キャッチーな異世界漫画かと思ったらめっちゃくちゃ地味な話なんですけど、だからこそ推したい。人を選ぶ気はしますが…。地味でコツコツしたやりとりを見守っているのがじんわり楽しい。異種属の言語や習性の設定がめっちゃくちゃ細かくてよいです。真面目な漫画。好きです。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

## 「ベルリンうわの空」香山哲

- ベルリン在住の作者の日常を独特な視点で描く。隣人たちの多くは異形の姿で登場するが、それは作者自らが異邦人という立ち位置にいるからではないか。現実世界を描きながら、ちょっとトリップしたような感覚になる異色作。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 数年前にドイツ・ベルリンに移住した作者が現地で感じたことを描いていくエッセイ漫画。日本と欧州（特にベルリン）との文化や気風の違い、物の見方などを、作者ならではのとてもやさしいフィルターを通して伝えてくれる。情報もてんこ盛りなので、これからベルリンに行かれる方などは、ぜひ一冊手元に落として、スマートフォン格納しておくといいと思うが、この本については情報トリガーよりも、共感スイッチを入れる準備をしてからページをめくりはじめたい。本書には、見知らぬ文化に触れるときの、ちょっとビクビクしながらもワクワク、ドキドキして、少しずつ現地になじんでいくあの喜びが詰まっている。そして作者のやさしさあふれながらも俯瞰されたフィルターと、描きこまれたディテール（欧州内の飛行機の値段やスーパーに置かれている商品など）は僕らにその喜びを疑似体験させてくれる。旅に出かけづらいいま、この作品を読んでいると、あたかも自分がベルリンにいるかのような気分になってくる。読み込むと行ったこともない街なのに「ああ、そうそう。そうだよな」というあいづちを打ちたくなるほど、ベルリンが好きになってしまう。

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

## 「辺境の老騎士 バルド・ローエン」支援 BIS、菊石森生

- 主人公の騎士が若い時にお姫様が身分違いで（ちゃんと）くっつかないのが良いです。ハードボイルド王道ファンタジーって感じです。こういう歳のとり方に憧れます。

バーテンダー / 村井真也

## 「放課後ていぼう日誌」小坂泰之

- 平穏な女子部活&蘊蓄マンガとしての質がすこぶる高い。巻数制限が近いので（念のために）このタイミングで挙げておく。

ライター / 福井健太

## 「望郷太郎」山田芳裕

- 「度胸星」以来のSFもの！？ いや映画にありそうな終末もの！？ 僕にとって山田芳裕作品はジャンルなんてどうでも良くて、そこに描かれる人間描写がとても好きなのでこの作品を読んだ。序盤から山田節全開のストーリー展開はまさに脱帽です。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 主人公が人口冬眠から目覚める第1話から圧倒的な面白さ。土地、お金、組織。リセットされた原始の世界でむき出しになる、資本と人間の関係がスリリング。異世界転生ストーリーがブームになる一方で、「サビエンス全史」のような人類史本が流行るなか、より多くの人に読まれてほしい作品です。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- この着想力には感服！「ゼロ」からの人類史を考え直すよい作品です！オススメ！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 「コールドスリープから目覚める」といったありがちなスタートではあるが、その後の緻密な設定、繰り広げられるドラマに圧倒される

会社員 / 齋藤隼

- 巨匠がここに来て打ち出したサバイバル SF。現代人の思考が文明崩壊後の世界でいかに通用するか、という視点が面白い。

レビュアー / 縣丈弘

## 「僕×スター」肥谷圭介

- 底辺高校生が徐々に覚醒していく姿が最高に気持ちいい！這い上がるために負った傷はとても痛々しいけど、力を持たないものは技と知恵を駆使して強者を翻弄し、やがて逆襲に打って出る。こんなにワクワクさせてくれるマンガは久しぶりです！

Books アイ新田エキナカ店 / 野口忠義

## 「僕と君の大切な話」ろびこ

- 理屈をこねくり回してた東くんがストレートな成長を目指して走り出し、その反対に、東くんが翻弄されていた感のある相沢さんがドーンと受け止める側に。風変わりな「男と女のギャップあるある」対話劇から、少女マンガの王道的な甘酸っぱい恋愛へ物語自体が進化したかのよう。更には群像劇としての厚みまで獲得して見事な完結。たっぷり楽しませていただきました。

朝日新聞記者 / 小原篤

## 「僕の心のヤバイやつ」桜井のりお

- 『からかい上手の高木さん』では、西片がごくまれにクリティカルを出し、それが神回になることが多いのだが、本作は何とクリティカルが日常茶飯事に起こる。それだけでおなかいっぱい、もう降参と言いたくなる傑作「恋愛未満」コメディ。非モテの陰キャである市川君が、クラス一の美少女である山田さんを、陰湿な殺意と共に(?) 眺める話なのに、実はラブの関係性が逆転しており、視点人物の市川だけが(心理的障壁により)それに気づけない。ものすごく理知的でアクロバットな作品だと思います。山田さんの方も、けっこう「自己評価が低い」ことが何となくわかり、ただかわいいだけのキャラでないのが大変よい。『高木さん』みたいに、無限ループ化もスピンオフも難しい設定と思いますが、今一番新しく、面白いラブコメと言っても過言ではない。なるべく長く続けてほしいものです。

読売新聞文化部 編集委員 / 石田汗太

- たまらん！たまらんかよ！！これはなんとも悶えます。陰キャの主人公と陽キャのヒロイン(そもそもそんな言い方も最近知ったけど。)主人公京太郎目線で杏奈ちゃんに恋してるし杏奈ちゃん目線で京太郎がたまらない。一挙手一投足気にし合ってる二人にすっかり夢中だ！！

フリーアナウンサー・本屋店主(希望的予定) / 松尾翠

- 実に良質なラブコメです。その一言につきる。

教師 / 持丸宏司

- もともとラブコメ好きなのですが、ここ最近で一番応援したくなるような関係性でした。読み進めていくとタイトルのヤバイやつとは何なのか、って問いが出てくるかと思います。そのアンサーを目にしたくてどんどん読み進めたい作品ですね。

会社員 / 三浦佑樹

## 「僕はまだ野球を知らない」西餅

- 真面目で、素直で、でもどこかずれている登場人物が作る空気がとにかく愛おしい。野球を知らなくても楽しく読めます。それぞれのための努力が大きな流れを作るのを、少し力を抜きながらワクワクして見守るのが楽しいです。5巻で一旦いいところで締めて、続きは個人でweb連載されているそうで、いつか続きが刊行されるのを切望しています。面白いのに知っている人が少なすぎてもどかしい！

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

- セイバーメトリクスを高校野球に持ち込みたくて仕方ない残念完璧男性監督が、地面に金属を埋めて野手の位置をはかる、というまったくクールじゃない奇行からスタートし、監督を軸に、普通に見える奇人がわらわらと集まり、超弩級のボケを静かに見せて考えもしなかった笑いをもぎ取られる快感たるや！！ 特に、家庭の事情で野球部を辞めようとしている部員に駆け寄ったチームメイトが、「オマエ野球辞めるんだって？じゃあ道具要らないだろうからちょうだい！」と持ちかけるシーンとか、最高すぎる！！ この作品のもう一つのポイントは、雑誌での連載は2020年をもって終了してしまったものの、なんと著者の西餅さんがみずからのnoteで連載を始めたところ。好きな作品が終わって欲しくない！！という読者の叫びに、この形で答えているマンガも歴史上ほとんど見たことがなく、その上でも注目したいんだけど、ポイントはニュースバリューとかじゃなくて、この行動をも含めて、「やっちゃいけない」って無意識に決めてることが我々なんと多いことか。ないんだよ、やっちゃいけない事なんぞで！！というメッセージがビッキビキに伝わってくる！！真の現代の自由人のバイブル！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 今までの野球漫画の概念を覆してくる理論派野球漫画です。西餅先生の前の作品のハルロックの独特のノリのまんま、前編爆笑しっぱなしです。元タスポーツ系の漫画をあまり嗜まない私でしたが、理論や最新のシステムを取り入れて弱小野球チームが次第にまとまっていき、野球をすることを楽しむ過程がきちんと描かれているので、野球漫画としてもチームビルディング漫画としても楽しめると思います。野球を知ってる人にも知らない人にも読んでもらい、感想を聞きまくりたいです。

公務員 / 宇田川結衣子

## 「北北西に曇と往け」入江亜季

- アイスランドに行きたくなるような漫画で括れない能力系ミステリー漫画なのか、面白いです

tetote 代表 / 力丸真

- カッコよくて美しくて美味しそうで。何も無いように見える世界に全てが詰まってる、大好きなマンガです。

マネージャー / 樋口健

- アイスランドの雄大な自然をバックに繰り広げられる物語はとても魅力的所々に出てくる謎が話のスパイスとなっていてミステリアスな部分をうまく演出している。次の巻が出るのはまた一年後なのだろうか…待ちきれない

あゆみ BOOKS 杉並店 店長 / 土屋修一

## 「ボスとヤス」さいのすけ

- Twitter でバズるマンガって、一発出オチモノが多い印象なのですが、ちゃんとバズった設定を下地にして、2話3話と面白いままなので、このまま突っ走ってくれ！と願いを込めて一票。ヤスが可愛い。兎に角絵が綺麗なので、他の作品も読んでみたいです。

(株) 鳶屋書店 店舗企画本部 / 井出麻悠美

## 「マイ・ブローケン・マリコ」平庫ワカ

- もう勢いが凄い。全ての感情をこれでもかと描いていて怖くなるくらいでした。全1巻で終わるのもまたよし。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 去年の年始にこの作品を読み、2020年の5冊のうちの1冊は決まったな、と衝撃を受けたことを覚えている。不条理を感じる世の中で、片割れのように思える存在が急に居なくなってしまうたらどうなるのだろうか。自分にはその人しかいないと感じるまでの存在が消えてしまったら。しかし考える間もなく日常は続いていく。死んだものに会う術は、生きていく中で想いを馳せる以外にない。時間と共にそのものの形は変わるかもしれない。それでも自分は構わないと思うだろう。生きていくものが背負い、肩入れや共感しながら進んでゆける存在があった事実を幸福と思い、生きていくことが全てなのでは無いだろうか。そんなことを考えさせられたが、読む人によって思うところが様々あるだろうと感じる。気になった方には是非一度手に取っていただきたい。

C smart ららぽーと EXPOCITY 元書店員 / 杉佳尚

- 年初に出たあとわりとすぐに読み、またすごい勢いのある漫画が出たなあと思いましたが、衝撃作としてやはり今季推したい一作です。表題の作品は自殺で親友を失くした主人公が、その子の遺骨を奪って逃げるストーリー。作中の時間は短いけれども、暴力的なまでの喪失感や理不尽な世界への怒り、その世界で共に生き延びてきたのにひとり勝手に逝ってしまった戦友への怒りなど、ひたすらにヒリヒリ心が焼けつくような展開なのですが、決して暗くなく火の玉が駆け抜けていくようでした。友のために抗い、怒り尽くし、暴れ、しかしどんなに足掻いても戻ってきてしまう日常のなかで、物語の結末に見えた一筋の光もまた友なのだなあ。短くとも濃い刺激的な一作です。

公務員 / 宇田川結衣子

## 「まんが訳 酒呑童子絵巻」大塚英志、山本忠宏

- 「コマを割って絵巻物がまんがに！」との帯のコピーそのままの驚きを味わっていただきたいです。よもや、こんな手法があるのかとの新鮮な驚き。時代によってメディアの見せ方が違うものを、「まんが訳」により鮮やかに蘇らせた、といっても過言ではないです。というのは、ちょうど妻に道成寺縁起の大蛇の説明をした直後だったので、この本があれば説明早かったのに！と感じてました。でも、巻末の監修者によると、「絵巻物はまんが・アニメの起源ではない」と。奥が深い！

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

## 「満州アヘンスクワッド」門馬司、鹿子

- 満州で生き抜く為に、多少無理な展開に逆に惹き込まれた作品。話のテンポが早くそれが良いですね。序盤は身の回りの人の死が結構多く、重めの作品なのかなと感じましたが、2巻あたりから一気にのし上がっていく感じがよいですね。これからの展開次第はかなり面白くなりそうで期待しています。

デザイナー / 平沼寛史

- 人間らしい、欲にまみれたギトギト感と、選択肢の無い状況の中で、苦難の道を選ばざるを得なかった主人公の苦悩と葛藤が生々しく描かれ、手に汗握る展開にハラハラしてしまいます。

広告会社 ブランナー / 平沼良章

- 関東軍満州統治時代の話阿片の密造という視点から描いた作品。もともと、この時代に詳しくないこともありハマれるか不安でしたが難しい話の部分もエンタメとしてスムーズに導入してもらえるのでサクサク読めます。今一番続きが気になる作品です。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

## 「三日月とネコ」ウオズミアミ

- マンガハックに2018年から掲載された6話分をまとめた徳間書店版第1巻（紙が厚くて本がずっしりしているらしい！）が良くて、ずーっと自宅の本棚に面陳していたのだが、待てど暮らせど2巻が出ず…。それが、このいきさつはあまり知らないのですが集英社に版権を移して昨秋ようやく第2巻が刊行された。まずはめでたや。このマンガのどこが好きなのかというと、いろいろあるけれどもまずは絵が好き。くっきりとしていてりりしく、それでいて細やかでやさしい女性を描かせるとウオズミアイ先生はとても冴えると思う。20代、30代、40代の男女による共同生活の舞台となる街は熊本。2016年4月の熊本地震がモチーフの一つになっていて、物語にそこはかかない陰影を感じる。ウオズミ先生は調理師免許を持っているそうで、作中登場する手料理の数々もまたよし（胡麻豆腐の揚げ出汁、餃子…）。料理そのもののおいしように描かれているというよりは、みんなで囲む食事のシーンからおいしい雰囲気があふれ出る感じ。おいしいものを食べ、親密な空間でリラックスし、互いに思いやり、それぞれの個性を認めて尊重し、個として生きるために力を合わせる。マウンティングとかそういうのとは無縁に、楽しく、気分良く生きていく。そのような生き方にはたぶん、あきらめなければならないことも少なからずあるのだけれど、でもそういう風に自分は生きていくんだ、というそこはかかない『決意表明』みたいなものが、さりげなくではあるが意識的に描かれていて好ましい。掲載誌がココハナに移った第2巻では、3人それぞれの家族や恋人など周囲の事情も入り込んでくるが、それも感情的に排除するのではなく、逆にきちんとかかわって、考えて、話し合っ、分かり合っ前に進めていく。それが、昨今のやたら断絶だらけの世界を忘れさせてくれて、読んでいてホッとする。あと、やっぱりネコがいいよなあ。

会社員 / 天野賢一

## 「ミステリと言う勿れ」田村由美

- 最大の見所は変人探偵と関係者たちの化学反応だが、謎解きの構成にも見るべき点が多い。候補に推せるのは今年が最後か。

ライター / 福井健太

- 数少ない一巻から読み続けている本だけれどもますます面白くなっていく。淡々としてるようで狂気を孕んだ人間の面白さやパズルが少しずつはまっていく感覚を感じる。早く結末が見たいような終わりたくないようなそんな作品

鳥取の美術の先生 / 佐川由加理

- ずっとサプライズに満ちた展開が1巻から途切れない「ミステリという勿れ」も、もう7巻。1つ1つのお話が全体にも作用していく展開はお見事で、通して読むとそのすごさが再認識できるのですが、まだまだ謎もたくさんで、まったく勢いが落ちていかないのも読者として嬉しいのです。整くんによる「・・・あのう」から放たれる名言インターセプトが快感！

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

## 「御手洗家、炎上する」藤沢もやし

- 表題「御手洗家、炎上」が見事に表す、ホームサスペンスドラマ。様々な炎上が一気に繋がって、巻が進むにしたがって、思った以上に複雑な関係になっていき、まさかの展開が毎回あるので、すぐストーリーがうまく作られているな、と思ってます。物語もいよいよ終盤。完結後実写ドラマに絶対なりそうなマンガ No.1

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

## 「結ばる焼け跡」雨瀬シオリ

- 戦後の東京上野。終戦後の日本でそれぞれの正義や葛藤の描写に惹きまれる。少年、兼吉のストーリーと元中野学校の兵士である金井田のストーリーが絡み合う所が非常に良いです。戦後という思い題材ですが出てくる人々の暗い部分の反面、心あたたまる行動の部分にこの作品の面白さを感じます。今後の展開が中々激動な様子があるので、続きが読みたいです。

デザイナー / 平沼寛史

- 組織、イズム、忠誠、絆、そういうのに弱い僕がまんまとハマっているマンガです。戦後という舞台で、主人公たちが時代に沿っていくのか逆らっていくことになるのか気になって仕方がありません。過渡期を生きる上では、守るにも攻めるにも覚悟が必要なので、今の時代にも置き換えられそうなメッセージが沢山散りばめられている気がします。

イロイロ屋 / 杉本善徳

## 「娘の友達」萩原あさ美

- 中年男性として、このマンガの恐ろしさと垣間見たさ（続きの見たさ）がないまぜとなる気持ちは、描写の細やかさと、時に驚くような展開と、モノトーンの引き締まる絵柄のせいかもしれません。そして、ヒロイン如月古都（きさらぎ・こと）が何を考えているのかわからないところ（心理描写がほぼない）。続きの見たさ、しかし、サブタイトルの「ファム・ファタルの大きな秘密」（フランス語）も怖くて。。。「女子高生に手を出すおっさんの話」との下心で読みだすと、とんでもない目に合うかもしれません（が、読んでください！）。

衆議院議員山尾志桜里事務所政策担当秘書 / 三葛敦志

## 「無能なナナ」るーすぽーい、古屋庵

- 超能力者狩りと倒叙ミステリを組み合わせ、ミスリードに満ちたプロットを繰り出す野心作。アニメで知った人には五巻以降（事実上の第二部）も読んで欲しい。

ライター / 福井健太

- 能力を使っていようがなんだろうが、なんだかんだでトリックが暴かれるとスッキリ。

教師 / 持丸宏司

## 「無能の鷹」はんざき朝未

- その場の雰囲気や相手のオーラのモノや話術によっていつの間にか相手の思う通りに事が進む時ってありますよね。昔、本屋に漫画買いにただけなのに店先の出張スタッフさんに声をかけられて、何やかんやで有線放送の契約を結びそうになった時の事を思い出しました。「無能に思われたくない」とか「出来るヤツに思われたい」と心で思っている人はこの漫画を読んで心当たりのあるシーンがあるんじゃないでしょうか。あと、面白い漫画って表紙から面白い気がしますね。

バンドマン / ターシ

- 有能に見える女と無能に見える男のお仕事コメディ。「主人公には実は隠れた才能が…」という王道の逆を行くようで、行ってないかもしれないアイデアが面白い。「あるある」と共感させてくれる笑いの中にも、現代社会に対する毒を忍ばせているのが痛快。自分の周りのあの人も実は仕事ができる雰囲気があるだけなのでは、と考えさせられる一作。

弁護士 / 三村量一

- 有能に見える女と無能に見える男がタッグを組み、取引先と微妙なすれ違いを生みだしながらも何故か奇跡の成果を上げていく。愉快痛快☆新感覚お仕事マンガで面白い

tetote 代表 / 力丸真

- 佐々木倫子風お仕事漫画、という感じで、読んでいて非常に楽しく、仕事への向き合い方の肩の荷をおろしてくれる作品

会社員 / 齋藤隼

- お腹を抱えて笑いました。こんなすっとほけた笑いを求めていたんです。

菓子研究家 / 福田里香

## 「無法島」森恒二

- 自殺島の前日譚テーマを微妙に変えていきつつ、根本で伝えたいことがしっかりあるからからかブレず、飽きずに読めます。とても好きな作者さんなので毎作品楽しみに読んでいます。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

## 「メダリスト」つるまいかだ

- 熱い！フィギュアスケート漫画。それもジュニア時代から描かれていく、先生と教え子の漫画。夢破れた青年と、友達や家族からも見放されていた少女との出会いから、この熱い漫画はスタートする。フィギュアスケートの魅力、スケートिंगの基礎、フィギュアスケートへの熱い思い、先生と教え子の絶妙な関係、どれも熱い！セリフは多めだけれど、その分読み応えも充分。才能はある子だけれど、ずば抜けた才能や超人的才能があるわけではないので、それもとても現実味があってとても良い感じ。おすすめしたい！

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- そうする以外に道を知らないんだ……っていう孤独な衝動の救済からはじまる、王道中の王道の幕開け。感情を揺さぶりまくる絵力の凄さとあまって読んでるとぼろぼろ泣けてきます。コーチが小学生の教え子を「あなた」と呼んで対等に話すところもぐっとくるし、いのりの成長がとにかく楽しみ。

会社員 / 末永龍介

- このコメントが発表になる頃、みんな2巻を読んで涙しているんじゃないでしょうか。自分が自分になるために努力する尊さ。

往来堂書店・コミック担当 / 三木雄太



- 第1巻で既にアツさがメーターを振り切っている令和イチのスポーツ漫画(だと勝手に思っている)年齢や家庭環境などシビアな問題が沢山ある中、生徒とコーチが二人三脚で成長していく姿がたまらない。周りのライバル達も個性豊かでページをめくる手が止まらない、えっ?もう1巻終わっちゃったの?!となります。体感時間は秒です。

建材メーカー勤務 / 竹本慧

- スターになれなかったスケート選手と、スケート以外何もできない少女がてっぺん目指す、傷だらけフィギュアスケート物語です。尖った天才を描いた漫画は今までも数多くありましたが、今作の主人公・いのりちゃんは、特異な特性から母親にも見放された少女。幼くも崖っぷちに立たされて痛々しい人生を生きてきた彼女が継のようにリンクで滑る姿は危うい熱さがあります。この先もしんどいことがたくさんあるんだろうなあと思いながらも、読み進めずにいられない魅力があります。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

- キャラクターが表情豊かで魅力的。物語も熱く、コミカルな描写があって読み味も快い。先が楽しみという言葉しかありません!!

図書館員 / 金田健太郎

## 「めもくらむ 大正キネマ浪漫」赤石路代

- 大正時代、無声映画全盛期。熱く激しい時代を生きた人々の物語。赤石路代得意の、大正浪漫作品なのだけど、まさか、少女マンガなのにBLでこう結末するとは!とっても切なくも心温まる良品です!

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

## 「モブ子の恋」田村茜

- スーパーでバイトする地味な女の子がバイト仲間の男の子に恋をするお話。現実でもあるようなシンプルな話だけど、純粋な気持ちに嘘がないので読んでいてドキドキするし続きが気になる。少女漫画のようにキラキラはしてないけど、ゆっくり優しく丁寧に進んでいく想いがぎらめいて見えて...尊くて尊くて...泣けてきます。登場人物に悪い人がいないというのも私は好きです。大人しく地味でなかなか自分から前に進めないけどまじめで丁寧な主人公、信子。無口で静かだけど困ってる人がいたら迷いなく助けてくれる、入江くん。明るくコミュ力高い、安部さん。同じく明るいムードメーカー、金子くんクールビューティーだけどもじめな先輩、篠崎さん。そしてみんな優しいんです!!優しい人には優しい人が集まってくるんだと思います。大学生達の話ですが、30代の私が読んでもきゅんきゅんします。この頃には戻れないからかもうほんとみんなが愛おしくて尊くて泣いちゃうんです。ほんと大好き。

声優 / 富岡美沙子

## 「もふもふ」森栗丸

- みんなにもふもふを。そうすればとてもいい世の中になるなど。

マネージャー / 樋口健

## 「夜間中学へようこそ」沢音千尋、山本悦子

- この作品を読むまで「夜間中学」の存在を知りませんでした。しかも、自分の生活圏とさほど離れていない場所に。学びたい意欲には頭が下がりますし、「疲れた〜」とか「だるい〜」を言い訳に楽なほうを選びがちな自分を戒めてくれる作品です。そして、もっと「夜間中学」の存在を知ってもらいたいです。

Books アイ新田エキナカ店 / 野口忠義

## 「ヤコとポコ」水沢悦子

- 思い出の色が同じだと幸せになれるゆっこペン。「うらやましかった友達んちの猫色」「お兄ちゃんに割られたお気に入り茶碗色」「一番長生きした金魚色」... 今から100年後くらいの世界はインターネットが廃止されのんびりとした時間が流れていて、未来なのに懐かしい。インターネットはないけれど、人々は動物の形のロボット達と共存しています。ロボットは「かんぺき・てきとう・ダメ」モードから1つ選択して後から変更することはできません。「てきとうでいいんだよ」少女漫画家ヤコと、てきとうモードのネコ型アシスタントロボットポコ、2人の毎日は穏やかで優しい。SNSやインターネットに疲れたらこの漫画を読んでみてはいかがでしょうか。ちょうど5巻のお話が区切りよくとてもとても素敵なお話だったので、この機会にぜひ読んでみてほしいです。

声優 / 富岡美沙子

## 「優しくしたい。」根本拓実

- 主人公の小学生の少年はふだんからいじめられているのですが、いま辛いことは将来きっと幸せになる貯金だと信じて、日々耐えて過ごしています。そんな前半でも心が抉られるのに、予想だにしないラスト。この少年が小さな拳で私の死生観を激しく殴りつけてくるようで、いままでにない衝撃を受けました。この漫画に出会えたことに感謝したいです。

Books アイ新田エキナカ店 / 野口忠義

## 「夕風に舞え、僕のリボン」黒川裕美

- 話の筋自体はよくある展開なのですが、ひとつひとつの表情やコマ運び、背景描写を含めた構図にぐっと引き寄せられます。それぞれの立場の必死な想いが絵に滲んでいて、つられて何度か涙してしまいました。自分の出身地が舞台の漫画にはどうも方便の使い方にうるさくなってしまいますが、安心して読めたのもよかったです。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

## 「柚木さんちの四兄弟。」藤沢志月

- 両親を突然亡くした、四兄弟が、互いを思いやるばかりに時に喧嘩をし、時に悩む成長物語。とにかくみんな可愛い、全員をギュッと抱きしめたいとってもハートフルなお話ばかり！四兄弟。今まで色んな作品で使われてきたテーマなれど、侮るべからず。どのお話も胸が熱くなって、人との距離感や希薄になりがちな人間関係に一石を投じる作品。ちょっとしたことに幸せを感じるハートフルなストーリー展開に毎回泣かされています。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

## 「ゆびさきと恋々」森下 suu

- 少女漫画部門！圧倒的1位 耳の聞こえない主人公・雪ちゃんの恋物語。これは恋系漫画から遠ざかっているも、丁寧に紡がれていて、心の機微がよく描かれていて、知らず知らず引き込まれると思う！男の子たちのカッコよさ、恋模様と一緒にそわそわしてしまう！！

フリーアナウンサー・本屋店主(希望的予定) / 松尾翠

## 「夢の直路を恋惑ふ」越田うめ

- 男子高校生の見る「平安時代の前世の夢」から始まるコメディと思っていたら、前世の悲恋が絡む三人の切ない記憶に泣かされました。今世での不思議な三人の関係がかわいくて微笑ましいです。

主婦 / 紺野泉

## 「夢の端々」須藤佑実

- 鍵のついた祖母の日記をひらくと、そこには人間の指が大切に保管されていた。戦争で失ったと聞いていた祖母のものだろう。なぜ周りにうそをつき、このように隠していたのか。かつて心中未遂をおこしたふたりの、その人生をさかのぼって紐解いていく人間ドラマ作品。上下巻いっきによんだ。自分のために命をかけてくれた愛する人を、裏切ってまで結婚した理由。それが身につまされて、泣いてしまった。わかる。わかりすぎる。時系列を遡っていくスタイルもおもしろかったし、内容もよかった。

主婦 / 赤坂真実

## 「ゆりあ先生の赤い糸」入江喜和

- 1巻で丁寧に描かれたゆりあ先生の幼少期からの人となり。その伏線が最近の展開で見事に花開いていて、今まさに読み時。父に影響を受けて「カッコ悪い生き方はしたくない」と言いきっていたオトコ前なゆりあ先生が、親子ほど年の離れた相手との恋におぼれていく姿は、客観的に見れば「カッコ悪い」。でもそうなるまでの過程をずっと見届けていた読者は誰も彼女を責められないし、応援せざるを得なくなる。人間らしさそのものを描く入江先生の筆力、さすがです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 気づけばもう連載開始から2年経っているがあっという間だったし、今の展開が一番熱いと思う。ゆりあさんの恋の進展に心臓がぎゅーっとなってちぎれそう……。こうなるといいな、でもならないんだろうな……と思ってたら、なった！といううれしい誤算。でもきっとこの後はそんなこちらの予想をまた裏切ってくれそうでそれも楽しみです。一貫して、「子ども」というものが「守るべき存在」として描かれていて、入江さんのやさしいまなざしを感じられるのも素敵です。

ライター / 門倉紫麻

## 「羊角のマジョロミ」阿部洋一

- 鬼才、阿部洋一！每作品すばらしい。とにかくよい。

文筆業 / 海猫沢めろん

## 「ようこそ！アマゾネス☆ポケット編集部へ」ジェントルメン中村

- 仕事でうまくいかなかったり、失敗したり落ち込んだりすることが馬鹿らしくなるような、読んで元氣とやる気もらえる漫画です。情熱がほとぼりするパワフルな登場人物と、編集長の数々の金言、胸に刺さりまくってます。

Books アイ新田エキナカ店 / 野口忠義

## 「横須賀こずえ」小田扉

- どこかシュールで、あり得ないストーリーなのに絶妙に現実で起こっても不思議じゃないんですよね。人間社会も動物社会も描写が言い得て妙とでも言いましょうか。平和のモニュメントの回はまさしく「小田扉ワールド全開」で大好きです。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

## 「よふかしのうた」コトヤマ

- 子供の頃や学生だった頃感じていた真夜中の魅力を思い出す作品です。いつも通っている道も真夜中に出てみると、並ぶ街灯の灯りが幻想的で違う世界に感じられていました。ましてそこでかわいい女子（吸血鬼だけ）と過ごせるなんて羨ましすぎる！

会社員 / 林礼春

- 独特の夜の世界観というか捉え方をするなと思いました。文学作品のような雰囲気もあり、日常コメディもある中で、単なる吸血鬼ものラブコメとは一味違う内容に、少しずつ惹かれていきました。話が進み、主人公とヒロイン2人だけの夜の世界に、他の登場人物が出てくることで、人間と吸血鬼との関係性を問うようなシリアス展開にもなり、より面白くなってきます。

会社員 / 三浦佑樹

- 登校拒否から不眠症になり、今まで未知の領域であった深夜の世界に飛び出した先に出会った吸血鬼の少女。大人になって久しく忘れていた深夜の外出という独特の空気感と不穏さを増すボーイミーツガール最高です。

住職・ライター / 蟬丸P

## 「ヨリシロトランク」鬼頭莫宏、カエデミノル

- 表紙のかわいらしい少女の絵から受ける印象を裏切る重たいテーマの作品。「殺人を犯した人間が殺されれば、殺された人間が蘇る」というルールに書き換えられた世界を舞台としたオムニバス作品。異常とも思える新たなルールに慣れ、新たなルールが作られていく世界。鬼頭ワールド全開という感じの今作はこれから先も幅広い展開がありそうで非常に楽しみな作品です。

会社員 / 津田圭

## 「ヨルの鍵」高村真耶

- 鍵の魔法が存在する世界で、それぞれの傷ついた心が癒されて再生して世界を変えていく癒しの物語です。読んだらきっと優しい気持ちが溢れてきます。

主婦 / 紺野泉

## 「らーめん再遊記」久部緑郎、河合単

- ラーメンとはフェイクから真実を生み出そうとする情熱そのもの。そのラーメンが「本物」と認められた現在、虚脱感に沈む我らがラーメンハゲ。ミドルエイジクライシスからひとりのラーメンバカに戻り、「個人の作品」から「万人の形式」に向かう展開が胸アツです。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 芹沢さんのようにいくつになっても変化を受け入れられる、楽しめる人間でありたいと思える。長いシリーズならではの、年のとり方を描いた。

往来堂書店・コミック担当 / 三木雄太

## 「ライドンキング」馬場康誌

- 異世界転生無双モノというジャンルなんだろうがとても読みごたえがあります。

tetote 代表 / 力丸真

## 「ラグナクリムゾン」小林大樹

- いわゆる“強くてニューゲーム”系で、中世ファンタジー設定の漫画です。キャラクター設定がしっかり濃く、中二心のがっしりと驚つかみしてくれます。なので過去にそんな漫画やアニメに夢中になったことのある方にオススメ出来ます。またバッドエンドからの巻き戻りが話の起点になっているので、時折サスペンスの様な要素が見え隠れします。それが独特の緊張感のある空気になっていて、ファンタジーものとしては非常にユニークな漫画です。

デザイナー / 佐藤優

## 「竜女戦記」都留泰作

- 文化人類学者でもある作者は、「キャラを立てるより、世界を立てろ！」という〈世界観エンタメ〉を提唱している。前作「ムシユン」もとんでもない怪作だったが、本作は丸ごと異世界ファンタジー、しかも大河歴史モノという点で、都留理論の本格的実践と言えます。「平凡な武家の妻が、夫に代わって天下取り」という第1巻もすごかったが、第2巻で、主人公が授かった異様な能力（これがまた面白い）が明らかになり、竜姫や猿面冠者・吉利など魅力的なキャラもどんどん出てくる。あれ？ 気がつけば、世界もキャラも両方立ってるではないか！ 反則だ！ 描き下ろし刊行という形態も野心的。何年かかってもいいから完結を見たい。

読売新聞文化部 編集委員 / 石田汗太

- 内容は好みがハッキリと別れると思いますが、都留先生の描く作品には物凄く強い魔力の様なチカラがあって、漫画好き程寄せ付ける魅力を持っています。ファンタジーなのに肉感的な生々しい描写でクセがかなり強めなのですが、都留先生なら何やかんやで最後は爽やかなラストへ導いてくれるんじゃないかと思えます。今までの作品では強く魅力的な女性が沢山出てきたので、今回は満を持して(?)女性主人公なのでこれまでとはまた更に違ったタイプの世界になりそうですね。

バンドマン / ターシ

- 「主婦が天下を取る話」と1巻の後半に書かれているが、まさにそんな展開。『ナチュン』『ムシユン』など今までは現代日本が舞台だったが今回は東アジア風だが架空の世界。完全ファンタジーとなったことで、拘束具が外れた作者のフルパワーを見せてもらえるのではないだろうか。これは期待大です。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- 本邦の戦国時代を思わせる架空の島国での女一代記。地に足のついた世界構築と作者ならではの奇想が絡み合って読み応えのある一品となっている。

レビュアー / 縣丈弘

## 「レベレーション (啓示)」山岸凉子

- 山岸凉子のジャンヌ・ダルク！ 2020年は山岸凉子先生の『レベレーション 啓示』と萩尾望都先生の『王妃マルゴ』という、ふたつのフランス史ものが完結した記念すべき年となりました。ジャンヌ・ダルク、乙女よ行ってフランスを救え！カール・Th・ドライヤーの『裁かるるジャンヌ』以来、数々の映画で日本人のわたしたちもよく知っている、15世紀フランスの物語を山岸凉子がマンガに！という興奮から6年が経ち堂々の完結です。ロレーヌ地方の田舎町からでてきて、イギリス軍に包囲されたオルレアンを解放し、王太子をランス大聖堂でシャルル7世として即位せしめたこの「オルレアンの乙女」の物語は、この戴冠式を栄光のクライマックスとして、しかし火刑に処されるまでのみちゆきこそが物語としての核心でもあります。夢と現実とのあいだで、声と肉体とのあいだで、少女の心は信じまた迷います。戦場を駆け抜け、牢獄に繋がれ、火刑台に上げられるジャンヌ。山岸凉子の描くの世界の中で、我々もまたその歴史の証言者として立たされているような気持ちです。

教員 / 戸田穰

## 「惑星クローゼット」つばな

- 可愛い絵柄と独特なセンス。捉え方によってはちょっと怖い不思議な話を書かせたらピカイチな作者つばなさんの、ホラー要素を十分に堪能できる作品。色々な伏線が張り巡らせてあるので2週目はまた違った見え方や発見があって面白い。4巻で見事に伏線も回収し完結したこのタイミングでは是非読んで欲しいです。

会社員 / 小野塚博之

## 「わさんぼん」佐藤両々

- 京都の和菓子屋に見習いとして入った東京男の主人公を通して、普段知ることの無い和菓子店の日常や和菓子の世界、そして京都のいけず文化に登場人物の恋模様と盛り沢山に楽しめる、お仕事ものジャンルの良作

住職・ライター / 蟬丸P

## 「わたしの幸せな結婚」顎木あくみ、高坂りと

- とにかく絵が綺麗で繊細。それぞれのキャラクターの心の動きが丁寧に描かれていて、なんとも素敵な2人の関係が、読んでいて引き込まれます。ぜひ幸せになって欲しい！

コミック担当 / 実松由夏

## 「私のジャンルに「神」がいます」真田つづる

- 同人誌界隈には詳しくなくても、各話の登場人物の気持ちが痛いほどよくわかる。嫉妬や憧れ、創作する人にとっての原動力。ラストを読んで確信しました。「神」は創作者ではなくおけばのような純粋に作品を楽しんでその気持ちを素直に発信できる「読者」なのだと！

会社員 / 内野智未

## 「ワンダンス」珈琲

- 詳しいことを知らなかった世界への興味、憧れ、尊敬を、思い切り湧き上がらせてくれるパンチ力を持った作品が大好きなのだが、今回はこの作品がまさにそれ。音や振動が伝わるほどに圧倒的迫力で描かれるダンスシーンは、ダンスなんてろくにやったことない身体を読みながらに動かしたり、ダンス動画を検索してあれこれ見たくさせる、そんなパワーを持っている。カワイイとカッコイイの切り替わりが、本当に最高。主人公たちの不器用だがピュアな想いの行く先と、これしかない！という世界を進んだ先で魅せ続けてくれるであろうダンスは、一人でも多くの人に見届けてほしい。

会社員 / 伊東敬祐

- これを読んでダンスはじめました (45 歳)。

文筆業 / 海猫沢めろん

## 「ワンナイト・モーニング」奥山ケニチ

- ワンナイトをテーマに、カップルの恋愛模様を描いたオムニバス作品。何かが起きたワンナイト、何かに気づいたワンナイト、何もなかったワンナイト、何かを失ったワンナイト、何かが始まる予感がするワンナイト。ショートストーリーでありながら数々のドラマがあり、それぞれの話に胸が打たれる。作者の優しいお人柄が見えるような愛のあるストーリーと、可愛い絵柄が抜群にハマっている。各話にある食事シーンもじわりと感動を呼んで、毎回読むのがとても楽しいマンガ。永遠に読みたい。

デザイナー / シンガーソングライター / 平松新

## 「Op - オブ - 夜明至の色のない日々」ヨネダコウ

- 人物の心理描写が緻密で何度読んでもこのストーリーには引き込まれてしまう。保健調査のミステリーもので主人公は少し不思議な力を持ち合わせているものの、だからと言って現実からかけ離れ過ぎていない。だからこそ夢中になってしまうのかもしれない。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

## 「島さん」川野ようぶんどう

- しがない初老のコンビニアルバイト。でもその背中にはあるものが……。ほっこりする内容に緊張感が走る。今後語られるであろう人間模様も楽しみです。

本と文具ツモリ / 津守晋祐